
少年少女のソノリティ

佐久間 朔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

少年少女のソノリテイ

【Nコード】

N3897Y

【作者名】

佐久間 朔

【あらすじ】

何ともない平穏な旋律の中、相対的な音を持ちながらも愛する少女と出会い、同意的な音を持つ親友達と青春を謳歌する。時には喜び合い、怒り、悲しみ、そして笑う。親友とは音を通して世界を広げて思いつきり楽しみ合う。そして少女とも笑い合い、冗談を言い合い、そして愛する。そんな一小節の日々。
ーさあ、今を全力で楽しもう。

ただいまエブリスタでも連載中

完結次第直すとか言っていましたでしたが直したい気分になったので直します（何と自分勝手な）。とか言っておきながら時間がないため断念。機会を作って直します

閉幕曲（前書き）

前のアカウントを消しての再投稿です。
題名とか色々いじっています。

開幕曲

「春。俺さかがみよしきー阪上芳樹は高校生になった。と言っても半分くらいは地元の友達だったりするからあまり変わり様がない気もするのだが、やはり新しい所は胸が踊る。」

俺の通う学校：狭丘学園。4階建て3棟、温水プール完備、ライブスタジオ完備というなんとまあ公立高校の割にはやたらと設備の良い学校だ。

入学式なので、小学校からの友人 南部幸平>なんべこうへいくとこの学校の入学式に来た。短髪で容姿端麗どちらかというところ可愛い系か？凄く優しい雰囲気俺の親友だ。

「やっぱり、新しい学校はいいねえ……」

今縁側にいるおじいちゃんの様なほんわかした表情だ。これが女子の心を捉えるのか？と思う。

「言っておくけど、芳樹もかっこいいからね？」

「かっこよくなるはないが……どうやって心の声を読んだ？」

「高校で良い事有るといいねえ……」

「いや、話の話題さりげなく変えないでくれない？」

「あはは…ごめんごめん。でも、ちょっとワクワクしない？」

確かにそうだなと言い返し、何と無く校舎を仰ぎみる。

彼処の3年間でどんな出会いがあつてどんな人と会つてどんな風に過ごすのかな…

「…芳樹、カッコつけてる？」

「今の感傷的な気分返して！」

ポコッと殴つた。幼馴染つてのはいいけど心の中まで見透かされるから嫌だ。

俺たちは入学式が行われる体育館に入ってきた。ここで一緒にクラス発表も込めてしてしまうらしい。張り紙に貼つて有るクラスの名簿を見てクラス別に座るらしい。

「おい、芳樹くん！幸平くん！

こつちだよ！」

ソプラノが響いた様な声が出た。隣を見ると幸平が笑顔になつてた。分かりやすい。

「真琴さん！同じクラス？！」

「うん！芳樹くんもだよ！宜しくね？」

「ああ、真琴さん。宜しく！」

俺たちが真琴と読んだ女の子…磯部真琴だ。俺の場合は中学からの友人。幸平は幼稚園の時の幼馴染らしい。

150cmぐらいしかない身長。茶髪黒目…この茶髪は地毛らしい。後ろに一本で束ねられてる髪はどこか尻尾に見える。

何処かリスの様な小動物を彷彿させる。目とか完全にリスだしさ…！

で、幸平の好きな人。こんなに分かりやすかったら直ぐに分かるよな。不思議な事に真琴さんはわかってないんだ。

で、真琴さんは幸平の事が好き。前にもバレンタインデーやら何やらで相談されてる。

もう、焦れたい…何かのラブコメを見てみたいな感じだ。

「でさー…でねー…」

「へー…それってさー…」

あら、見事に二人の世界になって俺は取り残されたよ…

とりあえず入学式が始まるまで寝る事にしますか…

俺が起きると入学式が始まった。後ろにいた金髪のいかにも遊び人みたいな奴に起こされて気づいた。隣は幸平なのだが…まだ真琴

さんと話してらあ…

色恋もいいけど、少しは親友と見ろや。

いろんな思いを混ぜて幸平の足を踏んだ。

叫び声が響いたのはしょうがない。お前が悪い。

始業式が終わると教室に入らされ教員が来るまで待機になった。

俺はたまたま隣になった幸平と話していた。

「今日、芳樹の家に行つていい？」

「ああ、いいぞ。でも、散らかってるからな」

「ああ、ギターね…触らせてくれる？」

「構わんよ」

今出たけど、俺はギターが好きだ。Freedomってバンドにハマって始めたんだ。

かれこれ2年はやってるのかな。やるほどハマるから楽しいんだ。

「…寝るから適当に起こしてくれ…」

「ん、分かったよ」

そうして俺は意識を閉ざした。

何か夢を見たが…忘れた。とりあえず、帰って幸平と遊ぼう。

隣にいる幸平に声を掛けて学校を後にした。

閉幕曲（後書き）

感想お待ちしています

遭遇歌（前書き）

初めは芳樹君の夢です。

遭遇歌

何か夢を見た気がする…横には髪の毛の長い少女。
俺は彼女と手を繋いで歩いている。
周りには幸平達がいる。

なんだろう…暖かい…

俺は少女に向かって話しかけてる。

なあ、ほーー

なあに、芳樹

—————

私も

そしてホワイトアウトして行くー

目覚ましの音が聞こえている。

もう起きなきゃな…

ふと時間を見ると8:00。いつも目覚ましはこの時間だからこの
まま寝ても大丈夫かな…

いや、ちょっと待て。今日学校じゃないのか？

ガバッと起き上がり、万能時計で日付と曜日を確認する。 4 / 1 0
木曜日。 天気は晴れ、湿度は40%…ヤバイ！

咄嗟に布団から飛び降りようとする足が纏れ、いい感じに頭から
床と衝突した。 痛い…

朝ご飯作らなきゃと思ったけどやめた。 適当にブロック食品を食べ
て腹を満たす。

ウチには母親も父親も居ない。

居ないと言うのには語弊があるが、父親は他県で赴任中。

何にも新しい事業の開発で責任者に大抜擢されたとか。

詳しくは知らない。

で、母親の方はその父親を追いかけて行った為、俺は1人寂しくこ
こで暮らす…と。

それが分かったのは高校に受かってからだったから今更受験し直す
のが面倒だった、というのもある。
友人が居るからもある。

さて、部屋をかたして必要な物をエナメルバックに詰め込んで家を
出ると既に8:15過ぎだった。
何に手間取ってたのやら…

今から走って行けば…多分間に合う筈。
と思い、バックを担ぎ直して走り出した。

「ぜえっぜえっ…」

ずっと走り続けるのは酷なのだ。でも10分近く走り続けると思う。でもそのお陰で残すところ学校に着く直線道路だけだ。ここまで来れば多分間に合う筈だ。

少し舐めてた。と言うのも自分のクラスは下駄箱から最も離れた場所にあったのだ。いや、今思い出した。

と言うわけで俺はまた全力疾走。階段とか2段飛ばしです。バックが取り残されない様にギシギシ音を立てて耐えてる。

「そこのお前！危ないから止まれ！」

凜とした声が聞こえた。

上を見てみると黒髪がなびいていた。つか、どんだけ髪なげなんだ！腰まで有るぞ？

これが一瞬の出来事。体は動かずその女子に突っ込んで行った。情けなさすぎる…

「ぎゃあー！」

「うわっ！」

咄嗟に庇おうとして俺が下敷きになる。床に叩きつけられた瞬間、肺から強制的に二酸化炭素が吐き出された。

「ごほつごほつ…大丈夫か、あんた？」

自分の体の上に覆いかぶさってる少女に話しかける。少女は心配と憤怒が混ざったような顔で見て来た。何と器用な…！

「走ってくるからでしょ！大丈夫、あんた？」

「大丈夫だから…早くどいて」

色々マズイんだ。何がマズイかは想像にお任せします。

少女が退いてくれると急いでたことを思い出した。

「とりあえず、急いであるから…」

キーンコーンカーンコーン…

よく聞く学校のチャイムが鳴った。つまりは8:30、HRが始まる時間。

遅刻って事。

俺は少女に早く教室行けよと声を掛けて慌てて教室に入る。

そこには担任の初老の人が居て、頭を出席簿で叩かれた。

初日から遅刻とか最悪だ…！

遭遇歌（後書き）

感想お待ちしています

将来の親友の登場曲（前書き）

幸平君と真琴さんやらかしています。

因みに芳樹君はハイスペックな高校生です。

将来の親友の登場曲

「やあ、間に合わなかったねえ……」

「走ったから間に合うと思ったんだけどな」

隣にいる幸平が話掛けてきた為、振り向く。

「何か災難だね。僕が起こしに行つてあげれば良かった？」

「男に起こされる趣味は持ち合わせてねえよ」

やめてくれ、開眼一番こいつの顔とか。生きてる心地がなくなるわ。

「あはは。で、何で遅れたの？今日のテスト勉強？それともギターでもやってたのかな？」

「ああ……ちよつと音のレパートリーを増やしたくてエフェクターをちよつと……え？テスト？」

え、何それ。聞いてないぞ？

「うん、何か新入生テストするって言ってたよ？」

「え、知らないんだが……」

「いや、しっかり帰りのホームルームで言ってたよ。主要三科目のテスト」

……マジすか。昨日寝てた時か？

「芳樹、爆睡してたからねー」

「いや、起こせよ!」

声を張り上げたため近くの女子がビクッとさせてしまった。誤った所で…

ガララッ!

「をし、テストやるぞ〜」

もう諦めた。しるか、テストなんて。適当にやって睡眠時間確保したるわ。

「おーい?芳樹?早く顔上げて?」

「…嫌だ」

中学校の復習に近かったからそんなには難しくなかったけどさあ

「…分かるか、幸平?この漢文を現代訳しろなんて?」

「ああ、分からないよねー…あついう問題は嫌いなんだよねー。」

できない仲間を見つけて喜ぶのは性だと思う。で、開き直ると。皆もするよな…え、しない?

「だよな！無理だよな！」

「うん、それだけできなかった気がするよ」

一瞬でも仲間だと思った俺が馬鹿だった。今から制裁を…

「2人で何話してるのかな？」

真琴さんが話しかけてきた。うん、1日ぶり。

「や、やあ真琴」

「よう」

どもりながらも返す幸平と俺。こんなに好意が体面に現れてるのに気づかない真琴さんも凄いものだ。いや、真琴さんも同じ様な感じだけ。

「いや、ちょっとさっきのテストの話をしていてね…それでできなかった問題あったという話なんだけど」

「へえ…そう言えばわたし数学ダメだったなあ…」

「真琴さんは数学？僕は漢文だめだったよ」

「え？そうなの？じゃあさ…」

「えー、何？」

わいわいきゃいきゃい、完全に2人の世界。世界が終るまでは…いや、違うか。

俺の目の前でいちやつき始めましたよ。真琴は真琴でむっちゃ笑顔だしさ。

「もう、お前ら付き合っちまえよ。そう俺は思った。いや、誰でも

思う筈だ！

「すげえな、あいつら…あれで付き合ってたねえんだろ？」

ほら、居た！嬉しくなって振り返ると昨日起こしてくれたキャラチャラした男がいた。確か…

「紗東？」

紗東翔一と自己紹介してたのを思い出す。うん、クラスメイトの名前を頑張って覚えるのが溶け込む第一のコツ。

「何て、他人行儀な！翔一て呼んでよ！俺も芳樹って呼ぶからさ！」

やっぱり、言う事はチャライなあ…いや、これでチャライとか言っていると小説の登場人物で会った途端に下の名前で読んでくれというのが全てチャラくなるんだけども。

「ほらほら、遠慮しないの！呼んでみ、芳樹？」

俺の沈黙は困っていると解釈されたらしい。まあ、別に読んでも良いんだけどね。

「ああ、宜しくな翔一」

「お、呼んでくれた。宜しく頼むぜ、芳樹！」

友達1人できました。

「そっいえばさ、俺ベースやってるんだけど…芳樹は何か楽器やっ

てるの？」

「うん、ギターなら…」

「えっ、マジかよ！一緒にバンド組もうぜ！」

何か結成したのが40歳ぐらいだった有名バンドを彷彿させる様なワードだけど…

「やるうぜー！」

悲しいかな、楽器を持つてる人同志は仲が良くなりやすいんだ。

将来の親友の登場曲（後書き）

感想お待ちします

周りの素晴らしい音符達（前書き）

色んな人の小説読んできると…何か文字数が少ない様な…

周りの素晴らしい音符達

朝、俺はもう遅刻しない様にしっかりと目覚ましをかけて定時に起きてコンビニで昼飯を買って学校に着いた。

教室に入ると幸平と真琴さんが話していた。大方、一緒に登校と言う事だろう。

「あ、おはよー芳樹」

「おはよう、芳樹くん」

「おっす…相変わらず仲がよろしい事で」

軽い皮肉を入れてやった。朝からいちやつかれると満腹感が凄いのだ…逆恨みでは無い、決して。

「やだあ、仲が良いなんて…」

「ねえー」

ダメだ…バカップルにはこんなの効かねえ…

「おっす、芳樹…何、この雰囲気」

肩に手をかけられたから振り返ると翔一がいかにも爽やそうな顔で居た。

「やっぱ、あいつら付き合ってるんじゃない？」

「俺が知る限り付き合ってるとかは聞いてないぞ？」

「でも…あれ相当年数の経ったカップルの会話だぞ？」

耳をすませば（これが何なのか分かる人は拳手）「明日はおこしてあげる」やら「明日はたまには変わった喫茶店で」だの、聞こえてくる。

「うっわ、本当だ。甘ったるい」

見るに耐えない映像だ。どっかの動画サイトに投稿したらきつと「リア充氏ね」って帰ってくるだろう。ほぼ100%

「で、あいつらどうするの？」

「…ほっとくしかないよ」

中学から同じだから分かるのだが、ああなると止められなくなる。時々グループ学習で同じ様に甘い雰囲気を出してて教師も呆れたぐらいだ。

因みに俺やそれなりに知ってる友人は生暖かい目で見てた。

「じゃあ、ほっとこう。どうせ、止めらん無いんだろっ？」

うん、と返しバカップル共を眺める。よく、飽きないね。

HRが始まると流石に甘い雰囲気は無くなった。HRが始まってても雰囲気を出してたのなら本格的に引き離す事を考えた方が良い気がする。

担任曰く、今日から1週間で部活動を決めるらしい。提出用紙やら

部活動一覽用紙を渡された。まあ、元々軽音楽部入るつもりだから明日にでも出すかな。

HRが終わると翔一と幸平が俺の所にやってきた。

「翔一と芳樹は軽音楽部だっけ？」

「おう、そうだな。前に翔一とバンドを組む約束をしたしな」

結構軽いノリだったけど、こいつなら何だか行けそうな気がしてきてから…本気でやる事にした。

「んで、幸平は真琴さんとどこに入るんだ？」

「…僕は翔一の中で真琴とどっかに入るのが普通になってるのかな？」

「うん」

「悪いが、俺もそう思う」

「まあ、事実なただけだね」

マジかよ…部活内であの雰囲気を出したなら…部活崩壊しそうだな…アーメン。別にキリスト教徒
と言っわけではありません。

「で、どこに入るんだ？」

「うん、天文学部にも入ろうかなと」

「へえ、幸平って星とか好きなの？」

いや、俺も知らない。どうなんだ？

「いや、そっいうわけじゃ無いんだけど…まあ、真琴が興味あるか

ら入りたくなっただけなんだけどね」

結局、それかよ…と思ひ溜息をつく。どうにかしてくれ、このカッブル。

初めての授業…昨日やった筈のテストが返却された。何か添削早くなえか？仕事量凄いな。

「うっわ、最悪…」

で、結果は全体的に70点台。流石に凹む。中学生時代は90点連発だったんだが…やっぱり高校の勉強は難しいということだろう。明日からは頑張らねば…

「芳樹ー…どうだった？」

「んあ、平均70ぐらい」

すると幸平はびっくりした声で叫んだ。

「凄いね！慌ててきて遅刻したのに…実は勉強してた？」

「いや、全く。つか、これって中学の復習だろ？そんなに難しい訳じゃ…」

「これさ、相当難しい問題集から引っ張ってきてるらしいよ」

…へえ、道理で習ったやり方じゃ解けないわけだ。

「俺、勉強したけど平均30だからな」

と翔一が見せびらかす。

「芳樹はなんやかんや言ってるよねー。凄いよ……」

と幸平が笑いながら言う。まあ凄いのかな？と適当に流す。

「流すな！俺がいたたまれない！」

「ごめん、スルー。」

昼食、俺は今朝のコンビニ弁当を広げた。冷めても美味しいのが弁当だと思う。

で、幸平は真琴さんに引たくられてどこかに行った。今は翔一が前の席に座ってる。

「……お前飯は？」

「いや、もうすぐで来るよ」

何言ってるんだ、こいつはと思うと翔一くんと呼ぶ声があった。

「おう、緋奈……いつもありがとな」

「いえいえ……将来の予行演習ですしね」

小綺麗な人が入ってきた。茶髪に少しフワフワしたような髪。全体的にお嬢様みたいな雰囲気を出している。ここん所びっくりするこ

とがたくさんありすぎだ。

「し、翔一。その人誰だ？」

すると翔一は何とも言えない表情を示し、女の子は笑顔になった。たまたま近くを通りかかったクラスメイト（男子）は思わず見入っていた。

「ええとね…こいつはね…」

「翔一君と私は許嫁です！」

へえっ…って許嫁え？！

どうなってる、俺の周りは！

周りの素晴らしい音符達（後書き）

好きです、ジブリ映画。

シンクロデュエット(前書き)

登場人物が揃いつつあります。

シンクロデュエット

「おい、緋奈！芳樹が混乱してるぞ！」

「あらあら…どうしましょう」

うふふつと上品に笑う。

「で？説明してくれんか？」

「…ああ」

翔一が緋奈と呼んだ女の子は銀中央緋奈と言い、翔一の婚約者。

銀中央家は紗東家と親同士が同級生でもし男と女が生まれたら結婚させようと宴会でノリで決められたらしい。

この場合、後悔してるのはどっちやら…

でも、銀中央さんは嫌では無くむしろ翔一と一緒になれる事が嬉しいらしい。なので婚約は破棄されずに残ってる、と。

「これどこの漫画の展開だ！」

「ちよ、芳樹?!」

「あれか?! 幸平といい翔一といい独り身の俺に対する侮辱か?!
ちくしょう!」

「落ち着けー!!」

「はあ…落ち着いたか？」

「うん…」

そりゃ落ち着くよ。翔一に思いつきり頭から水をぶっかけられたもの。お陰でワイシャツはビショビショだ。今はベランダに干して有る。

ふと周りを気にしてなかったから見てみると俺に同情するような目で見てきてるクラスの女子。

お願いだからそんな目で見んな。悲しくなるわ。

「ふう…しかし婚約者ねえ…」

「そんなの昔に滅びたもんだと思ってた」

確か一家の当主が娘を嫁に出すとか前に歴史で学んだ気がする。

「私は滅びてないと思いますよ。現にここにいますから」

と言って翔一にキスをした…てえ？！

「おい、緋奈！何してんだ?!」

「何って、キス」

「そう意味じゃなくて、どうしてここでしてくるんだ!」

ギャーギャーワーワー。クラスからは翔一滅殺計画も練られてるっぼい。本当に殺さねかねん。

その言い争いは次の授業が始まるまで続いた。

出て行く際に銀央さんは

「今夜は全て搾り取って私が母親になるまで付き合ってもらいます！」

とどう考えたってそっちにしかとらえられないようなセリフを残して消えた。

放課後、部活動見学とやらがあるみたいで翔一に誘われたから行く事にした。

俺としてはさっさと帰って明日にでも部活動参加用紙を提出したいんだけどな。

まあ、雰囲気だけでも味わいに行きますか。

どうやら新入生歓迎ライブとやらやるらしく、俺はそれに行く事にした。

特設プレハブには人で溢れていた。ただ、全員が全員軽音楽部に入るわけでも無いだろう。多分、物珍しいから来たミーハーな人達だと思っ。

「うわぁ、スゲえな」

「だから物珍しさに来ただけだっつて」

「いや、まだ一回しか言っつてないよね?!」

「心の中で言っつたわ!」

「知るか!」

まあ時間つぶしになった気がする。

それから程なくしてライブが始まった。全員が静かになる所が凄いなと思った。

「今日は来てくれてありがとう！部長の立川です。最後まで楽しんで行ってくれたらなと思ってます。では、最初のバンド、どうぞ！」

と入場してきて最初の演奏が始まった。会場もみんな乗っている。隣にいる翔一も楽しそうだ。

ライブはプロアマ関係なく一体感が出るから楽しいんだよな。

最後のバンドは部長がボーカルを勤めてるバンドだった。

それなんだが…本当にアマかと言えるレベルでうまかった。リズム陣は安定しながらも自己主張してるしギターもやってるから分かるが慌てる事が無くてゆとりを持って引いてる。ボーカルも伸びが良くて高音も外さない。

それはロック曲でもバラード曲もはずはなかった。会場が熱狂に包まれる中、俺は完全に魂がそのバンドに奪われていた。

外に出ると俺はまだ体が熱を持っている事に気がついた。相当熱中したのだろう。

「やべえな…あのベースみたか？ステイニングレイだぞ…しかも学生とかのレベル超えてるだろ…」

「凄いよね」

高校の間…あの人達をリスペクトしたい。いつか一緒に…

「いつか一緒に対バンライブできるといいな」

「お、そうだな」

おっと、口に出てきた。

さて…帰るかな。翔一誘うかな。

「あ、あんた！」

「んあ？何だ？」

振り返ると腰まである髪の毛。見事な黒だ。真琴さんや銀央さんは可愛い系だとするとこいつは美人系だろうか。

「おい、この美人さん誰だ？知り合いか？」

いや、知り合いならお前とか言わないだろう？…とりあえず言っ事は
ーっ！

「…誰だ？あんた？」

正直、覚えがない。女の子がガクッとこけた。お、ドリフだ。

「こら！少し前に階段で走るなど注意したでしょ？」

あー…何か居た様な居ない様な…

「…うーん…ああ、あのときの一緒に遅刻した仲間か？」

「仲間じゃないわよ！お陰である日は遅刻だったんだからね！」

「大丈夫だ、俺も遅刻だ」

「あんたは自業自得だろーが！」

ギヤーとか言い始めた。周りがこっちを見てるよ。うるさいからボリューム下げないか？目の前の少女はそれに気づいたのか赤くなつてボリュームを下げてくれた。ほっ…

「…えと…ごめんな？」

こういう時は素直に謝る。それが正しい。巻き添えにしちまったんだしな。

「べ、別に良いわよ」

何か更に赤くなった。きつとあっさりと謝られたから恥かしいのだろう。

「赤尾穂奈美」

「え？」

「私の名前よ。で、あんたは？」

「坂上芳樹だ。気軽に芳樹とでもさかみんとでもよしきんとでも読んでくれ」

「何よ、それ…分かったわ芳樹。私も穂奈美で良いから」

因みにさかみんは俺の中学時代のあだ名な。その頃何かと人の名前を
を　みんとか呼ぶブームがあつて、さかみんと呼ばれたと。

「穂奈美ちゃん、ここにいたんですか？あら、翔一君に芳樹君」
「おう、緋奈か」

銀央さんだ。つか、銀央つて苗字すげえよな、誰だ考えたやつは。

「穂奈美さんと知り合いだったのですか？」

「いんや、俺は今知り合った。芳樹は階段で衝撃的な出会いをしたらしい」

「衝撃も受けたけどね」

誰がつまい事を言えと。

「私、穂奈美さんと同じクラスで初めて話したお友達なのですよ」

「ほうほう…あ、穂奈美？」

「何、芳樹？」

「あんな、銀央さんとそこにいる翔一はな…」

許嫁だと言つとびっくり仰天。俺と全く同じ反応したよ。

俺は気まずくなくなって顔を逸らし、銀央さんと翔一はニヤニヤ。
分かってない穂奈美は首を傾げていた。

シンクロデュエット(後書き)

アクセス数伸びますように(笑)

固まりつつある和音達（前書き）

実は…40話近くストックあります。今はそれを編集して投稿し
できませんがね…

固まりつつある和音達

数日後、部活動参加用紙を提出した俺らに軽音楽部から今日ミーティングがあるから集まる通達が来た。多分、顔合わせとかするんだろうな。

「なあなあ芳樹？」

「うん？」

「敵つい奴いるかなあ？」

「日本語使い方おかしくねえ？」

凄いやつに言い換えた方が良からうに…

「あれ、芳樹達集まり有るの？」

と幸平が話しかけてきた。何かニコニコと上機嫌っぽい。

「らしいぞ、ほれ」

俺は幸平に紙を見せてやる。

「へえ、もう集まるんだ。天文学部なんか来週の月曜日に集まるかららしいよ」

「ありま、案外遅いのね。で？」

「でって？何さ、翔一？」

「真琴さんと入るの？」

ニヤニヤニヤニヤ。真っ赤になる幸平を見て何か完全にゲスっぽいにやけ顔の翔一。ただ、俺は注意できないぞ？

だって、俺も何かニヤニヤしてんだもん！

天文学部にはごめんだがとりあえず惚気まくって当ててやれ。
そしてまだ見ぬ天文学部よ、アーメン。

放課後、指定された教室に入る。まあ視聴覚室ってやつだ。するともう人が来てたのか20人ぐらいの人が入ってた。

「やつほー、芳樹！紗東くん！」

と呼ばれたから見てみると穂奈美と…あれ、銀央さん？

「おう、二人とも…軽音楽部だな？」

「そうよ、じゃなきやここに居ないわよ」

「私もそうですよ、翔一君。手取り足取りバンドってのを教えてく
ださいね」

「あ、ああ…」

何かどもる翔一。

どうにも穂奈美は中学校で合唱団に入ってたらしく歌はそれなりに
は…と言ってた。実際聞いてみないと優劣はつけられないから保留。
そのうち拝聴したいものだ。

で、銀央さんは穂奈美に誘われたらしい。何でもピアノをやってる

らしいね。

その手のコンクールに何度も出て賞を取ってるらしい。因みに翔一
お墨付き。

「へえ、じゃあ翔一さんとバンドやるの？」

「まあ、そうだな」

「頑張ってくださいね、ライブ絶対に行きますから！」

「うん、そうだね……」

何か翔一の様子が変だ……いや、進化はしないけどね。

「どうした、翔一？」

「……あんな事があったからまともに緋奈を見らんない」

「はあ？」

何にも……あれだ。男女の契りってやつを昨晚ずっと翔一が枯れるま
でやらされたらしい。そういや、銀央さんいつにまして輝いてるよ
うな……？

いや、気のせいだ。気のせいであると願おう。

「翔一くん……恥ずかしいからあまり人に言わないでください……」

「……」

もうダメだ、こいつらも。

ほど無くして部長と……顧問かな？が入ってきた。

「おうおう、新入生ども……よく来てくれた、ありがとう……」

どんにも部長はフランクな人らしい。前に立ちながらもヘラヘラしてる。

「俺の名前は…いいか。そのうち教えるわ！顧問は…いいよね？」

「いや、一応名乗ろうよ？顧問の古利根です。宜しく」

ぺこりと頭を下げた。礼儀正しい人だと勝手に評価。

「じゃー俺かー…立川でふ」

でふ？！そんなツッコミが思わず声にしまった俺。

「あ、いや…すみません」

「何さー、謝る事ないよー。ツッコミありがと！」

気にせず話し出す部長こと立川先輩。あまり細かい事は気にしない人なのかな。

で、これから1週間かけてバンドを固めるらしい。人数は自由だけど流石に20人まとめ一つのバンドは勘弁してくれと立川先輩から。うん、俺もそれは怖いと思う。

「えと…あんたら経験者か？」

「こいつは昨日だ」

「多分、そつちじゃない。つか、変なこと言うな！」

振り返るとむすっとした男が立ってた。メガネかけてどこか理知的だ。

「いや…あんたらは何か楽器をやり続けているのか？夜の方ではないからな」

ありやま、何か悟られてらあ。

「一応、俺はギターは3年。翔一は？」

「俺も3年だ、因みにベースな」

すると男は笑みを浮かべた。これ、女泣かせの笑みだな。

「良かった。俺はドラム10年やってるんだ。どうだ、一緒にやらんか？」

「ちよええ?!」

10年だと!…って事は…6歳から?!

「ああ…親父がドラムやっててそのおこぼれを貰ってな」

「ひよえ…すげえな」

びっくりしてると男の子は改めてこういった。

「で、俺をドラムとしてバンドにいれてくれないか？」

翔一に目配せをするとうんと肯定の意思が帰ってきたので決めた。

「ああ、宜しくな!」

ドラムゲット。後はボーカルだな。
もっと時間がかかると思ってたんだけど…案外あっさりしてた。

固まりつつある和音達（後書き）

何かお気に入り登録をしてくれた方が1人…ありがたやありがたや。

頑張りますねー！

これが次は水曜日に更新する予定です。

四重奏楽団の結成（前書き）

さて…元の話より多くなってきました。

四重奏楽団の結成

「お、そうか！俺は遠藤信汰って言うんだ、宜しくな」

「ああ、俺は坂上芳樹」

「んで、俺は紗東翔一な」

簡単な自己紹介を行った。うん、結構行けそうだね。

次の日、俺はバイトしてると言う信汰は置いて翔一とボーカル探しに繰り出した。

「でも、どうやって探すのさ？拡声器使ってボーカルやらんか？とか聞けないだろ？」

「いや、何か前にコンタクト取ってきたボーカルが居たからそいつから当たろうと思う」

「…いつも間に翔一の所に？」

「昨日の後に話したんだ」

どうにもあの後解散した時にもう一人着たそうなの。

「で、会えんの？」

「ん、校門に居るらしい」

「んじゃあ、ま、行くか」

教科書やらノートをバッグに入れる。関係無いが筆箱はいつも置いて帰っている。帰ったってシャーペンぐらいはあるからね。

「うっわ、こいつ教科書持ち帰ってるよ」

「…翔一は持ち帰って無いんか？」

「もち！」

「いや、威張れないからね？」

それよりも早くしようぜと言われたので走った。

さて、どんなやつかな？

校門に行くとなーんか目が細い…狐っぽいのがいた。うん、名前聞くまで狐で行こう、うん。

「おっす、ボーカル志望」

「ちいーす、ボーカル志望でっす」

「ははっ…一応暫定リーダー連れてきたぜ？」

「おお、宜しくな！」

「あ、ああ…」

何だ何だ？何か流される。会話に着いて行けてない。

「で、名前は？」

「えっ…坂上芳樹だ」

「宜しくう！俺は権大寺龍な！」

「あ、宜しく…」

すっげえ名前。純和風やん。親は寺の人か？

「そっだ、言っとくけど俺は寺の人じゃないからな。いつも自己紹

介の時に聞かれるんだよなあ」

「へえ…そうなんだ？」

何とも掴みづらいやつだな。

「で、俺は入れてくれんの？」

「ん、ああ。因みにボーカルどんくらいやってる？」

「中学の時にやってたから3年目かな。歌自体は小学校から歌ってるから多分ピッチはハズさねえよ」

「へえ、凄いな。小学校か…」

何かドラムの信汰と言い龍と言いとんでもないのいないか？

「あれ、お揃い？」

すると信汰が下駄箱から出てきた。何かしてたのかな。

「この人ドラムか？」

「そうだね…こいつはボーカル志望の権大寺龍」

「ん、宜しくな。遠藤信汰だ」

「で、これで形になったのか？」

形になりすぎだ。凄いのが集まりやがった。

後日、スタジオに行く事になってこの場は解散になった。

数日後：スタジオの帰り道。あいつら本当凄かった。龍は高音から低音まで安定してるし翔一のベースも良かった。リズムを崩さずにベース以上の働きをしていた。信汰はタム回しが良かった。高校生からツインペダルとは思わなかったけど…

俺、大丈夫かなあ？翔一は大丈夫だとは言われたけど。あいつらを見てると萎縮しちまう。

「ふう…」

「何、溜息吐いてるの？幸せ逃げるよ？」

「えっ…お前か」

「お前か、じゃない！私は赤尾穂奈美って名前あるよ」

穂奈美に会った。手には…本屋の袋を握ってる。本屋帰りかね。

「で、何で溜息吐いたの？おねーさんに話してみなさい？」

「おねーさんって…同い年だろう？」

確かに知らなきゃおねーさんとやらに見えなくも無いが。

「良いの！良いから話してみなさい？」

「へいへい…えと…」

話してみた。集めた奴らが上手過ぎて着いていけるか心配なこと。居ても平気なのかという事も。

「えと…あんだバカ？」

「バカゆーな！」

これが悩みなんだぞ！しっかりと返事せい！

「えとさ、まだ一回しかやってないのに今からそんなの気にしてたら気が持たないわよ？何度もやってそれでダメだったら練習するなり何なり悩めばいいじゃない。モチベーション下がるわよ？」

「まあ、そうなんだけどさあ……」

それでもやっぱり不安だ。

「うーん……あ！じゃあさ、聞かせてよ！」

「はあ?!」

何言ってるんだ、穂奈美は？

「だからあなたのギター聞かせてよ。とーしろなりに評価するわよ」

「いや、でも弾く場所無いし」

「私の家が有るわよ！」

「男を呼ぶのはマズイだろ？」

「あなたヘタレだから大丈夫！」

「でも……」

「つべこべゆーな！」

「……はい」

押し切られた。これは将来かかあ天下築くね。

……何よ、心配してるほどじゃないわよ。普通に上手いじゃない。

「大丈夫じゃないかしら？」

「でもなあ…何か足りない」

「それなら足りないなりに何かしてみたらどうかしら？」

こればかりは本人しか分からないだろうね。

私には分からないこと。

「ありがとうな。帰るわ」

「あつ…夕飯食べて行きなさいよ」

「え、悪いし良いよ」

「別に気にしないから平気よ。それより、ね？」

どうしてだろう。ドキドキして何か帰って欲しくなかった。

四重奏楽団の結成（後書き）

感想をお待ちしています。

狂つ音符達(前書き)

うーん…話が伸びてる…下手すれば120話やりそうです。

狂う音符達

「…え、来週体育祭？」

朝一番、幸平に体育祭が来週に有る事を聞いた。

「うん、ほら学年通信の日程にも書かれてるよ」
「…知らなかった…」

俺はそういうプリント捨てるからなあ…提出プリント以外捨ててしまつ。それだから中学時代によく失態を犯したんだが…まあ良いや。

「んで…種目決めとかやらんの？」

「いやさあ…昨日のHRで今日に決めるって言ってたよね？」

「知らん！」

「えばらないで！」

呆れ顔の親友。ごめん、次からは気をつけるから…

自身は無いがな！

実を言うと体育祭面倒くさい。だって埃っぽいし砂埃凄まじいし暑

いし。

「芳樹ー！」

「うん？」

色々考えてると穂奈美が廊下に立ってた。銀央さんも居る。

「よう…翔一呼ぼうか？」

「はい。お願いします」

「おい、翔一！銀央さんだ！」

「あいよ、今行く！」

言い忘れたが今は放課後。朝言ってた体育祭の種目決めはした。すんなり決まったから楽だった。別に司会進行役では無かったが。

「ねえ、駅前のカラオケ行かない？緋奈と話してたんだけどね」

「ん、構わんよ。つか、行かねえと…」

「？何ですか、翔一くん？」

「…ナンデモアリマセン」

成る程、尻に敷かれるとはこういう事か。でも、尻に敷かれた方が生活は安泰らしいな。

「…シクシク」

「ありま」

心に思った事をそのまま口にしたら泣き出す翔一。…すまん。

「で、芳樹はどうする？」

ニコツと振り返ってこちらを見てきた。その表情に目を見開いたけど…ばれてはないよな？

「あ、ああ…うん、行くよ」

「よっしゃ！因みに真琴たちは行かないから」

へえ、何かあるのかな？

俺は深く考えなくて学校を後にした。

で、駅前のカラオケに着いた。平日だからやはり空いてる。

「…はい、4人です。フリータイムで…はい」

今、穂奈美が部屋を取ってるため俺達は少し手持ち無沙汰だ。こういう時って少し暇になるよな。

「…翔一？どうしてそんなに汗が…？」

「いや…お前、緋奈が歌う時に耳塞げ」

「へ、何で？」

いやと言っておきながら翔一は耳打ちをしてきた。内緒ごとってのは鈍く無いし分かる。

「良いから、塞いけ。悪いことは言わねえ」

「何だか知らんが…了解」

とりあえず、翔一の意向に従う事にした。

「ほら、何内緒話してんの？早くしてよ」

「あ、ああ今行く」

いつの間にか取り終えたのだろう。穂奈美は早くしろと言わんばかりに腰に手を当てていた。

カラオケっても歌うものは限られてる。ミーハーな曲は勿論、Freedomの曲を歌う。それなりにCMにタイアップされてるから分かる曲も多いだろう。

と言っても、ロック以外そんなにわからなかったりする。後はクラシックぐらいだが…どう歌えと。

「じゃあ、取った人から歌おうか？」

「え、良いわよ。芳樹歌いなさいよ。最後に良いわよ」

「え、いいよ。翔一は？」

「いや、先に歌ってくれ」

カラオケでよく起こりがちなのは誰が先に歌うか。日本人って遠慮がちだから先を譲ろうとする。…え、そんな事ない？

「しょうがない、じゃんけんにするわよ。勝った人から時計回りね」

「了解」

「最初はグー、じゃんけん…」

翔一が先になった。翔一 俺 穂奈美 銀央さんの順番だ。これで
座席順は想像できるかな？翔一の右隣に俺。翔一の左隣は銀央さん。
銀央さんの左隣は穂奈美…って感じだな。

「じゃあ、行っきまーす！」

翔一が歌い出した…曲は…校歌？！何でカラオケに入ってるんだよ！

「ふう…終わったぜ、はいマイク」

「ああ…てか、何で校歌がカラオケに入ってたんだよ！」

「え、古くからある学校は入ってるらしいよ？」

「なんだと…」

初耳だ。お経が入ってるのは知ってたが…

「それより、ほら」

「へーへー…」

予約してた曲が再生される。うん、カラオケって実際に聞いているの
と音全然違うから分からない時がある。今回もそのパターンだ。
まあ、慣れたけどさあ。

「へー… 芳樹 Freedom好きなんだ」

「へえ、知ってるんだ」

穂奈美にマイクを渡しながら聞く。

「まあ、それなりにはね。詳しくは知らないわ」

「CD貸してやるうか？」

「そつだね、貸してくれるかしら？」
「明日な」

了解と言うと穂奈美も歌い出した。最近流行りのアイドルグループの曲だ。実はそんなに聞いた事無いから楽しかったりする。あまり流行りには乗りたくないのだ。

「ふう…じゃあ次は緋奈ね」
「はい、頑張ります！」

といい、歌い出す。って、あれ。耳塞いだ方がいいんだっけ？

「¥ 〒×」
「げえ！」

何と言うか、声が高い！マイクがハウリング起こしてる！そして歌詞が聞き取れない！どんな声だ！翔一は耳を塞いでも顔を顰めてる。余裕が無い俺と穂奈美はそんな事をできる余裕がない。

「だから言っただる俺はこのハイハイソプラノが嫌だから耳を塞いで言っただ訳だから忠告したのにつて何でお前は腕を掴むお前も巻き添えだつて何でだそんなに力いれんな俺を巻き添えにするなやーめーろつわあああああー！」

とりあえず、癪なんで翔一も巻き添えだ。この瞬間、苦しんでる翔一を見て心から充実感したのはきつと気のせいであると願いたい。

そんな体育祭一週間前の出来事であった。

狂う音符達（後書き）

校歌がカラオケにあるという話ですが…これは昔からある由緒正しい学校だけあるそうです。

全部が全部あるわけではないそう。

まあ、ここではそんなの無視します。

競争歌（前書き）

想像以上に長くなっています。

二つに分ける事にしました。

競争歌

一週間経ち待ちに待たない体育祭の日。

砂埃の立ち込める校庭にイスを持たされ体育着に着替えて頭には青のハチマキ。これがクラスの判別する材料だ。

「さつて…嫌だなあ…」

「いきなり?!」

ツッコミを入れる幸平。それと苦笑をする翔一。

幸平は楽しみですと言わんばかりにニコニコしてる。翔一は…よく分からないけど恐らくワクワクしてるだろう。

「へへ、頑張ろうな」

訂正。こいつもそうとう楽しみにしてる。前日とかは普通だけれども当日にテンションMAXの奴なパターン…いや、無いか。

「はいはい…ビリにならない程度に頑張りますよ」

「一位取るつよー!」

「ええ〜…」

テンションが違いすぎる俺たち。

時は過ぎ場所は…過ぎない。さっきまで開会式だったのだ。校長が

ふざけたおしてコスプレをしてきたのは意外だった。そのおかげで誰か1人倒れたらしい。さっき救急車が搬送してるのを見た。これで中止にならないかと思ったけど続行するらしい。ちっ

「芳樹：お前から黒いオーラ出てるぞ？」

「早くおわらねえかなあ……」

「どうしたの？」

穂奈美か……あいつは赤のリボンだ。つまり敵チーム。赤尾穂奈美だから赤色か。なるほど。

因みにだが、学年毎に三色に別れている。俺たちの学校は6クラスあるので一色につき1学年につき2クラス、計6クラスで一つのチームが作られてる計算だ。

「よう、どうした？」

閑話休題。それよりも穂奈美だ。

「いや、芳樹って行事とか盛り上がらないタイプ？」

「違うけど……今回は異様に盛り上がらないんだ」

とにかく早く終わって欲しいということしか頭にない。

でも、そのうち熱狂して応援してそうで嫌だなあ……何か現金なやつっぽくて。

「きつとね、芳樹は照れてはっちゃけられないだけなんだよ」

「おい、幸平。変な事を吹聴するな」

「へえ、そうなんだ」

「ほらそこも理解したような顔しない！」

「ええ……」

「ええ〜…じゃない！」

「はにゃー？」

「はにゃー？……違うから！」

招き猫みたいなポーズを取って可愛いとは思わねえ！

「かななち……らのきせ？」

「最早、何言ってるか分からねえよ……」

「そうよ、確か芳樹が何に出るか聞きにきたんだわ」

「え、忘れてたんか？！」

「うん」

さっきの変な応酬は置いといて……確か俺は…

「棒倒しとリレー」

400持久走はどうだか分からないけど棒倒しはメジャーだよな。

「へえ……応援したげるから私は応援合戦と借り物競争出るけど応援ヨロシク！じゃあね！」

「おい、お前は味方応援しろよ！それと……」

「行っちゃったよ？」

はあ……しょうがないそれなりに応援してやるか…

白熱した棒倒しは終わった。何か肘に当たって歯が折れた奴が居るらしく保健室に緊急搬送されてた。俺も……何かテンション上がってしまった。

そして昼食を取り午後の部。

初めは応援合戦なので穂奈美の勇姿でも見てやるかと思いきやそれなりにワクワクしながら待っているとチアの服を着た赤組女子たち。穂奈美も居る。

「て、ええ?!」

周りもびっくり。翔一も緋奈さんを見つけてびっくり。幸平は…真琴さんに目潰しされてる。憐れ。

「ちょ、何だよアレは…」

「何でしょうね…」

俺たちはニヤニヤが止まらなかった。女の子達が前で笑顔で踊ってるし服が薄いから……なのでちょっとニヤニヤが止まらない。

すると翔一はいきなり青ざめた。

「どうしたんだ?」

「緋奈が…いや、何でもない」

そこまで言われると気になるのが性だが、震え方が尋常じゃないからスルーする。ギャグではない。

しかし、さっきからどうしても穂奈美を探してしまう。あいつの踊りだけ俺には映えて見えた。

「やあ、芳樹くん」

ニヤニヤニヤニヤ。盛大なニヤけつつらをしながら穂奈美さんが来ました。悪魔にしか見えない俺。

「はい、これ」

手渡されたのはさっき使ってたチアの衣装だ。どうしろと？

「好きにしていいいから預かってて！私これから借り物あるから持ってて！」

「あつ、ちよっとおい！」

行ってしまった。さつきから人の話を聞かない穂奈美。

「俺なら匂い嗅ぐぞ？」

「そんな変態チックな趣味は持ち合わせてないわ」

「それが緋奈のだったら…あ」

翔一の後ろに銀央さん。メアリーさんみたいなフレーズだな。

「そんなに私が欲しいならあげますよ、ほら！」

「ちよまチアの衣装渡すなそしていきなり体育着を脱ぎ出すなさっきのそういみじゃねえからつか芳樹笑ってないで助けるよ幸平逃げるなえ次が出番ならしょうがないつか緋奈泣いてるしあーちくしよっ！」

とりあえず、落ち着け翔一。

グラウンドを見ると借り物競争が始まるところだった。危ない見逃す所だった。入場門から退場門まで対角に走りその途中にある紙にしていされたものをもってくるルールだ。

おっと、スタートの合図だ。

穂奈美は周りと同じくらいに紙に辿り着き指示を見て愕然とした。どんな無茶だったのだろうか？

他の人はそれぞれ指定されたモノを取りに行ってる。

「すみませーん、腕時計ありませんかー？」

とか普通だと思える事や

「彼氏だつてえ？！居るか、ちくしょう！」

あちらではお題は彼氏だそうな。居ない場合どうすれば良いんだろうな。失格？

彼氏が居ないから失格って……不憫……

穂奈美は紙を見て悩んだ顔をするところっちに来た。

「芳樹、着いて来て？」

「え、ああ……」

何だか分からないが着いて行く。これって自分のクラスを裏切ってるような感じもするのだが……皆はそこまで考えてないのだろうか？

色々と思案してるうちにゴールに着いた。二着だ。因みに一着はさっきの腕時計の人。あれが一番簡単だったらしいからな。

「はい、紙をください」

「え、あ、どうぞ」

紙を役員に手渡す。そいつは普通に紙の内容を読み上げた。

「はい、『一番仲が良い異性』はこの方であってますね？」

「はい」

…ナンダツテ？ナカガイイイセイ？仲買制？ちゅうばいせいじゃなくって？そんな制度は無いがな。

「はい、結構です。お疲れ様でした」

「はい…芳樹、帰っていいわよ」

「ちよっ…待てよ」

とりあえず、穂奈美を引き止める。説明を求む！

「さっきのはどついう事だ?!」

「だから言ったじゃない。一番仲が良い異性の人って」

仲買制じゃなくて仲が良い異性。

「じゃあ、ね！」

手を振って穂奈美は帰って行く。一番仲が良いって事は…いや違うか。

頭に浮かんだ煩惱を振り払い次に男子借り物にでる幸平の応援に行く事にした。

アレ、体育祭楽しんでない？

競争歌の収斂（前書き）

最新話から来た方へ。

前話の続きとなりますので一つ戻ってください。

競争歌の収斂

どうやら男子の借り物競争も同じ様な感じになりそうだ。

さつき女子で使ってた紙をそのままにしてある。つまりは…そういう系の指示が沢山眠ってるのだろう。

あれ、内容によってはゴールできないらしい。恋人が居ないのに恋人とか。

体育祭実行委員が俺らに喧嘩をふっかけてるしか考えられない。

「幸平、頑張れー！」

真琴さんの応援だ。周りが五月蠅いから声援とか聞こえないはずだが…幸平はこつちを振り返り手を振った。

真琴さんがキヤーとか言ってるが俺としてはよく聞こえたなとしか言いようがない。

真琴さん限定地獄耳か？

また考え込んでるうちにスタートしていた。何かどうでもいい事に考え込む事が多くなった気がする。

さて、またお題がハチャメチャらしくタバコ貸せだのビールは無いかだの教師のカツラだの。叫びまくってるからこつちまでただ漏れだ。

幸平はまたしてもこつちに来た。…好きな同性とか勘弁な。ここら一体を薔薇色にしたかねえぞ。

「真琴、着いてきて！」

「は〜い」

良かった。一部にしか受けられないような展開にならないで。でもお題はなんだろう？幼馴染？仲が良い異性とか？

「なーんか、ラブラブだなあ……」

「それは周知だ。翔一」

呆れ半分、からかい半分の笑みを浮かべる翔一。どうでもいいが幸平はお姉様方に人気があつたりする。曰く、『守ってあげて安心したところを襲いかかりたい！』だそう。この先輩は……まあそのうち紹介するよ。

ゴールに着くと役員が紙を読み上げてる。

するとこちらからでも認識でぐらいに真っ赤になつてた。

どういふのだろうか。気にならない訳が無い。

いきなり泣き出した真琴さんと真っ赤な幸平。異様な光景だ。

「ただいまー！」

「どんなお題だつたんだ?!」

「私も気になる！」

「私もですわ！」

どこからか穂奈美と銀央さんが駆けつけてきた。あ、一箇所しかないね。

何か乙女センサーにでもかかったのか。目がキラキラしてる。どこかの少女マンガだ。

「えっとね……『好きな人』だつて……」

「うおっ!」

変な声をあげてしまった。周りの穂奈美と銀央さん、それとクラスの女子どもはキヤーキヤー言ってる。いつも忘れてるのだがこいつらまだラバーズじゃないからな。

「ようやく結ばれるね!」

「え、あ、う、うん」

「うわああああ!」

祝福するクラスメイト。照れる真琴さん。悲鳴を上げるクラス男子一名。あ、幸平もだ。羞恥で悲鳴をあげてるのだろうな。

「で、幸平?どうするんだ?」

「どうするって?」

「だってよお、ここまでしといて放置するのはどうかと思っぜ?」

口を挟む翔一。俺ら二人は幸平をいじる事にした。観客付きで。

「ああ、うん。…後で屋上に呼び出して有るから」

最後は2人にしか分からないように耳打ちをしてきた。

「そっか。後はお前の言葉で言うだけだ。頑張れよ?」

「うん…」

照れて返事する幸平。この後、さらにラブラブ度が上がるのはいつまでも無いだろう。

とりあえず、他でやってもらおう救済措置を取らなければならないと

思う。

そして、俺の出番。400mリレーだ。1人100m。俺以外に翔一と陸上部のやつ。

何で陸上部と混ぜるのかと文句を言ったのだが同じぐらいのタイムらしい。因みに早いもの順に並べたので陸上部A 翔一 俺 陸上部Bの順番になる。

陸上部曰く軽くストレッチしたほうが良いらしく、する事にした。

「なあ、芳樹？」

「何だ？」

前に動画サイトで見た手足の深呼吸をしていたところ話しかけられた。あいつは足を下げながら足の上げ下げ運動をしている。

あいつもあの動画見たな。

「何や感や言つて体育祭楽しんでるだろ？」

「言つな。数時間前の自分を今ポコポコにしてる最中だから」

怠いとか言いながら楽しんでる俺。所謂、結構単純。

「まあ、最後だし頑張ろうや」

「ああ」

パンツと乾いた音が響いた瞬間、静寂から喧騒になった。

今は陸上部A…？美川ってやつだ。早いのだろうけど…それ以外の奴がいかんせん早い。野球部やらサッカー部が混ざってる。

「おーい、？美川！ラストだあ！」

翔一の大声が聞こえてくる。あいつも張り切ってるなあ…と呑気に考えてると翔一にバトンが渡ってた。銀央さんに声援でも受けたのか知らないが急激に早くなった。

「おら、翔一。ペース落とすなよ！」

翔一がやった事を俺も真似して見た。俺もそろそろ準備を始める。靴紐は解けてねえな。大丈夫だ。

「ラストお！」

最後の直線。バトンをもらうべく腕を後ろに突き出す。

…今だ！

俺は徐々に走り出しいい感じに加速し出した時にバトンが渡された。

少ししてカーブ。前に1人…後ろには…いや、もう横にいる?! 足が重くなってるのを感じながら離されない様に力を入れる。

「芳樹ー！頑張りなさいー！」

どこからか穂奈美の声援が聞こえる。どうしてか少し楽になって隣の奴を抜かす。

最後の直線。最後は…確か風見だ。早くしろと言わんばかりにチラチラこつちを見る。

「風見！」

「俺は風鳥だ！」

そんな声が聞こえたがそれどころじゃない。春なのに暑い…

風見がゴールテープを切り喜んでるクラスメイトを見て一位になった事が分かった。

放課後…告白するからと言う幸平を置いて俺と穂奈美は帰ってた。

俺たちは学年二番。全校で8番と言うなかなかな成績だった。楽しかったから良かった。

「お疲れ様。体痛い？」

「そりゃそうだよ…」

全身から悲鳴を上げてる。歩く度に太ももが…

「私が全身隈なくマッサージしてあげようか？アフターケア付きでハートマークがつきそうで妖艶な笑みを浮かべてこつちに迫ってきた。」

「う、そ！」

「ちくしょう！」

こんな感じで俺の体育祭は終わった。

競争歌の収斂（後書き）

体育祭は終了。

でも砂埃って本当に凄いですよね。

風の日とかだったら最悪…

少女取扱い曲

体育祭明けて次の日の午後1時。俺、翔一、龍、真汰で痛い体を引
きずってスタジオに行っていた。

真汰はドラムだから体力が必要だとか言って毎日走りこみはしてる
ため筋肉痛にはなっていないが俺と翔一と龍が酷かった。

俺はまず足が痛くて立ってられないためイスを使う。そして何故か
腕も痛くて動かし続ける事ができない。

翔一は足が痛いと言えと同じ症状のためイスにボスンと座る。

龍は応援で声がガラガラだと。ファルセットが出ないらしい。

なのでやった曲を分割して練習する事にした。

「くっそ、ペダル操作だけで痛いぞ……」

「俺はベースで良かったわ……」

「本当、お前ら体力ねえな」

一つ一つに痛々しい行動をする俺らに呆れ顔の真汰。
くっそ、お前は良いな！

「ねえ、何で俺は立ってるのかなー？」

そう言ってくる龍。イスは二つしか無かったから我先にと言う感じ
でイスを取った結果龍が余った。

「一応、俺も筋肉痛有るからね？」

「さっき言っただけじゃん」

喉が痛いしか聞いてないよ。足が痛いなんて一言も聞いてない。

「おし、セツティング終わったし始めるぞー！」

「え、ちよつと！俺、死んじゃう！」

「大丈夫だ！運動部なら普通だから！」

「何なんだよー！！！」

知るかという感じに演奏を始めた。右腕も痛えな。手首だけ動かそう。

途中休憩、俺は外にジュースを買いに出た。中は飲食禁止なのだ。だから、外に出て飲むしかない。機材とかに零したら賠償金払わねばならんからね。

外でコーラを買いプルタブを引こうとすると手の中から缶が消えた。消えた方向を見ると穂奈美が立ってた。

「何してるんだ?!」

「いや、喉乾いたから」

「自分の買おうぜ？」

穂奈美の手には120円。買うために出てきたんだな。

「良いじゃない。ケチケチしないでよ…はい、返すわ」

「これって…」

「早く飲まないと気が抜けるわよ？」

いや、飲んだら間接キスじゃね？穂奈美はそんな事を気にしない人なのか？少しドキドキする。

が、気にしない人なら俺も飲んじまう。ごちそうさま。

「はい、私のアクエリも一口あげるわよ」

「…ありがとう」

ドキドキしっぱなしです。異性と物体を閉して接触をしているのにドキドキしてるわけで別に穂奈美にドキドキはしていない…筈だ。

やばい、ゲップでそうだ。うつぶ。

「ふう、生き返る…喉が痛くて歌えないのよ」

「ああ、今日練習だったのね」

「うん、初練習になるのかな？何回か顔は合わせてるんだけどね」

たまたまドッキングしてしまったのだろう。こうしてバンド間で交流が生まれるとなかなか嬉しかったりする。

同じような思考を持ってたり全然世界観が違うやつも居るからな。

「休憩時間終わりだし…戻るな」

「うん、じゃあね。後で」

聞き返したかったが龍に呼ばれたから聞きそびれた。痛い足を持ち上げてスタジオに入る。

「じゃあ、新しい方練習始めようか」

ただし分けて練習な、と真汰は付け加えた。正直ありがたい。

「おし、じゃあ芳樹の最初のフレーズから入るから翔一は測って入れよ。じゃあ、行くぜー！」

カンカンカン。ドラムスティックでカウントを取り始める。

さつきより腕は不思議と痛くなかった。

スタジオを片付けて外に出る。すると穂奈美がいた。

「マイク買いたいから楽器屋に着いてきて！」

と了承すると近場にある大型ショッピングモールの楽器屋に連れていかれた。

時刻は午後4時50分。4時30分にスタジオから出てきて20分で着いた。

歩いてる間、バンドの事や学校の事を話してた。足に痛みはなかった。

楽器屋に着くとすぐさまマイク売り場に直行。安いから5万円ぐらいまでのを取り扱ってる。

楽器を本格的に買うなら東京に行くしかないが今日は流石に時間がない。

「ねえ、似合う？」

「似合うもなにも使いやすさだぞ」

星とかがペイントされてるマイクを歌う感じに口元に持つてきていた。似合うっちゃ似合う。女性ロック歌手みたいな感じだ。

「でもこれ気に入ったなあ……」

「一回歌わせて貰えよ」

「恥ずかしくない？」

恥ずかしいも何も、ギターを買う時も衆人観衆がいるなかで一回は

弾くのだ。

「そんな事を言わずに…すみませーん！」

店員がやってきて一回マイクを試したいの旨を伝えて歌ってもらった事にした。

「これ、何の羞恥プレイよ…」
「わー！…！」

女の子がそんな事を口にするんじゃないやありません！

ともかく色々あってマイクは買った。

「ふふ…ありがとうね」
「ああ…」

どういう訳か、こいつにマイクを買ってあげた。
何でだろうな？

その後、奢ると言って譲らなかった穂奈美とファミレスで夕飯を取り、帰路につく。

「じゃあね、芳樹。送ってくれてありがとう！」
「ああ、また明日な」

「やだあ、明日は休みよ？」
「え、マジ？」

知らなかった。携帯を開くと土曜日の文字があった。

「ふふっ、バカねえ。お休み！」

手を振って家に帰って行く。

自宅への帰路がいつもより長く感じた。

少女取扱い曲（後書き）

ファルセット…裏声
です。

龍くんは影ながらの苦勞者です。

本番に向けての練習曲

季節も夏に突入してもう学期末だ。

学期末…と言う事で定期テストがある。体育祭が中途半端な時期にあつたらしく中間テストはなくなってるらしい。ここ10年くらいそうらしい。中間テストが無い分遊べたし楽しかったのだが…

これ一回で一学期の成績が付く事になる。なので、テストをしくじると夏休み補修コースに強制参加させられる。

教師には悪いがそれだけは断固拒否したいが為に1ヶ月前からコツコツと始めてた。

そして今日。俺は少し寝不足だった。どうにも買ってきたゲームにはまって昼はギターと学業。夜はゲームという不健康極まりない生活を送っており、金曜日から今朝にかけてほとんど寝ていない。多分3時間程度だ。

なので、フラフラ教室に辿り着き速攻爆睡。HRが始まった時に前の席の？美川に叩き起こされた。

テスト二週間前らしく範囲が配られていた。

「ちょっと待てよ！120ページ近く有るぞ?!」

「一学期分のワーク全部やるのかよ!」

阿鼻叫喚…まではいかないが皆いい感じに悲鳴をあげている。
ちよつと優越感。

少し前から勉強はしていた。ワーク類は全て終わらせている。やる

の面倒くさいからね。

そうして賑やかで騒がしい朝は過ぎて行った。

2時間目の体育でちょっとした事件があった。バスケをしていたのだが俺はパスされたボールを受け取りそこね顔面強打。急遽保健室に運ばれる事になった。

なので俺は今、保健室のベッドの上だ。クーラーがついてて涼しい。少し目が痛いしクラクラする。多分、寝不足の後遺症か？

あまり考える事はしないで寝る事にする。おやすみ。

気づくと昼食の時間だった。自分の腹は力なく鳴った。

弁当は教室か…と思って上履きを履こうとすると足元に鞆があった。弁当も入ってる。誰か親切なヤツが届けてくれたのだろう。

「おい、坂上！飯食うならこっちに出て来い！」

俺がガサガサしてるのを気づいた妙子先生（妙齢34歳、独身）逆らう要素がないためベッドから出る。うわー、まだフラフラ…

「よう、元気には…なってないな、うん」

元気には…の部分で振り返った妙子先生は俺がフラフラとなってるのを見て苦笑した。

と言っわけで、ご飯タイム。ムシャムシャ。こんな時でもお腹空く

んだな。

食べ終わるとまだ寝てると言われたため寝る事にする。昼寝に近いかもな。

おやすみなさい。

次に目が覚めると既に放課後。一時間ほど過ぎていた。寝過ぎたからか首が痛い。さっきより体調は良くなってるので早々に帰る事にする。

「おや、坂上。帰るのか？」

「はい、今日はちゃんと寝ますよ」

「お前の彼女にでも寝かせてもらえ」

「はあ？」

「さっきから休み時間のたびに見にきてくれるわよ」

親父っぽい笑みでニヤニヤと見てくる。とりあえず…

「笑い方気持ち悪いですよ」

「まあそうだろうな。で、どこまで行ったんだ？」

「はあ？だから何の事…？」

すると保健室のドアがボタンと開けられた。

「先生、芳樹目覚めた？」

「あら、彼女来たわよ？」

「…はあ…」

そういう事か。毎回見にくるからそういう関係だと勘違いをした…

と。そんな事実は一切ない。

「ち、違います。こいつとはそういう関係じゃないです」

「あれ…違うのか？でも、あんどき…」

「違います」

「でも…」

「違います」

「ハイ」

恐ろしいな、穂奈美！

お礼を述べて俺らは保健室を後にする。さて、帰るかなー。

「ねえ、私ずっと見ててあげただけど？」

「何がだ？」

わざとすつとぼける。多分、休み時間の度に来てたと言うのだろう。
暇なもんだ。

「だから、私は毎回芳樹の世話に来てたのよ？」

「ほーう、それはありがとう」

「だからさ…」

モジモジ。何かを求めるような顔でこっちを見てくる。何だ、金を
くれってか？

「勉強教えてよ！」

色々、予想外だった。

あの後、別に断る要素が無かったから気楽にオツケーと答えてしまった。

そして、後日。勉強会と言う感じで教室に残りやるはずだったんだが…

「…何で幸平と真琴さんも？」

「あら、いいじゃない。多い方が良いわよ」

「うん、そうだね」

「いや、まさか来るとは思ってたんだけど」

「…あれかしら、私以外に居ると困るような事をするつもりだったのかしら、この変態」

「何でだよ…」

もう穂奈美はダメだ。ネジが外れかかっている。や、もう外れているのか？

「とりあえず、始めるわよ！」

「「おー！！」」

俺に拒否権はなさそうだった。幸平と真琴を一緒にすると…考えてくれ。

数刻後、やはりこうなる。

「真琴…当たってる…」

「ワザとだから！それよか次！」

「集中できないんだけど」

「…私から離れたいの？」

「ああ…もう涙ぐまないの。別に良いよ」

「やったあ！」

絶対にこうなると思ってたんだ。穂奈美もげんなりしてる。

「これは…予想外だったわ…」

「だから嫌だったんだ」

ため息をつく穂奈美。

「なあ、親友」

「何かしら？」

ノリで恥ずかしくなりながらも穂奈美を親友と言うと驚いた顔をしながら返事をしてくれた。

「翔一とかは？」

「あー…えつとねえ」

答え辛そうに目を泳がせる穂奈美。

「えつとね、電話した時に、『あら、穂奈美さんですか。え、勉強会？明日？すみません、私は翔一君と人生のお勉強会が…あらあら逃げ出しましたわ。電話切りますわ』って言われたわ」

「……」

「しかも、後ろから翔一が嫌だとかやめるとか」

恐ろしい銀央さん。既に尻に敷かれてる。憐れ、翔一。

「でも、尻に敷かれた方が上手く行くって聞くぞ？」
「あ、それは私も有るわ」

うんうんと頷いているとハツとした顔になりジト目で睨む穂奈美。

「もしかして、あんたも敷かれないタイプ？」

「いや、俺は敷くタイプかな。」

「あら、マゾかと思ったんだけど…」

「…違うがな。俺はいじめる方だな」

「あんた、一生独身でいて」

「何でだよ?!」

呆れ顔で言われると俺泣くぞ！

「だって、あんた奥さんとかにDVしそうだし…」

「しません!」

思わず敬語。

「ふう、そんな事よりさっさと勉強するぞ」

「はいはい」

と言いシャーペンをノックする。隣を見ると…うん。見たくない。

「なあ、あいつら置いておこっ」

「そうね」

あいつらはほっておいて勉強を続けた。

後日談になるが、俺と穂奈美は中々な手応え。幸平と真琴さんはダメだったらしい。

翔一達は…凄く良かったらしい。

何をしてたんだ、あいつら。

Good Afternoon! - - - 1

テスト明け、俺はとても清々しい気分登校してた。周りを見るとやはりスッキリしたような顔立ちの人や不安そうな顔の人、そして落ち込んでる龍。…って龍?!

「おい、どうしてそんなに落ち込んでるんだ?」

「おお、芳樹グッモーニン」

「Good Afternoon .」

「まだ朝だが…」

これはそんな意味じゃない。とりあえず、辞書引け。

まあ、面倒なので去ろうとすると案の定引きとめられた、チッ。

「今、心で舌打ちしたよね?!」

「いやいや、気のせいですよ」

「うう…まあ良いや」

そこで引き下がるか! まあ良い。

「つーわけでバイバイ」

「ええ、ちよつと!」

「何だよ」

あえて不機嫌そうに返す。意外といじると楽しい龍くん。

「いや、あのな?俺、赤点疑惑なんだよ」

「…マジで?」

「大マジ」

ふうとため息をつく龍。前にも話したが補修の強制参加となる。憐れなり。

「まあ…自業自得だ。頑張れよ」

「…そういや、うちのクラスの赤尾に勉強教えてたんだってな？」

「うん、それが？」

「他の男子ども羨ましがってたぜ？」

「俺に？穂奈美に？」

「アホンダラ。お前に決まってるなあ」

まあ分からはなくはないな。あいつと居ると不思議と落ち着くし…甘い匂いするし。

でも、あいつをそういう…恋愛感情？みたいな目で見てないぞ？何回か不意打ちでドキドキさせられたがな。

「ふーん…」

「ふーん…って…まあ、そういう所気にしないのはお前らしいぢゅーか」

下駄箱に差し掛かるとバイバイと言って靴を履き替える。どうでもいいけど、中3の時に上履きに蜂が潜んで履いたらグサリ…と刺された事がある。

あれは年甲斐も無く涙を流しそうになった。

後で理科の教員に聞いたんだが、恐らく暖かい所を求めたら上履きにと言うものが有ったから入ったんだろう…だそうだ。

何て傍迷惑な…と思うけど、実際に傍迷惑な存在は人間だろうな。

うだうだと考えながら教室に入った。そういや、スズメバチ…

「おはよー、芳樹」

「スズメバチ…あ、おはよう」

思わず心で思ってた事を口にしてしまった。よくある…かな？

「何でスズメバチなのかしら？」

「色々とあつてスズメバチと言う思考に辿り着いた」

「…元は何を考えてたの？」

「確か、上履きかな」

「「謎だ！」」

幸平と真琴に叫ばれた。話題の転換とか話しているとよくないか？
まあいいやと思つて座席に着く。そーいや、予習してないと思つて
ノートを開く。

「ん？」

何かノートと共に落ちて来た。これは…手紙？
表には何も無い。裏には…果たし状。

「はい、捨てるー」

「つて、芳樹！それラブレターつてやつじゃなかったの?!」

「男からのラブレターなんぞいらねえ！」

「あら、そう言う展開が私の友人に…! ああ！」

「真琴さん、完全に腐ってるよね!？」

ちょっと見たくない一面を垣間見た。ぐちよぐちよ系は嫌だからな。

「で、果たし状つてやつに呼ばれなくていいの？」

「やだよ、喧嘩嫌い」

「…ああ、そう」

苦笑する幸平。喧嘩は嫌だ。疲れるし事故処理は大変だし歯は折っちゃダメだし。

それよか予習…と考え果たし状はゴミ箱に投げた。

…おっし、入った。

5時間目の化学は実験だった。期末後だから面白い実験をしようと言う事で、水素イオンと酸化イオンをイオン結合させて水分子を作る実験だ。

一回、中学でもやったな。

今回は大掛かりだ。前はフラスコでやったが今回は透明バケツに入れてやる。電源装置も相当大きいのを持ってきた。

危ないから生徒ではやらせず教師がやるそうだ。と言うわけで俺達は教卓の周りに集まっている。

「はい、ちゅーもく」

少しテンションが上がってる化学の老竹先生。名のとおりヨボヨボ…では無く新任だ。

「じゃあ、誰か起爆してくれんか？」

「先生がしてくれんじやないんですかー？」

「いや、ここはお前らにやらせてあげようかなって」

「じゃあ、俺やりますよ」

と教団に立つ翔一。
心なしか嬉しそうだ。

「おっし、じゃあこのボタンを押してくれよな。皆は耳を閉じろー
！」

「俺、片方閉じられなくね？」

「…頑張ってください、翔一くん」

嫌な顔をしてスイッチを握る。そして自分でカウントを始めた。 5 .
. . 4 . . . 3 . . . 2 . . . 1 . . . ! !

ドカーンとかそう言う音がした。翔一がスイッチを押した途端に轟
音がしてバケツの中の水が上に吹き上げてきた。
そして、その水は俺にほぼかかった。

「うっわ、冷た！」

「おいおい！」

「つてこら、脱がそうとするな！」

「風邪ひくぞ!?!」

それからのはてんやわんや。脱がそうとする翔一、それを写真に納め
る女子、さっきの爆発音で飛んでくる校長以下。

波乱万丈な化学の時間だった。

はたまた放課後。ようやく乾いたワイシャツに腕を通した。まだ少
し冷たい。

「芳樹？」

廊下には穂奈美が。どうしているのかと聞くと

「私、週直だったから」

「へえ」

「それよりどうしてワイシャツ乱れてるの？……まさか……」

「とりあえず、やましい事はないぞ」

「男と……」

「お前もか！お前もそっち側の人間か！」

冗談よ、と返されると早く帰ろうって言われたから片付けのペー
スを挙げ早々と帰る事にした。

Good Afternoon! . . . 1 (後書き)

地味にアクセス数が伸びる事を願います。

ちよつと駅前に寄ろうと言われたので穂奈美とよる事にした。

駅前のビル…と言っても殆ど駅ビルなのだがバカにしてはいけない。ここでも基本的に揃うものは揃うのだ。

ファッションしかり雑誌しかりコスメしかり食材しかり。流石に家具は売ってない。

実は前にCDを買いに来たんだが…入り組んで迷った。今考えればこんな所迷わないのにな。

「ねえねえ…化粧品買うから本屋でも居てよ」

「良いのか？」

「うん、見ててもつまらないだろうし」

「そんな事はなさそうだが…迷惑になりそうだからやめておくよ。

本屋にいるから終わったら何かしらで教えて」

「うん、じゃまたね」

手を振って別れる。コスメは2階、本屋は4階。

エスカレーターでも良いんだが運動不足解消の為階段にしよう。

と二階までは意気込んだのだがやはりバテた。

明日から少しずつやろうと思うね、明日と化け物は出てこないって言うけどさ。

本屋に着くとまずは雑誌コーナー。お気に入りの音楽雑誌があるのだ。

(お、Freedom特集…)

表紙を見ると尊敬してるギタリストのRyoと言うのだがピースしているのが見える。

まだ若手なのにギター界の期待のエースと言われている。

パラパラめくってみると練習用フレーズと参考DVDが着いていたので買う事にした。帰ったら早速見てみよう。

それだけでは時間が潰せるわけが無いので何となく文庫本を見に行った。夏だからホラー系でも見てみたい。

色々とコーナーをグルグル回っていると目当ての本があった。買うか迷って15分弱。店員にも変な目で見られ始めた気がして来たので買う事にした。

夜にでも読もうかな。

機嫌を良くしながら穂奈美が居ると言われた化粧品店に向かう。メルも来てないし一応本屋をぐるりと回って居なかったから多分まだ選んでいるのだろうと思っていた。

二階に着きある方向に向かうと誰かが男達にちよっかいを出されていた。特に気にせずに通り過ぎようとするとドンと隣から衝撃を受けた。

「もうー遅いよ、芳樹。私を虐めるのが好きだからって…」

言うっておこう、こいつは穂奈美だ。途中までの会話だとただの恋び…

「おい、どっいっ…」

「良いから口裏合わせて」

「ん…」

分からないが合わせる事にする。分からなくてあたふたするような鈍感な神経は持ち合わせてないからな。

「…ごめんな、色々あったんだよ」

「またあの女？」

「あの女って…妹だろ？」

「おい！！」

振り返ると怖い顔の少年達。同年ぐらいかな？

「順番があるんだから俺たちが先でいいかな？この子、俺らとデートしてくれるらしいから」

「その後にイイコトも…だよな？」

ああ、よくあるカスイナンパターンだ。多分、この後に俺は肩でもかけられてビビらせるんだろうな。
そうはいくか…

「ほら、穂奈美」

「え、ちょー！！」

グイツと手を取ると一気に駆け出した。 Good Afternoon…なんちゃって。

俺の考えだここで諦めてくれる予定だった。ところがどっこい。あいつらは走って追いかけてきやがった。

「しーら、待てや！俺らが取ったんだからこっちが先だ！」

ほら、ジャイアニズム！つか、走ってるから考えが無茶苦茶！

「穂奈美、どつちに逃げたら巻ける?!」

「えっあ…次はこつちから入るよ!」

次は穂奈美が先導する。行き先的に…電車のホームか!?

電光掲示板を見ると後1分も満たないぐらいで来そうだ。俺は慌ててPastoを取り出し改札をぐり抜けた。後ろを見るとあいつらもぐり抜けてきた。

「しつこいのは嫌いよ!」

「ナマ行つてんじゃねえ!さっさと俺らに奉仕しやがれ!」

それが本音かよ…走りながらも少し呆れてしまった。

ホームしたの階段に着くと人が溢れかえっていた。多分、電車が付いたのだろう。

人に流されない様に手を強く握り駆け上った。後ろからは罵声やら怒鳴り声やら、少しでも止まったら捕まりそうだ。

どうにかホームに着くともう待つてる人は乗っていた。慌てて飛び乗って穂奈美が乗った瞬間に後ろでドアがしまった。

…ギリギリセーフ…

少し安心して力が抜けた。ここまでしつこい奴は始めてみた。

「ふふっ、芳樹かつこよかったよ。逃げたのはどうかと思うけど…」

「あそこで俺に殴り合いでもしろと?」

「うん、結構期待してたんだねどね」

「…やめてくれ」

喧嘩は嫌いなのだ。

次の駅で折り返して戻ってきた。さっきの奴らはもう居ない。

「居ないわよね…?」

「うん、大丈夫そうだな」

「びっくりしたわー」

「君が美人だからじゃないかなー?」

「…目を見て言おうよ」

ふざけて言ってるから！決して恥ずかしいわけじゃないから！

「まあ良いわ、帰ろ?」

「うん…あ」

今頃気がついた。手を握っている。握る部分が暑い。汗がじんわりと…

「うわあ!?!」

「どうしたの?!」

ニヤニヤ。真っ赤になる俺を見て悪い笑みと言うか妖艶な笑みと言うか。こいつ気づいていたな…!

「ああ、芳樹。以外と初心ねえ」

「やめてください」

恥ずかしくなってさっさと歩いて帰る事にした。

Good Afternoon! . . . 3 (前書き)

長い…かな？

次の日、寝たのが10時ごろだったから目が覚めたのは5時だった。いつも朝は目覚めたとしてもうだうだしてたりして…まあ朝が弱いわけだ。

お目々ぱっちりと言うわけだから少し部屋の清掃を始めた。俺が住んでるのは一軒家…だけど親はいない。いないっと言うのも親父が出張して母さんがそれに着いて行った。俺は高校に受かってもう一度受験し直す気などさらさらなかったのでここに残る事にした。

まあ1人暮らしは憧れるが楽なものではない。光熱費とか税金やらなんやらは親が支払ってるのだが食費とかは自分で賄ってる。だから正直面倒だ。自分で家計簿をつけているようなものだ。

部屋の片付けをしてると携帯が振動していた。サブディスクを見ると赤尾穂奈美の名前。開いて見てみると

『おはよう、一緒に行きたいから…そうね8丁目のコンビニに7:30に来てくれるかしら?』

どうやら一緒に登校しようというお誘いメールだった。どうして誘ってくるのかとか何で俺なんだとか色々聞きたい…けど、そこに断る要素は見当たらないので簡潔に『了解』と送った。

携帯は忘れないようにかけてある制服のポケットに突っ込む。どうにも携帯は忘れる事が多いのだ。多分、あまり重視してないからだろうね。

下に降りてリビングに入る。朝食は軽めに食パン一枚それと命の水オレンジジュース。愛媛の心が大好きなんだ。みかんみかんみかん、

みかーん。

TVをつけて爽やかそうな司会がニュースを読み上げて次の記事に移ろうとしたときにパンが焼けた。

オーブンから取り出して頬張る。

…うげっ、少し生焼けだった…もう一度焼き直す。その間にオレンジジュースを飲む。ぷはー、えめえ。

チンと甲高い音がしてパンを取って食べると良い感じにサクツとしてた。

食べ終えて時計を見ると7時を少し回っていた。8丁目のコンビニは大体10分ぐらいだからもう少しのんびりしよう。

TVに意識を向けると本日の占いとやらがやってた。特に占いかは気にしない質だからいつもは見ないんだが何となく見る気になった。8月2日生まれだから獅子座だ。

「牡牛座のあなたは本日はちょっとしたトラブルに巻き込まれるでしょう。ただ、そのトラブルの中にちょっとしたハプニングで嬉しい事があるかも?! ラッキーカラーは黒です! 続いて双子座のあなた…」

ハプニングねえ…車に突っ込まれるとか? いや、コンビ二強盗、神様が狼に乗って突進…非現実的すぎるか。非現実を求める柁木くんじゃないんだから…

うだうだしていると鞆にノートやら突っ込んでないのに気づいたので自室に戻り鞆に突っ込んだ。今日は主要5科目あるから重くなってる。時間割を考えた担任を殴りたい。

戸締りをしてガスの元栓を確認して家を出た。多分、ちょうど良い

くらいにコンビニに着くぐらいかな。

夏にしてはまだ涼しい朝の住宅街を歩く。ちよつとすると呼び出したあの子は雑誌を立ち読みしてた。表紙から見るとファッション雑誌当たりだろう。しばらく見てるとようやく穂奈美も気がついた。

「よう、ねーちゃん。俺と一緒に学校行かねーか？」

「ふふ、そうね。学校に行く間私を守ってくれるナイトならお願いするわ」

「そりゃ光荣だ」

軽口は軽口で返される。多分、昨日の事があつたから保身のために呼んだのだろうか？

まあ昨日の奴はしつこかった。流石に学校まで追いかけてはこないだろうけど…念のためだ。

「では、向かいましようかお嬢様？」

「宜しくてよ」

主従関係がこの瞬間だけ成り立った。しかし、数秒後崩される。

「…やっぱ、芳樹その顔最高…あははっ！」

笑しやがった。何か真面目(?)にナイトを演じたのに損した気分だ。

「…いつまで笑うんだよう…」

ついには腹を抱えて笑いだした。俺は少し涙目。周りの人は特異な

俺達を見て変な目で見ている。

「あははっ…もう笑わな…ぷくく…」

「笑ってるだろ?!」

「だって、真面目な顔で…くくっ…おかしな事を言うんだもん」

「置いてくぞ、お転婆姫」

「くくっ…私を置いて行くの？音楽家ナイト様？」

暑さで少し俺らの頭がイかれてるようだ。さっさと学校で涼むとしよう。

昼休み、俺は暑さで茹だつてた。近くの高校だとクーラー完備なのだがウチは職員室、保健室、図書室、体育教官室にしかない。体育教官室に着いているのは炎天下の中体育教師は何度も直射日光を浴びるから熱中症にならないように…らしい。

「よう…芳樹。抱きついていいか？」

「むさ苦しいからやめてくれ…」

翔一はパタパタ下敷きを仰いでる。少し風がこっちにきて涼しい。そーいや地球温暖化って周期的に起こってるらしいねー。二酸化炭素が原因じゃなかったらそのうち寒い地球寒冷化するかもねー…と翔一に言うところ頭がショートする…とか言っただ倒れた。ああ…扇風機…

「やつほー、芳樹…あれ死んでる。みんなも？」

みんなってのは幸平、真琴さん、翔一を混ぜての事だろう。幸平は

ワイシャツをズボンから出して真琴さんはボタンを開けてるのだが…色っぽい。多分、幸平へのアピールだろうが回りの視線を確保して幸平は見向きもしてない。翔一は言わずもがな。

「そんな君たちに冷えたジュースはいかが？」
「…え？」

穂奈美の手元を見るとジュース。わざわざ校内から抜け出して買ってきてくれたらう。

「ありがとな…ふう、生き返る」

喉を通る感覚が気持ちいい。回りの面々も目に活気が戻った。飲み終えて昼休みが残り5分になった時に事件が起きた。

「ねえ、ニュース！他校の人間が校内に侵入したってよ！」
「ええ?!」

持ってきたのは委員長の東雲さん反応したのは？美川くん。侵入者ってどう言う事だ？

「何にも人探らしいよ」
「へえ…ま、俺らには関係ないか」
「そうだな。あー、翔一下敷き半分くれえ…」
「これを割れと?!」

いつも通りに戻れるはずだったが戻れなかった。

「はい、失礼するぜえ…さって居るかなあ…」

体をビクツとしてしまった。昨日追いかけてきた奴らだ。ここまで追いかけて来たのか…？制服から学校を暴いたんだらう…

（バレルかなあ…？）

（多分…）

がつつり顔を見られてる。多分、つつかかれるだろう。

「はい、次はっ…：いたいた〜。昨日の子だあ！」

「ははっ、居たなあ！」

ニヤニヤと近寄ってくる2人。ふと様子を見ると廊下には後3人は居る。厄介だなあ…

「ねえ、俺たちあの後女の子探すの大変だったんだよあ？」

「そうだぜえ、歩いてる奴に学校を優しく聞いてなあ…フレンドリに教えてくれたぜ？」

「だからさあ…俺達と来いよ。このダメそうな彼氏より満足させられるぜえ？」

「後、そのワイシャツをはだけさせてる女もだ。不満なんだろう？俺達が解消してやるからよ！」

「その代わり壊れちまうかもしれないけどね！」

「くはははっ！」

何か不良高校にありそうなセリフを聞かされて笑いそうになる。翔一は必死に笑いを堪えてる。

「だからさあ…：その彼氏どもも来いよ。一緒にしようぜ？」

「悪いけど、嫌よ…！」

どうやってご帰宅願おうかと思ってる。と穂奈美が声を張り上げた。幸平はビツクリしてる。

「最高の彼氏を裏切ってあなた達の所に行きたくないわ！帰って！」

ちよっ！俺、あんたとそんな…！

「…ああん？」

すると腕を振りかぶるモーションが見えたので思考を中断して咄嗟に間に入る。

…ぐっ！

思いつきり腹を殴られた。さっき食べたものが出そうになるがこらえる。その時になってようやく現実が追いついたらしく回りからは慌ただしく動き始める。外にいた奴らも中に入ってきた。これって… 1 : 6 ?

「良い気になってんじゃねえ！俺らは親切で下手に出てやってるのに何だその態度は！いいからさっさと来やがれ！お前もだ！」

「やめて！」

「いやっ！」

グイッと穂奈美と真琴さんを引っ張る。すると引っ張りすぎたのか穂奈美のワイシャツがビリリと裂け始めた。

「いやあ！」

黒い。…すると奴らは動きを止めて一瞬だけそちらに集中した。

…今だ！

リーダー格の奴に思い切りドロップキック。後ろにいた奴も巻き込んで机にぶつかった。

「…のやろう！」

奴らの1人が何処からか警棒を取り出して来て頭を思いつきり殴られて床に沈む。頭が割れそうで視界が赤い。

「おい、芳樹！…らあ！」

翔一は近くにいた奴を沈めてた。幸平は何時の間にか真琴さんを助けてた。

回りのクラスメイトの1人が先生を呼んでくる！と叫んで走って行った。

奴らが翔一と幸平によって沈められた瞬間、安心して意識を手放した。

最後見た映像は穂奈美が何かを叫んでる姿だった。

目が覚めるとカーテンに仕切られた部屋：保健室かな？多分、保健室にいた。病室ではなさそうだ。

体を起こそうとすると頭がズキンと痛んだ。

触れてみるとグルグル巻かれた包帯。ああ、そうか。警棒で殴られたんだっけ？ベッドから降りてカーテンを開けると妙子先生が事務をしてたらしい。今は顔を上げてこっちを見てる。

「お、坂上起きたな。よく来るよなあ…」

「…頭は脳震盪ですか？」

「まあそうだ。命に別状無いから安心しろよ」

「助かります」

ぺこりとお辞儀をするととりあえず教室に帰ろうとする。だが頭を殴られた後遺症で歩くのがおぼつかない。

「あ、ちよつと待ってる。もう少しで見舞いが来るから」

「へ？」

「だから見舞いだ。さっきから何人も来てるぞ？たっく、保健室に留まってるれば良いものを…」

多分あいつらだろうが…確かにそうだな。何で保健室に待機してないんだろう？

まもなく穂奈美がなってきた。俺を見た途端頭は大丈夫かやら体に異常はないかとかフラフラしないかとか…

「ちよつと！お前は母親か?!」

「だって！」

俺が穂奈美の大丈夫かコールに耐えられなくなり声を張り上げると穂奈美も遮った。目尻には涙が溜まっている。

「だって…目の前で倒れるんだもん…あた、頭を打たれた…から、何かあったら、どうしようって思ってた！」

「あー…」

うん、心配だったのは伝わった。ただそんなに泣きながら言つので涙を拭き取りながら話しかける。

「ほら泣くな？俺は大丈夫何だしさ」

「うん、良かった」

ぎゅっと抱きついて来た。背中に腕が回され頭を俺の胸元に当ててきた。

ち、ちよつと！

「ちよ、穂奈美さん?!」

「いいじゃない、心配だったんだよ？」

クイツとその状態で頭だけ上げたから上目で俺を見てきて…うわあ！真面目に可愛いと思っちゃった。

ただ、ようやく目の前の現実を追いついたので頭を撫でてやる。

「まあ…心配してくれてありがとう」

「ん」

目を細めて返事をした。嫌なのかな…？やめとくか。

やめると穂奈美はこんな事を言ってきた。

「お願い、もっと」

「へっ?」

もつとは多分じゃなく確実に頭を撫でると言っ事だろうか。
まあいいけど…撫で撫で。

「何かね、気持ちいい」

「そっか」

お互い暖かさを感じあっていると俺はふと思った。ここは…保健室だよな。じゃあ妙子先生がいるわけで…

「よう、そのままベッドにダイブとか許さんぞ?」

「いくっ」

下品なセリフと表情でいつてくる妙子先生。穂奈美もその存在にようやく気づいたようだ。

「あ、妙子先生。い、いつからいたんですか?」

「最初から居たよ!お前らが異空間作る前からずっといたから!」

涙目の妙子先生。大人げない、っか、大人気なさすぎる。ただの子供だ。

「ん…じゃあカメラで撮りながらやるか私を混ぜてするならベッド貸してやるっ」

「後ろの選択肢は何ですか?」

「うっさい!私だって彼氏が欲しいんじゃない!」

「えー…ん？」

気がつかなかつたがこの会話は俺と穂奈美が恋仲だという前提で話されてないだろうか？ちよっと聞いてみよう。

「あの一…俺ら付き合ってますんよ？」

「は、嘘だろう？さっきから生徒間ででお前らの事をカップルだの何だの言ってるぞ？」

「…はあ？」

何の事だか分からない…どうしてそんな噂が？仲が良いとかそれならまだしも恋人？

「あ」

「どうした、穂奈美？」

穂奈美は何かに気がついたらしい。懇意丁寧に教えてくれ。

「多分ね、昼休みの私の言葉が原因だと思うよ」

「はっ？…ああ」

確かこつちにこいとかわけわからなくなってる時に奴らに向かつて私の最高の彼氏だとか叫んでたよな…

「ああ、最高の彼氏なんだっけ、俺は」

「んなわけあるか、バカ。最高の親友よ」

「あれま残念」

最後のは冗談だけど最高の親友…男女の友情ってやつか？…良いね。そついうの好きだよ。

「はいはい、良いから帰りなさい。説明は穂奈美がしてくれたいから面倒な事後処理はないから安心しな」

「ん、はい。ありがとうございます。失礼しました」

「ああ、じゃあな。…ツチ、隠し撮りで一儲け…」

無視する事に決定。

俺は教室に向かう事にした。幸平達は帰ってもらったらしい。曰く『私の責任だから！』らしい。ありがとうございますの意を込めて頭を撫でると気持ち良さそうに目を細めた。

…やばい、俺もクセになりかけてる…

一緒に帰るからと言って教室に入る。散らかされてたはずの教室は綺麗に片付いていた。

鞆を取り廊下に出る。穂奈美の教室を除くと…着替えてた。

俺は慌ててそつぽを向く。

さっきまで忘れてたんだけどそういや少しだけ破けてるのを思い出した。…黒…

「今、覗いたでしょ？」

「うわあ！」

肩をがっしり掴まれて驚く。見るとジト目の穂奈美さん。

「今、見たよねえ？多分、下着も見れたんじゃないかしら？」

「み、見てないよ！」

「じゃあ、さっき黒とか言ってたのは何だったのかしら？」

「それは…」

言葉が詰まる。どう返したら良いものか…ああ！

「今日のラッキーカラーだったんだ」

「占いかしら？」

「ああ」

とりあえず誤魔化した。良い感じに流せた気がする。

「今日は珍しく赤なのよ」

「え、黒くなかつ…あ」

「やっぱり見たのね！私の純情返して！私の純潔を返して！」

「おい…」

「良かったねえ、私の下着が黒で。ラッキーカラーなんでしょ？運も上がったし目の保養にもなったから良かったね、このスケベ！」

プリプリ怒ったふりをして帰った。というのも笑いながら言葉を発していたのだ。

ちよっとおかしくなっただけそのままにしていた。

「こら、帰るぞ。芳樹の家で夕飯を作るから」

「いや、何で？」

「私の所為で怪我したんだからそのくらいさせてよ」

帰り道、俺は穂奈美の自宅訪問を柔らかく拒否する事をずっとしてた。

とりあえず、ファーストフードを奢ってもらっ事に収束した。

女の子が男の子の家に簡単にくるものじゃありません！

ファーストフードを食べて家に帰る。とりあえず、不安だと言つ事を隠して穂奈美の家に送った。

「また明日ね、芳樹。頭また怪我しないでね？」

「怪我したら泣いてくれるか？」

「ば、バカ！誰が泣くか！」

本日最後の軽口。いや、最後のは照れ隠しかな？

「Good Afternoon」

「サヨウナラ…ね？」

「ああ、また明日」

「バイバイ」

手を振って別れる。

帰ったら看病御礼に何か作ってやるかな。

夏への序奏（前書き）

相変わらず中身が薄いです。

夏への序奏

一学期終業式も終わりこれから地獄のメカニカル…いや、成績表返し。この日に赤点が付いた人は夏休み7月いっぱい補修となる。噂によると土日関係無く早朝から夜遅くまでやるらしい。

そんなのは嫌だしやっていると精神崩壊しそうだ。

先生が入って来て成績表を渡す。周りは人のと比べたり嘆いたり一喜一憂している。俺は少しだけみたが十分だ。特に問題は無いな。

「芳樹…俺ギリギリだ…」

「…って事は補修では無いんだよね？」

「ああ、バンドに迷惑かけるような事はなさそうだね」

「なら良かったよ」

バンドとかはともかくこいつは赤点を取ると銀央さんが五月蠅そうだ…

その後で俺の成績表が晒されるという事件が発生したがそれ以外に問題は無い。

担任の暖かいお言葉を頂戴している時に携帯が振動したので開く。内容は穂奈美からで要約すると『後で皆で話したい事があるから残ってて』だそうだ。

終わった後、翔一達にも聞いたが同じようなメールが来てるらしい。最も翔一には銀央さんから成績表見せろという脅迫メールも来てた。しばらく待つと穂奈美と銀央さんが教室にきた。穂奈美は俺に手を振り銀央さんは翔一に黒い笑みを浮かべてた。

そしてこんな事を言ってきた。

「夏休み、皆さんと一緒に沖縄に行きたいのですが…一緒に行きませんか？」

と銀央さんから提案された。主催者は銀央さんのお父さん。会社のパーティがあるらしくそれと一緒に旅行するらしい。参加するならばパーティに参加して欲しいらしい。日付は8月1日から8月5日までだ。

「特に断る理由も無いから行く。穂奈美は？」

「私も同じくね。皆は？」

それぞれ行くと意思表示をした。

「これで皆揃ってお出かけなのね。水着買いに行かなきゃ！」

「そうよ、幸平の好きなのはどんなの？」

「翔一君は何が良いですか?!」

それぞれ好みの水着を聞いている女性陣。1人だけ例外がここにいる。

「芳樹ー、何が良いかしら？」

「とりあえず、訳も無く腕に絡みつかないで」

色々当たる。特に肘当たりに挟まれて…

「こづいつのは好きな奴に聞けよ」

「あら、私は芳樹好きよ？」

妖艶な笑みを浮かべて言っ て来た とんでもない一言。焦って見返す
が…

「う、そ！そういう意味じゃないわ。友達として…ね？期待した？」
「何を戯言を…」

照れ隠しにそつぽを向く。幸平がにやけながら真琴さんを押し返して
るのが見れた。何か真琴さんの目がイってるのは気のせいだろう
ね。うん、気のせい。

「で、水着のタイプは？何が良い？」

「何でもいいが、スケルトンなら何でも良いぞ？」

「分かったわ、全裸ね。お金かからなくて助かるわ」

「本当にそうしたら警察沙汰になるからやめてくれ…」

「じゃあ、何が？スク水も良いわよ？多分、上とかが溢れるだろう
けど。親友に痴態を晒させるなんてやっぱり変態」

「俺はまだ何も言っ てないよね？！」

「じゃあ、早く行っ てよ」

「…ビキニ…パレオ付きで」

「分かったわ。無かつたら私と芳樹でスケルトンね」

「勘弁して！」

異常に体力というか精神力を消費した後に俺と翔一はスタジオに
来た。

緊急発表があるとか。

「ういつす、龍、真汰」

「遅かつたね、2人」

ニヤツと笑う真汰。

「ほらほら、早速始めるから2人ともセットして!」

「あ、ああ!」

「おう!」

さあ、今日も楽しくおかしく真面目にバンドだ。

地獄の練習を終えて良い手応えを感じて帰路に着く。途中、何故かアイスを食べたくなりコンビニに立ち寄る。するとまたあいつにあった。

「よう、穂奈美」

「…もしかして、ストーカー?」

「公共の場で変な事を言うな」

居たのは穂奈美だ。ブラトップにショートパンツ…何ともまあ部屋着。

「あら、大胆?」

「違うから。部屋着じゃね?」

「それこそ違うわよ!」

呆れる穂奈美。悪いな、ファッションとやらはあまり気にしないんだ。

「そついえば…芳樹って1人暮らしよね?」

「あ、うん。そうだが?」

いきなり何を聞き出すんだろうか？

「夏休み、食費の節約の為にウチに来ない？お母さんも来ても良い
って」

「はあ?!」

俺が穂奈美の家に入り浸れってか？とりあえず、嫌だ！

「や、失礼だしやめとくよ」

「家族が良いって言ってるんだし」

「女の子の家に男を居れるのはどうかと!」

「大丈夫、親が居るしもしそんな色っぽい状況になっても芳樹はへ
タレだから大丈夫!」

「ギター弾けないし!」

「私の部屋は防音!」

あーだこーだ。押し問答を10分と思ったら2分くらいで…

「じゃあ、来てくれるね?」

「…ハイ」

口喧嘩みたいな奴で穂奈美に負けた。

明日から穂奈美の家に行かなきゃダメらしい…
最後に一言…

「ちくしょう!」

コンビニに俺の悲痛な声が響いた。

その後、穂奈美は親に連絡したらしく俺に携帯をよこしてきた。
…これ地面に叩きつけるぞ、こちら！

『初めましてー、母の佐知子です』

「あ、どうも。坂上芳樹です」

穂奈美を見るとニヤツとしている。耳では私の娘がお世話になっているだの学校での穂奈美はどうだの聞いていて口ではちゃんと返しているがイラついたから頬をつねった。

「いははははっ！」

ジタバタ暴れ出した。次はどうするかなあとか思っていると指が暖かい感触がした。

「?@%#& a m p ; ! ?」

声にしないように叫んだ。俺の指が穂奈美の口の中にある。口の中にいれたただけではなく舐めたり出したり入れたりしている。なんかえろい。

『だから、ウチにちゃんときて、ね?』

「はい、分かりました！」

『じゃあ、明日からねー！宜しくっ…』

プチと切れた。俺の指はまだ穂奈美の指の中だ。ペロペロプチュプチュ…

「ふう……」ちそうさま

「何やってんだあ……」

この瞬間、ある地域では窓が一斉に空いたと言つ。

夏への序奏（後書き）

少しでも刺激を求めてみました。

夏の始奏

これまた次の日。できるだけ穂奈美に見つからないようにしようと
思って10時に家を出ようとすると家の前に穂奈美が立っていた。
曰く「あんたの事だから抜けてできるだけ私の家にはいないようにす
るか来ないかのどっちかだから」と言っただけ。俺をもう一度家の中に関
じ込めた。で、穂奈美は掃除をするからと言っただけ。掃除機とはたきを
取り出してきた。本気でするらしい。俺は邪魔らしく俺の部屋に待
機していた。下からは掃除機から聞こえるファンの音。スピーカー
から音楽を流す。少しだけ目を閉じて寝る事にする。

目を開けるとペンを持ってる穂奈美。慌てて洗面所に行っただけを見
ると案の定落書きされてた。額には朴念仁と。目には…うげ、目が
書いてある。髭がネズミみたいになってて…ああ、水性か…

「芳樹ー！！！」

顔を洗い終わった所で穂奈美の怒鳴り声。慌てて行くと一つのDV
Dケースと床に散らばる同じようなモノ。

「芳樹？何かしらこの『放課後の大人な同級生』って？詳しく聞か
せて貰おうかしら？」

笑顔だけれどもこめかみがピクピクしているのが見える。床には「
いけないお姉さん」だの「乱れた先輩」だのまあ趣味がバレバレ。
でも、これ分らないように絨毯したの収納庫に入れたんだが…

「歩いた時に音が違うんだもん、これ普通にバレるわよ？はい、正
座」

「はい…」

大人しく座る。座ると不潔だのこういうのはいけないとかわーわー言い出した。と言ってもなあ…

「つかさあ、何でバレるんだ？」

「…隠せてると思ってるの？」

「え、隠せてなかった？」

「普通にバレバレよ…」

呆れる穂奈美、そしてDVDを眺め出した。惚けたり赤くなったり忙しそうだ。見なければ良いのに…

「とりあえず、これは没収！」

「えー…」

全て持っていかれた。あれ、総額2万以上するんだぞー…

その後に機嫌を損ねた穂奈美のご機嫌取りに近くのレストランで奢る事にした…何で彼氏でも無いのにこんな事…とは思っけと言っただけ無駄そうだからやめとく。

今はご機嫌取りが優先事項だ。

「…で、まだ機嫌直してくれないの？」

「……………」

「おーい」

「……………」

頬を空気で膨らましてブーとしてる。指でつつきたいが殺されそうだからやめる。さっき注文する時殺気を孕ませたのでウェイター

の子は『は、はい！かしこまりゆましたあー！』と囁むは怯えるはで凄かった。

注文が届くと黙々と食べ始めた。

食べ終わるとポツリと話し始めた。

「お姉さん趣味なんだね」

「う、うん」

「…時々鬼畜も好き、と」

「ごめん、それ以上言わないで！」

「うっさい、黙れ変態！」

穂奈美は何度もドリンクバーに行っでは飲み干して行っでは飲み干してを繰り返していた。

13回目（暇だから数えてた）を飲み終えた時にまた口を開いた。

「…思ったんだけど、ああいうのどこで買うの？ビデオショップでは買えないと思うんだけど…年齢詐称？」

「ああ、ネットで買った」

「へえ…買えるんだ…」

知らなかったわと言って納得しながら14回目のドリンクバーを取りに行った。周りを見渡すと店員がこつちを睨んでいた。もう1時間は居座っているからさっさとしろとでも言いたいのだろうか。コーラをついできた穂奈美は飲み干した。

「ネットで買ったなら…パソコンにも画像とかあるのかしら…？」

「うぐっ！」

普通に入っている。でも誰かが触ってもばれないようにフォルダ名を変えてるのだが…触られたとしても平気だと思いたい。

「うふふ…徹底的に調べてやるんだから…その間、芳樹は縛ってベツドに転がしとくから…好きなんでしょ？」

「いや、俺は縛る方が…」

「ふふ…たまには縛れなさい…目覚めるかもよ？」

「嫌だ！何この浮気がばれた彼氏みたいな重さは?!」

「でも私が彼女じゃなくて親友で良かったわねえ…私が彼女だったらこれだけじゃ済まさないわよ…?」

「嫌だ！こんな親友は嫌だ！」

公共の場なのに叫んでしまった。「先に外に出てるから」と言っただけで先に走ってしまった。会計を店員に任せると一枚の紙を渡してきた。中身を見ると『私も同じ事があったからわかります』と書かれてた。思わずその店員と握手をして俺は目頭が熱くなった。

その後は本屋やらゲームセンターに寄って夕方になった頃赤尾宅にお邪魔する事になった。逃げたかったけど腕をホールドされて無理だった。中からは醤油が焼けた匂いがしてくる。

「ただいまー！お母さん、連れてきたよ！」

「お、お邪魔しまーす…」

玄関に入ると柑橘の良い匂いがした。芳香剤だろうか？するとパタパタ音がしてリビングと思われる所から女の人が出てきた。

「あらー、いらっしやい。あなたが芳樹くんかしら？」

「はあ、そうです」

佐知子よと名乗った。よくみると穂奈美をそのまま大人にした感じだ。穂奈美自体が大人っぽいのだが…さらに大人。アダルトイな雰囲気だ。ただ、髪は短く切りそろえてて目元に泣きぼくろ。一回見たら忘れなさそうだ。

「あらあら、穂奈美ちゃんが惚れちゃうのも分からなくは無いわねえ…」

「私、そんな事一言も言っていないけど？」

「またまた照れちゃってえ…穂奈美ちゃん初めてじゃない？男を連れてきたの？それでさあ…」

クイクイと引つ張られたから振り返ってみると呆れてる穂奈美。耳が赤くなってる。さっきの返事は感情を抑えて言ったのだろうか…

「ウチのお母さんこんな感じだから無視しても良いわよ…」

これからこれが毎日続くのだと思うと胃が痛くなった。

飯の間あなたは嫁に出すお母さんかと思うような質問をしながら食べ終えた。とりあえず、彼女は親友ですと返した。

穂奈美が部屋に来てくれと言うのでキヤーキヤー黄色い悲鳴を上げる佐知子さんを置いて部屋に入る。うつわ、ピンク多いなあ…メルヘンよりお嬢様趣味？異様にレース系が多いような…

「ちょっと…恥ずかしいよう」

「別にいいじゃねえか。見られても平気だろう？」

「やだあ…見ないでえ…」

「うつわ、これすげえ…」

見てるのは部屋だよー。最後のどでかいぬいぐるみが発見したから

行っただけだ。それ以上の意味が無い！

「はあ…恥ずかしい…でもさあ、芳樹？このまま来続けても大丈夫なの？私から誘って置いてアレだけどここまでお母さんが首を突っ込むとは思ってなかったわ…」

「飯食わしてくれるからいいんだけどさ…」

夏の間、どれだけ精神を擦り減らせばいいのだろうか。

夏の狂想曲・・・1（前書き）

うーん・・・上手く表現できてない・・・

ールド建設。それを羨ましそうに眺めてた穂奈美がいたからふざけて俺の腕を組むかと言ったが笑ってデコピンして来た。「ちょーしに乗ってないでよね、色男」だそうだ。とは言ったものの俺の隣に並び話し相手になってくれたしなっあってやった。森を抜けるとどこでかいお屋敷があった。玄関前には美人メイドと初老の執事。

「「うわあ、メイドだあ……」」

俺と幸平はつぶやいてしまった。別にメイド趣味ってわけでは無いけどコスプレでは無く本物が見れた事に感動した。真琴さんは浮気だとか騒ぎ出して首を締められる事件、俺は何も無かったが隣からの視線が痛かった。

「お話通り、楽しい方々のようですね」

「うるさすぎるくらいですが…えと今回紹介を受けた坂上芳樹です」

「同じく赤穂穂奈美です」

後は南部幸平と磯部真琴と伝えた。どうやら中に通されるらしく絶賛喧嘩中（真琴さんの一方的な暴力）を仲裁すべく幸平を好きにしていい権権利（本人の意思関係なし）を与えて銀中央宅にお邪魔する。

「私に着いて来てください…逸れると帰れませんよ？」

「…今まで逸れた人はいるんですか？」

「はい…残念ながらまだ見つかってません…」

「やばいよ、芳樹。僕怖いんだけど…」

「大丈夫です、そんな事は今までございませんから」

「うそだったの?!」

なんともまあ騙しやすい幼馴染だな。何回か曲がり銀中央さんの部屋

に案内された。入り口には『緋奈と翔一の…』となってる。『…』の部分は何なのか解きたい。

入るとダーツやらビリヤード台とか遊具系が沢山ある。

2人は俺たちに気づくところちに来た。

「おはようございます。良い天気ですね」

「おはよー！ねえ、早く行こうよ！」

テンションが上がってるのは真琴さん。もう色々抑える気がないのだろうか。テンションが上がるたびに幸平のテンションが下がってるから中々な見ものだ。

「では早速行きましょう」と銀央さんが言うと共に玄関に出た。そこにはリムジン…これに乗るらしい。

「…これって凄い経験じゃないか？」

「そうね…私もいい経験になりそうだな…」

啞然とする俺らはいち早く持ってたキャリーバッグをトランクに入れてもらいリムジンに入る。そこには画面の中でしか見た事のないような光景が広がってた。

横長のソファがコの字になっていて空いてる部分には大型テレビ。そしてティーセットが置いてあった。

「なあ、穂奈美？」

「…何かしら？」

「夢だと思いたいから頬を掴ってくれないか？」

「奇遇ね…私もお願いしても良い？」

「よし、一緒に引っ張るぞ」

向かい合いお互いの頬を少しだけ指でもつ。

「「せーの！」」
「「！！！」」

イタイイタイ！爪が食い込んで痛い！

「ほらいー、いはいからはあして（穂奈美ー、痛いから離して）」
「あんらこほはなひなはいよ（あんたこそ離さないよ）」
「「うー！」」
「「むー！」」

そこからはデッドヒートが始まる！お互いの根性を試す…

筈だったが翔一と真琴さんに叩かれたからやめた。

「何してるのよ、2人とも…」
「いや、これが現実かを分かるために…」
「バカな事をしないでよ…」
「あら、バカなのはよし…」
「穂奈美もよ！」

ギョつと穂奈美に睨まれたから睨み返す。

「くそ、この決着いつかつけてやる！
ー望む所よ！」

そんな感じにアイコンタクトした。多分、こんな感じだ。
…だめだ、俺もテンションがおかしいらしい…

全員が乗るとこれから参りますとさっきの執事が言って車が動き出

した。

「なあ、銀央さん？これから空港に行くのか？」

「はい。もう席は取ってあります」

「とても楽しみになってきたわ…！」

テンションがそれぞれ上がる。俺も良い感じに上がってる。

「そういや…芳樹、幸平？ゲームは持って来たか？」

「ああ、言われたの持って来たぜ」

「僕もあるよー」

「…もしかして、沖縄まで行ってもゲームするつもりなのかしら？」

「あ、うん。勿論」

「…ここまで来てゲームはどうかと思いますよ？」

「そうよねー」

女性陣からの大批難。それに対する俺たちの反論は…

「…はい、やめておきます」

「俺もだ…」

弱っ！男弱い！

「で、芳樹だけやる…って事はないわよね？」

「…ハイ」

訂正。俺も弱いようだ。

その後、みんなのできるトランプをしようと言う事で大富豪する事になった。6人だから平民が2人になる。大貧民は大富豪の言う事を絶対に聞くとする追加ルール付きで…

「だー！またまけたよ！」

「…芳樹弱くない？」

「うっさい！」

さつきから負けてる。大富豪は穂奈美固定。こいつらグルじゃね？

「ふふ…さつきの仕返しよ！」

うっわー！通じてたのかさつきのアイコンタクト！

俺が冷や汗だくだくにしていると穂奈美はしてやっつたりの笑みを浮かべていた。数秒後にはプラスニヤニヤを加えていた。

「次はねー…足舐める？」

「やだ！それはやだ！」

ニヤニヤの原因はこれ？早くしろと言わんばかりに靴を取り靴下を脱いで足を押し付けてくる。

「あれー、大富豪の言う事は絶対…よね？」

「いやだああああああああああ！！！」

車に俺の悲鳴が木霊した。前から運転手が覗いてたが大丈夫だと返事された。俺が大丈夫じゃねえよ！

空港に着いた時俺は真っ白になっていた。あしを舐めーはしなかつたけどこの旅行は完全に穂奈美に尽くす事になった…今から逃げようか？

「逃げたら…殺るわよ？」

「ニゲナイカラソソナニエガオミセナイデ…」

「あ、芳樹壊れたよ。写真撮ろう、真琴」

「天然記念物じゃないんだよ？」

「ま、そうだけどね」

搭乗時間が近くなり荷物検査を受けた。銀央さん、真琴さん、穂奈美、俺、幸平までは通れたんだけど…

「ちよっ！何で俺だけ引つかかるの！」

「何を持ってきたんですかー?!」

「知らねえ！」

曰くベルトの金具が引つかかったらしい。普通外さないか？
帰ってくると翔一は泣いていた。

「帰ってきたから行きましょう？」

「そうですね」

「うおい！この涙の訳を聞かないのか、赤尾さん！」

更に涙を流して穂奈美に詰め寄っている。穂奈美は心底嫌そうに銀央さんは凄く殺気を翔一に当てている。

「…しょうがないわね、聞いてあげるわよ。緋奈も聞きたいでしょ？」

「勝手に言うてください」

異様にニコニコした銀央さんに怯えながらも話し始めた。

「えっとな、俺が詰め所に連れていかれるとまず有無も言わずにベルトを取られて、次にズボンまで降ろさせようとするから頑張っ

て抑えてたんだけど…そいつ男色趣味のヤツで…って聞けよ！」

俺達は搭乗時間になりそうなため翔一を本当に勝手に話させる事にした。

大丈夫、間に合ってたから。

こうして夏の旅行が始まった。

実は俺は飛行機に乗った事が無かった。幸平も同じらしく離陸の瞬間にテンションが上がってた。ただ、気圧の事をすっかり忘れていて耳が痛かったが耳抜きをしたので回復。

余裕が出た俺らは窓の外の景色を眺めて楽しんでた。また、座席にあるボタンが何だか分からずに適当に押してたら客室乗務員が来てしまうと言うハプニングが起きたが：それ以外に問題は起きなかった。

皆で大富豪をもう一度やって次は俺が勝ち穂奈美にこの旅行中尽くすと言う事をやめさせようかと思ったが上手くいかなかった。

翔一が見事勝ち取りビリだった銀央さんにバニーを来て一日過ごせという変態チックな要望を出し、叩かれて着陸まで目覚めなかった。追加だが着陸の時にもテンションが上がった以下二名。

飛行機から降りて外に出る。潮風が吹いていて気持ちいい。

「わー…暑い…風があるから涼しく感じるけどさあ…」

「幸平、腕を絡めて良い？」

「暑いから…やめて？」

正直、暑い。夏だし常夏の島だからしょうがないとは思っているんだけど暑い。

さっき会った執事が来て車でホテルへ向かうと言われたから車に乗る。またリムジンだよ…中はクーラーが効いてて気持ちいい。

「ふう…涼しいわね…」

穂奈美はパタパタしてるからその…色々見えそうなわけで…

「見るな、変態芳樹」

「まだ見てないから！」

「まだって事は見る予定だったのよね？」

見下すような視線を向けてきた。見せたく無かったらやるなよ…
目線の行き所に迷い窓を見る。すると海岸沿いを走ってたらしく綺麗な海が見えた。

「やつべえ、こんなに綺麗だと思わなかったよ…」

「あら、そうかしら？」

「ああ、少なくとも俺は汚れた海しか知らないな」

「まあ、あそこ付近は汚れてるからね」

隣県にある海と目の前の海を比較して見る。ここで泳いだら次からあそこで泳げなさそうだな…

暫く車を走らせると泊まるホテルのロビーに降ろされた。いかにも金持ちが泊まりそうな場所なだけど…

「ねえねえ、銀央さん？僕達ここに泊まるの？」

「そうですね、ちゃんと3部屋ありますよ」

「へえ…って3部屋？」

「はい」

どう言う風に割り振るか知らないが銀央さんの提案でホテルに荷物を預けて近くのビーチに行く事になった。

更衣室を出て思わず太陽の眩しさに手を翳す。さっきまでそこまで

気にしてなかったがきつい事がよく分かる。

俺と翔一と幸平は着替えたとしても下だけだから先に出てパラソルやら道具の準備をした。

一通り終えた所で女性陣が来る。あいつら狙ってきてないか？

「おう、こっちは終わったぜ？」

「お疲れ様です…その前に私に何か言う事はないのですか？」

「え、ああ。似合ってるよ」

「ふふ…ありがとうございます」

真琴さんは私も私もーとか言って幸平に感想を求めている。

「私には褒めてくれそうな人が居ないからあなたで良いわ」

「何？そのお腹にある黒子が綺麗だとか言えば良いのか？」

「それ、褒める部分ピンポイントよ…そうじゃなくて水着の方よ」

「あー、はいはい」

まず周りの格好を見ると銀央さんは真っ白なワンピース。スレンダーだから似合ってる。真琴さんはビキニ。あれ…ヒモビキニってやつか？あまり知らないけど。で、穂奈美は黒ビキニにパレオ…何で俺の言う通りにしたんだよ…

「言う通りにしたわよ、変態」

「色々言いたいけど、まず俺を変態変態言わんでくれ」

「しょうがないわね…どうかしら芳樹？」

「うん、いいんじゃないか？似合ってるぞ？」

「褒める時の常套句ね…もう少し捻りが欲しかったわ…」

「と言っても素直な言葉だし」

「まあそうね。ありがとう。次はまともな返答を期待するわね」

穂奈美はスタスタと歩いて行く。そういうのは彼氏にでも言っても
らえよ…とボヤいてしまった。

「おい、飲み物買ってくるから何がいい？」

「そうね…じゃあ炭酸系なら良いわよ」

「分かった。おい、幸平達！飲み物何がいいかー?!」

それぞれ口にするが結局は炭酸系だったから覚えるのが楽だった。

海の家に行くと炭酸はサイダーしか無かった。値段は…うげっ、2
00円かよ…渋々買って幸平たちに渡す。金払えと催促するとブー
イングが上がったが黙らせる。

1200円も払ったんだぞ。高校生にその値段は高すぎる。
周りを見ると穂奈美は岩場に居たので届けてやる。

「よう、海に入らないのか？」

「海は好きになれないのよ」

「えっと…かなづち？」

「そう言うわけで無いけど…プールは入れるけどね。海だけは嫌な
のよ」

「ふうん…」

俺はそれ以上聞くのをやめた。見つめてた穂奈美の目が涙が溜まり
つつあったのだ。

「芳樹、遊んできてもいいのよ？」

「いや、お前が遊ばないんだっいたら俺も良いさ」

「そう」

「俺はここに居るから」

「…そう」

少し反応が遅かった気がする。

夜、ホテルのレストランで大まかな日程の説明がされた。明日の昼は自由行動、夜に会食パーティーがあるらしい。服はこっちで用意するらしい。3日目は自由だけど夜に楽しい楽しいイベントがあるそう。で4日目は団体行動。来て欲しい所なんだって。

「つか…会食パーティーに俺達が参加して良いのか？」

「ええ、父が是非だそうです」

「良いお父さんだな」

翔一はそう言ってるが俺には何か裏があるしか思えない。食後、俺達は部屋に入る事になった。

「翔一、幸平。ゲームやるぞ」

「うん、そうだね。夜は眠らない！」

「寝たやつには顔に落書きな…ククク」

俺達は修学旅行のテンションで夜は遊び倒そうとしたのだが、

「あら、それ無理ですよ」

「…何でなの？」

訝しげに幸平が聞くと

「だって3部屋ですよ？男と女で別れてませんよ？」

「「「「はあ?!」「」「」」

驚いたのは俺と翔一と幸平、それと穂奈美。

「どどど、どどどどど、どどどどどっ!」

「落ち着いてよ、芳樹」

「落ち着いてられっか!どう言う事だ!」

説明を銀央さんに求める。するといかにもスマートに的確に且つ残酷に言った。

「恋人と同じ部屋の方が良いから!」

ちよおつと待てえ!流れるに俺と穂奈美は同室か!?

「そつちの方が良いですよね、穂奈美さん、真琴さん?」

「うん!」

「え、私恋人居ないわよ?!」

「え…芳樹さんと付き合ってたんじゃないの?」

「んなわけ無いわよ!」

本当だ。俺らは…友達だ。相当仲が良い。親友だな。

「あり、でもみんなあいつら付き合ってるとか言ってたぜ?」

「誰だよ、言ってるの!」

「え、クラスの人間」

どうやら殆ど穂奈美と一緒にいるから勘違いされたんだろう…ごめんな。

「……」

やばい、気まずい。さっきの事があったため……うん。
とは言ってもそつは言ってられない。

「あの…穂奈美？」

「な、何かしら…？」

「…ごめんな、俺のせいで…」

「別に良いわよ…」

そつばを向きながら答える穂奈美。しかしなあ…寝る所どうしよう。
あるのはダブルベッドのみ。これで寝れるとしたらラバー以上の関
係のみ。ここで出す答えはただ一つ。

「ああ…俺浴槽で寝るから良いよ。そこで寝て」

とりあえず寝ようと思って浴室に閉じこもろうとする。

「ちょっと…どこで寝るの？」

「いや、浴室で寝ようかと…」

「それ風邪ひくわよ…」

「だとしてもなあ…」

どこで寝るんだよ…床とか？いやいや、穂奈美は親友だとしてもあ
いつは女だぞ？！

「いいから、ベッドで寝なさい！」

「だーかーらー！」

わーわーわー！どうでも良い事だけど俺は譲りたくない。穂奈美は

どうして譲りたくないのやら…風邪ひくからか？
それから5分後…

「よしよし…おやすみ芳樹」

「オヤスミナサイ」

何か負けていつの間にかベッドに眠らせていた。

絶対に緊張して眠れないなあ…と思ったんだけど

何か寝られた。

「何よ…もっ少しくらい…」

夏の狂想曲・・・2（後書き）

気づけば真逆の季節の事をしてます。

「…察せなくてごめん…」

「別にいいよ。お前も…赤尾さんの所で何かあったな？」

「…うん」

2人して涙が出てきてお互いに抱きしめあつた。たまたま出てきた銀央さんに写真を撮られたが何をする気だろうか。お願いだからそちの気のサイトにはアップしないで欲しい。

んで、朝食中。今日の日の出てるうちは自由行動と言われてたので真琴さん、銀央さんはそれぞれの片割れを連れて出かけてった。

「で、俺達は置き去りなのか？」

「そうみたいね…しょうがないわね。芳樹で我慢するわ」

「嫌々ならやめとくぞ？」

「迷子になりそうだからお願いしたいわ。あなたがいると迷子になったと言わないで済みそうだし」

「…なんだよ、それ」

何はともあれ共に出かけるツレをゲット。少しは退屈しなさそうだ。

場所は変わりちよつとした繁華街。飲食店はあるしゲームセンターはあるしな所だ。

結構長いらしく1kmはあるとネットに書いてある。ウィキ様々かな。

「芳樹」

「ん？」

クイクイと引つ張られたから振り返る。指で指してる方向を見ると

この地域独特の服を販売してる店。

「あそこに行ってみたいわ」

「…着いていけばいいのか？」

「できればお願いしたいわ。見知らぬ土地で1人で居たくはないわね」

「ん、分かった」

こうして穂奈美の服選びにお供する事になったが…

「うーん…少し色が…でもデザインは…だし、こっちだと…」

うん、長いね。何が？何が？買って買い物時間。長いつて事は知ってたんだけど、まさかここまで長いとは…もう1時間は経過した。俺だったら…10分くらいか？

「芳樹、どっちがいい？」

「今、右手にあるやつ」

しかもこんな感じで服の感想を聞いてくるからふらつと隣のコーナーとかに行けない。行った所で呼び戻されるだろう。いや、実際そうだったんだけどね。

ともあれ買い終わると次にあんたのも見よつとか言っただけに買おうとしたら怒られ勝手にコーディネートされて出てから気がついて時計を見ると2時間経過。

「わー…よくこんなに服屋にいられたな。自己最長記録だ…」

「私はもつと長いわよ？」

「どんくらい？」

「4時間ちょい」

服一つ選ぶだけでどんだけ時間がかかるんだよ…と言いたかったがしょうがないのかなと思って言うのをやめた。歩いてるとタコスが売ってたから買ってくるの意を伝えて待つてもらった。

外国の販売人に You're nice guy! と言われたが無視する。男に言われた所で嬉しくない。

代金を払い穂奈美の所に帰ろうとするとお坊ちゃんみたいな人とスーツを来た厳つい人が居た。

「…り、なあ……だろ？」

「い…、なん…よ」

周りの雑踏によって聞こえないが穂奈美が首を振って嫌々な顔をしてるためあまり良い雰囲気ではないだろうな。

さて、どうしたものかなと思ってると俺に気づいたらしく助かった様な表情をしながらやってきた。

「良かったわ、芳樹。あいつらしつこくて…」

もう一度さっきのお坊ちゃんみたいな奴を見ると凄い形相で睨んでいた。ただ、何も言わないし何もして来ないから何だか分からなかった。

「…良いのか？」

俺は買ってきたタコスを手渡しながら耳元で囁く。

「ひゃっ!?!…別にあんなナンパ野郎ほっというて良いわよ…それより耳弱いみたいだからやめてくれるかしら?」

「どれ、もう一度…」

「やあ〜！痴漢よ！」

「人聞きの悪い事言うな！」

このふざけた会話の中それなりにあいつの視線を気にしてたが俺から目が離れる事が無かった。

「…あいつを始末しよう」

ゾツとするような言葉が聞こえた。穂奈美はさっきの事を言ってるが頭に入らない。もう一度見るとあいつは消えてた。

…気のせいだったら良いんだが…

それからはあいつらに会わずに夕方になった辺りにホテルに戻る。どうやら集合時間があつたらしく遅れる事は無かったがもう既にみんな居た。

「やっぱり、芳樹ってどこか抜けてると僕は思うんだ」

「所々良い感じに穴があるよな」

「お願いだから人の欠点を会話の題材にしないでくれ」

4月の新入生テストの話になりかけた所で無理矢理話を止める。やめていただきたい。

それから車に乗せられて会食パーティ会場に向かう。降りると係員が頭を下げていた。足元はレッドカーペット、周りには見た事のあるような人たち。

「ねえ、あの人内田議員じゃない？ほら、汚職のやつ」
「おい、あつちには辰巳選手だぞ！これ俺らが参加して良いものなのか？」

政界の大御所、ベテラン俳優、有名歌舞伎俳優など沢山だ。どう考えたって俺が想像してた会食パーティとは桁が違う。

「私のお友達といえは大丈夫です…さあ、着替えましょう」

更衣室まで通され男女に別れる。中に入るともう馴染みになった執事さんがいた。

「皆さん、こんばんは。これから着替えていただく事になりますが…何か希望ありますか？」

希望と言われても…と思い幸平と翔一を見ると同じような目で見た。

「…お任せします」

見事に声までかぶりました。それから採寸されてそれぞれ手渡された。どう考えたって高価な物だろう。

更衣室に入りなるべく傷つけないように着る。カーテンを引いて外に出ると同時に2人とも出てきた。どれもこれも似たような格好。

「翔一、お前はホストか？」

「そういうお前もホストみたいだぞ」

「…幸平は、可愛いサラリーマンか？」

「…泣いても良い？」

翔一は頭をワックスでオールバックにしてワイシャツの第一ボタンを外してチャライ。幸平は完全にビシツと着こなしているが落ち着きすぎてるし容姿が容姿なので大学出のサラリーマンにしか見えな
い。

お互いの格好を評価し合い…溜息をつく。それを楽しそうに見てる
執事さん。

「ほほっ…溜息を吐いてると数分後には息ができなくなりますよ…
さて、会場に向かいますよう」

「はい」

執事さんに連れられて会場に向かう俺達。会場はどこかの芸能人が
使ったような場所だ。

しかし…広い。人がたくさんいる。

「…広すぎじゃない？」

「想像以上だな…」

会場の広さに呆れていると後ろから声がした。

「良い男の子が3人も居るわ〜！」

「私の好みですし頂いちゃいましょう」

「あなた達…」

3人の美人がいた。いや、真琴さんと銀央さんと穂奈美だけでも
真琴さんは大胆なスリットの入った赤いドレス。銀央さんは真っ白
な清纯そうなドレス。そして穂奈美は…

「…何よ、じつと見ないでよ」

「あ、あ…」

穂奈美は胸元ががつつり見えてるドレスだ。妖艶さが異常に増している。うわぁ…

「…変態」

「いや、これは見ちまうから…」

「うふふ、ここかしら？」

自分で胸元を指してきた。服を少し掴んでチラリとさせてくる。恥ずかしくなって視線を横にすると…

さっきのお坊ちゃんが笑顔でこっちにやってきた。

「御機嫌よう、銀中央のご令嬢様…それと友達の皆様かな？僕は七緒健三郎です」

どうぞ宜しく…と頭を下げた。さつき穂奈美が凄まじく嫌そうな顔をしてたから自分の中では最悪の印象しか無い。

「それと…ここに来るとは思わなかったよ穂奈美ちゃん」

「どこに居ようと勝手ですよ…」

「うんうん、その冷たい所も健在だねえ」

一人でうんうんと頷いていた。

「さて、お邪魔しちゃ悪いから僕は抜けるよ。それでは…御機嫌よう」

頭を下げて戻ろうとする。その瞬間…七緒は俺を殺す目つきで見てきた。

「おい、穂奈美？」

「あの方とお知り合いなのですか？」

俺と銀中央さんが同時に発言したから変に混ざったけど穂奈美は答えなかった。

「そうね…幼馴染って所かしら。昔に住んでた所のね。私、高校入学前に引越してきたから」

「ふうん…？」

昔の事を言う穂奈美は笑いながらも目が泣いていた。

さあ会食しましょうと銀央さんが空気を変えてくれたため目の前にある餌にかぶりつく。

うっわ、エビフライうめえ。卵焼き甘い…

「うふふ…沢山食べてくださいな。私の家の料理人が心を込めて作ってくれたのですよ」

「緋奈あ、お前この料理人に習えば？」

「あら、翔一君。私の料理が食べられないとでも？」

「冗談冗談だからナイフを向けなきてくれ！」

「後で、お仕置が必要ですね…うふふふ…」

笑ってる銀央さんからは黒いオーラが見えて思わずたじろいでしまった。

それから間もなく銀央さんのお父さんが開式宣言をすると真っ先に銀央さんの所に来た。

「やあ、緋奈、それに翔一君。それと君たちは…幸平君、芳樹君、真琴さん、穂奈美さんで合ってるかな？」

顔を向けて一人一人名前を当ててきた。勿論、俺達はビックリ。普通、親は子供の名前まで覚えてないものだと思ってたけど…

「ははっ、よく翔一君と緋奈が話題に出してくれてなあ…どうだ楽しんでるかい？」

「え、あ、はい」

俺が慌てて答えるとそうかそうかと笑いながら返してくれた。

「何は共あれ、私の娘と私の義理の息子の事を宜しく頼むよ」

深々と頭を下げられた。この人は絶対にお金持ちになっても生活態度まで変えなさそうな人だ。あ、お金持ちだね。

それじゃあ、とそそくさと帰って行った。すると銀央さんと翔一の周りに一気に人だかりができた。

「私は石油の輸入をしてる…」

「私は以前銀央さんのお父様にお世話になった…」

とコネを作ろうとすりよる奴らばかりだ。

「大人って…汚いわね…」

「そうよね、あんなにコネを使ったって緋奈がお父さんに言わない限り何も起こらないのに」

「多分、翔一が会社を継ぐって思ってたやっていると僕は思うよ」

「何にしても…汚い」

銀央さんと翔一が開放されるまで俺らは大人の汚さについて語った。どんな会話だよ…

「ふう…私疲れたから外に行ってくるわ」

「俺も行くよ」

空気に耐えられなくなったのか穂奈美と一緒に外に出た。夜だから涼しくて汐風が気持ちいい。

「ふう、嫌だわ。あそこは」

「そうだな、俺も嫌いだ。銀央さんのお父さんは気に入ったけどな」
「あら、それ私も同感だわ」

目が合つてクスクスと笑い合う。俺が砂浜に腰を下ろすと穂奈美も下ろしてきて隣に座った。

「で、何で俺の肩に頭を乗せるんだ？」

「いいでしょ、ちよっとくらい」

「まあ、な」

沈黙が俺達を包む。するとすつと腕を背中に回してきたから俺も釣られて回す。ピクツとしたけど、少しこっちに寄ってきた。

「あら、積極的ね」

「穂奈美もな」

笑い合つとふと穂奈美の顔が目に入った。色白な顔、柔らかそうな唇。いつも挑発的な目をしてるが今に限っては潤ませながら何かを期待するような目をしてる。

「穂奈美…」

「うん…」

目が閉じられ全ての視線が穂奈美の顔になりつつある時、

視界がいきなりブラックアウトした。

頭が痛い…確か穂奈美が目を閉じて…って！
ぱっと顔を上げて体を起こそうとすると無理と言う事が分かった。
顔が誰かによつて抑えられていたのだ。触られてる部分が異常に痛む。

「…健三郎様、目覚めました」

「お、ありがとうございます」

健三郎…？目線だけを動かすとさっきのお坊ちゃんもとい七緒がいた。

「ええと、坂上芳樹君だよね？」

「ああ…」

一瞬否定してやるのかと思ったが調べられてそうなので素直に白状した。

「だめだよ、人の許嫁に手を出しちゃ…」

「はあっ？」

「驚いているようだね…そうだよ、穂奈美ちゃん？」

七緒はいやらしい目つきでドレスの穂奈美を舐めるように見えた。穂奈美は、黒服の人に取り押さえられてたが首だけで否定した。
なるほどな…

「ははっ、恥ずかしくて否定しちゃってるんだね」

…穂奈美が嫌がる理由が分かった。異常な程の都合の良い考え方…
だろうか。

言葉で説明できないがこちら辺が嫌なのだろう。
もしくはそれ以上の何かか…

「いい、芳樹君？これから穂奈美に近寄らないでね？」

「何でだ？穂奈美の彼氏って訳でも無いし…こいつには好きな奴がいるんじゃないか？」

「…芳樹、あそこまでしておいてそれ言えないわよ…」

「…そうだぐっ！」

いきなり靴で頭を踏みつけられた。殴られた部分が熱い。

「…ダメだ、お前は一切喋るな。さっきから親切にしてやってるのに良い気になりやがって…」

「芳樹！」

ガスツガスツと何度も踏みつけられる。そういう気はないんだけど！

「何でだ、僕が、触れなかった、穂奈美に、触れるんだ！」

「ぐっ…！」

「僕は穂奈美が欲しかった！そのために穂奈美が仲のいいやつは徹底的に潰してきた！穂奈美が僕を見てくれるように！なのにお前は穂奈美を奪おうとしてる！だから僕はお前を潰して穂奈美に振り向いて貰う！」

「いやぁぁぁ！芳樹！」

そろそろ目が霞んできた…くそ…

「はい、そこまでです」

その声と同時に取り押さえられてた奴が消えた。

「よう、大丈夫か親友？」

「その声…翔一だな」

「殴られすぎて見えないのか？」

「そんな所だ」

一度も目は触られてないから失明は…ないだろうけど…

「芳樹い！」

「と、穂奈美だな。心配かけ…」

「心配するわよ！あんなに…ううっ…」

俺を抱きしめて泣き出す。

「芳樹が蹴られてる時にどれだけ心配したと思ってるのよ！」

「ごめん…」

「さっさと、私を渡して助かれば良かったのに…バカ！」

向こうでは銀央さんと…執事の人で七緒に何か言ってる。

「芳樹？」

「…ああ…」

見上げてくる穂奈美を見て、

…ああ、やっぱり俺は…

その考えに達して安心して気絶した。

目が覚めるとまたもや見慣れないホテルの天井。
どんな状況か思い出しかけた時に体を起こす。

・・・俺、気絶したんだな...

体が砂っぽいから風呂でも入ろうと思って手をベッドに付けると柔
い感触があった。暖かくて柔らかい...これは...
布団を捲ると穂奈美が寝ていた。

...こいつも大丈夫だな。と思いかけたが着ている服を見て愕然とし
た。

ナース服だった。

「何でだよおおおおおお!!?」

ここに来て二度目の叫び!流石に煩かったのか目を擦りながら起き
てきた。

「おはよ...芳樹」

「どうなってるんだよ?!」

「どつって...ねえ?」

深呼吸をしてとりあえず落ち着く。

すーはーすーはー...うっし...

「落ち着けるかあ!」

「きゃあ!」

がーっと唸ると穂奈美はびっくりした。ようやく体を起こしてくれ

た。

「芳樹、ダメよ。頭怪我してるのよ?」

「え、うぐっ!」

漸く思い出し頭に鈍い痛みがやってきた。頭に手をやると包帯が巻かれていた。

「ようやく理解してきた…穂奈美が看病してくれたのか?」

「あつたりー。で、看病するならナースだって紗東くんが…ね」

「…翔一殴る」

あいつがナース服を持って穂奈美に語ってるのが安易に想像できる。いや、真面目に聞かなくても…

「…で、みんなは?」

「私がお願いして外に遊びに行つて貰ってるわ。私の幼馴染が怪我をさせたのだから…私が看病しなきゃって思つてね」

「…っーことは俺の世話は完全に穂奈美がするのか?」

するとベッドから立ち上がり振り返つて妖艶さをMAXにした笑みを浮かべた。

「しつかりとご奉仕させて戴きます、芳樹様!」

最後にウインクを付けてきた。一瞬綺麗と思つてしまった。とりあえずご飯を食べようと思つて立ち上がるが上手く立ちあがれない。それを見越してか下の購買で買ってきたというパンを持ってきた。

「はい、あーん」

「何でそれをするんだ？」

「食べさせてあげてるんじゃない。私みたいな美少女が食べさせてあげてるんだから…しっかり食べなさいよ！」

「いや、そこでキレるか?! つか、自分で美少女とか言っな！」

「そうね…美人よね！」

「美人つてのは合ってるけど、自分で言うなあ…!!」

もうこいつ嫌だ…俺の事をからかいながら世話をするんだもん…少し暑いわとか言っつてナースのボタンを少し外して肌がチラチラ見れてグツとく…いや、そろそろ俺が耐えられなくなってきた。

「そんなに胸元を見て…ヨクジョーした？」

「しません」

チラチラ見てたのは事実だけれどもヨクジョーとやらはしてない。

…もう少しボタンを開けてくれれば…いや違う違う！

「…前にも言っただけど、そういうのは好きな奴にやれば良いのに…」

「私も昨日言っただけどキス未遂までやっておいてそれは言えないと思っわよ」

「ぐっ！ け、けどなあ…」

「それにね…」

立ち上がり窓を開ける。夕風が頬を撫でる。穂奈美の髪がふわりと舞う。

「私、あなた以外に興味無いから」

外を見たままの言葉。それに対して俺は…

「そっか」
「そうよ」

これしか返せなかった。薄々とは分かってた…つもりだけどこう言葉にされると動揺する…とは思ってなかったが、目の前の現実をすんなりと受け入れられた。

「俺も穂奈美以外に興味無いな」
「そうでしょうね。見てれば分かるわ」
「そっか」
「そうよ」

これもまたあっさりと。ドキドキする訳もなくすんなりと口にできた。

「これ…告白じゃねえな」
「そうね、まだ『月が綺麗ですね』って聞いてないわ」
「悪いけどまだしつかりとその言葉を言えないから」
「確かにね、私も今言われると困るわ」

振り返り俺の隣に座ってよりかかってくる。今日は甘い香りだな。

「待っててな？」
「構わないわ。ずっと待ってる」

穂奈美を見ると黒い髪がある。何となくそれを撫でてみた。

「ん…気分いいからお願い」
「ハイハイ」

なるべく痛くしないように優しく労わる。可愛いなと思ってしまっ

「…さつきから胸元チラチラ見てる!」

「いや、見てない。見てないからな」

こいつの衣装が悪いんだ。真横にいるから見下ろすと上から色々見えるわけで…

「やっぱり変態だわ」

「お前もな」

「否定できないわね」

クスクスと笑う穂奈美。それに釣られて俺も笑ってしまった。

「…そういえばシャワー浴びてないな」

海を見て思い出した。昨日は体ごと押さえつけられていて体が砂を被ってた筈だ。

「穂奈美、シャワー浴びるからどいてくれ」

「いや」

「嫌ってなあ…」

「私が拭いてあげる。ナースの仕事でしょ?」

するとどこからかタオルを取り出してきてすぐに浴室に駆け込み水で濡らしてきた。

「お前…まだそのネタを引きずってるのか?」

「どっ?一回くらい任されて拭かれてみない?」

「拒否します」

「いいじゃない。どうせそのうち裸見るんだし」

「俺の将来はそこまで確定なのか?!」

「当たり前!私、多分くつついたら離れないわよ」

「くつつかれる前にリリースします!」

「半分乾いてるから無理よ!観念して拭かれなさい!」

「おい、俺頭怪我してるんだぞ!?!」

そこからは攻防戦。私に責任があるからと譲らない穂奈美と色々マズイから譲れない俺。

周りから見ればいちゃついてるしか思えない様な光景だが最低でも俺は必死だ。穂奈美はどこか楽しんでる。

結果として上半身だけ拭いて貰う事にした。

「って、さりげなくズボンに手をかけるな!キャラ変わりすぎだ!」

「いいじゃない。今のうちに学し…いえ、何でもないわ」

「こんの、痴女!」

「つつさい、変態!」

この後帰ってきた幸平と真琴さんに写真を撮られた。

一気に泣きたくなつた。この数時間の事を忘れたいが…忘れてはいけない事があるから忘れない。

いつになるんだろうな。

夏の狂想曲・・・5（後書き）

次回投稿は12月13日となります。

その後、全員にかわかわれて穂奈美が『まだ告白してないわぁ！』とか色々爆弾発言をしまくって更に誤解を生みそうだから帰らせた昨日の夜。

好き合ってるからと言って同じベッドで寝て何も起きない。ドキドキはしたけど穂奈美に手を握られると不思議と落ち着いた。繋がってる感覚とか言つのかな。ともかく落ち着いた俺はぐっすりと寝てしまった。

そして朝、何でこうなってるのか誰かに問いたくなかった。

「暑い…」

今、穂奈美は俺に完全に抱きついていて。足は絡められ腕は俺の体を回っている。頭は俺の腕に乗っている。柔らかい感触と重い感触と柑橘の匂いと息がかかってさぁ大変。

(これ、起きるまでこうしなきゃいけないのか…?)

起こさないように横を向くと穂奈美の顔が間近に見える。どこか安らかそうだ。

「綺麗だな…」

いつもは強気そうな目も閉じられ柔そうな唇に長いまつげどこまでも綺麗に作られている。いつまでも見てられそうだ。

思わず頬に触れてみる。ぷんぷんとして気持ちいい。

「…何してるの」

「うわわ！」

こいつ起きてたのか？！

「綺麗とか…照れるわよ」

「いや、無表情にイヤイヤされてもなんとも無いんだけどな…てか、最初から起きてたのか？！」

「横を向かれる前から起きてたわ」

「…もうやだ、この人」

「将来は有望なのに？」

「もう自分で言わないでくれ」

恥ずかしいから穂奈美に背を向ける。たまたま部屋の時計に目が入る。もう6時だな。

「…外に行かないか？」

「良いわ。かつこうはこのままでいいわよね」

「裸と下着姿じゃなかったらな」

「…ちっ」

「『ちっ』じゃねえ！」

何は共あれ外に出る事にした。無人のロビーを抜けて外に出る。観光地とは言え早いからまだ開店はしてない。

「海行くか」

「…膝より上に行かないのなら」

「分かった」

靴を脱ぎ素足で歩く。冷たい。

「そういえば、素足って何かエロくない？」

「何基準でだ？」

「さあ…でも『素』とか『生』がつくと何か扇情的ね」

「それよく分からない」

「私も分からなくなっただわ」

足が波によつて飲まれる。砂と流されてる感覚が気持ちいい。

「涼しいわね」

「そうか？俺は冷たいと思うぞ？女子って足冷えるとお腹冷えるんだろ？あまり冷たくするなよ？」

「心配してくれてるの？」

「当たり前」

「ありがとうね」

すつと寄ってくる穂奈美。

「恋人じゃねえんだぞ？」

「そう言いながらも肩を抱く人は何なのかしら？」

「ノーコメントな」

「ケチ」

肩を抱き寄せて暖かさを感じ…いきなり冷たさを感じた。

「ん、じっ…」

冷たいのは海の水だ。口の中に砂が入ってじやりじやりする。頭に

は押さえつけられている感触。慌てて振り向くと目を無表情にして口元だけ笑っている一昨日のお坊ちゃん…七緒だ。

「がっ…何を…」

「お前が…お前が…いけないんだ…あんな…表情…見た事がないのに…僕が…作り上げてきた…穂奈美を…」

「芳樹！」

穂奈美が近寄ってくるのが見える。しかし、そこで視界がボヤける。海の中に頭を沈められたのだ。いきなりだったから慌てて…苦しい。

「穂奈美を返せ！お前になんかに穂奈美を触る資格なんてない！あれは僕のモノだ！」

「私はモノじゃない！」

穂奈美の声が微かに聞こえた途端、俺の頭を抑えてた手が消えた。

「はあっ…げほっ、げほっ…」

「芳樹！大丈夫?!」

「けほっ…ああ、ありがとう」

安心させてやるために頭を撫でる。すると安心したのか泣き出した。

「もう…私みたいな事にならないで…！」

（私みたいな…？）

引つかかるような言葉だけど今は問う時間では無い。目の前の七緒が優先だ。

「またお前は穂奈美に触れた！お前みたいに価値の無い平民が触れ

ていい存在じゃないんだ！穂奈美もいつまでも誑かされてないでこっちに戻ってこい！」

「って、すげえ言い草だな……」

悪いが呆れてしまふ。こんな空気だから逆に冷静になれるんだろうか。

「それなら金を払う！幾らなら穂奈美を寄越してくれるんだ！」

「お前な……！」

「僕は早くそのカラダを堪能したいんだ！」

「それが本音か?!」

「ああそうだ！悪いか！」

流石にキレる。穂奈美をカラダだけしか興味を持たないこいつには渡したくない。穂奈美が嫌がらずに真剣に思っやつなら様子でも見ようかと思っただが……こいつは論外だ。

「流石にお前はゆるさねえ……」

「あはは、僕を殴ってご覧！お父様に言いつけて君を徹底的に潰してあげるからね！」

こんの……本気で殴りにかかろうとした。しただから未遂だ。

「そこまです！」

「あ?」

声のした方向を見ると銀央さんと翔一と……変なおじさん。

「そこに君ー、変なおじさんって聞こえたよー！」

「うげっ……」

「まあ良い。それより…」

変なおじさん…いや、男の人は七緒の所に向かい突然殴った！…つてええ？！

「ごんのバカ息子！」

「痛った！何するんですか、お父様？！」

さっきの変なおじさん…七緒のお父さんだったのか。

すげえ顔が敵つい。私は理に反する事は許さん！とか言いそうだ。

「いつまで赤尾さんの穂奈美ちゃんにつきまとうんだ！いい加減にしろ！」

「でも…穂奈美ちゃんはその男に操られてるわけで…」

「んなわけあるかあ！一回頭を冷やせ！おい、こいつを車に閉じ込める！」

するとボディーガードみたいな人が来て七緒を引たくって行った。身動き取れないから俺に対する罵詈雑言だらけだ。DTとか言ってきたがお前もそうだろうと言って黙った。

「ふう…お騒がせしたな。後でバカ息子には教育しておく」

「え、あ…」

冷静になってたのは頭だけで体が着いてこれてない。ちょっと落ち着け。

「ふう…つと久しぶりだな、穂奈美ちゃん」

「あ、はい。お久しぶりです」

「健三郎に何もされなかつたか？また海に沈められたとか…」

「私は大丈夫です。でも、芳樹が…」

「芳樹くんか…大丈夫か？」

「はい、大丈夫ですけど…またって？」

「ああ、その事な…穂奈美ちゃん説明できるか？」

「はい。芳樹、端的に話すわね。昔にこんな感じの海にあいつに呼び出されて告白されたの…でも私は既にあいつの負の部分は知ってたし、私のカラダ目的ってのは知ってたから断ったの。するといきなり笑い出してね…海に倒されてね…『僕のモノにならないなら死んじまえ！』ってね…首を沈められたのよ。だから海が怖いんだけどね…それは良いとしてたまたま見つけた七緒のお父さんに助けてくださったのよ。でも、あいつに会う事を考えると怖くて…引っ越したのよ」

「引っ越しは私が負担したがね…本当にウチの息子が悪い…」

深々と頭を下げられた。

「いや、頭は…」

「いや、下げさせてくれ。申し訳がつかない」

「えつと…」

「うん…何かお詫びの品を送ろう」

「いや、そこまでしなくてもいいですよ…」

「いや、是非送らせてくれ。数週間後になるが…きつと送る。待っててくれ。ではな」

「えつ、え？」

最後まで着いて行けなかった。スタスタと帰って行く。車に乗る直前にこんな事も言った。

「穂奈美ちゃんと幸せにな！」

真っ赤になる穂奈美が視界の端に見えるが…
俺は七緒さんのお父さんの話の進め方に押されて現実が追いついて
無かった。

もうフライトの時間だから…と言われて空港に向かう。

「そついえば緋奈？」

「穂奈美さん？なんですか？」

「連れて行きたい場所があるって聞いたのだけれど…行けなかった
ね」

「そうですね…また来年末来ましょ？」

こうして波乱万丈を超えて人生の半分以上の楽しみを凝縮したよう
な旅行を終えた。

秋へ続く曲

旅行から帰ってきて数日。もうお盆に入る直前だ。夏休みなので特にやる事があるわけでも無いので10時ごろにのそりと起き出しリアルコーンで朝食を済ませる。そして俺は宿題を終わらせにかか
る。ここ数日3時間睡眠でやり続け残す所化学の課題のみになる。
ここんところ宿題 ギター 寝る 宿題のループだ。
とは言え慌ててやる事でもないし外に出ないと不健康なので着替え
てぶらつく事にした。

(暑い…)

額から汗が滴り落ちている。家を出て数分で出た事を後悔していた。
暑い。体脂肪を燃やすならもってこいかも知れないけど、生憎体脂
肪は無い。

駅前に着いた。暑いから扇子を振る人、シャツでパタパタする人、
たくさんいる。ただキャミソールではやらないで欲しいな。冷静に
分析してるとは言え流石に暑いので本屋に入る事にした。ギター雑
誌が入荷されてる事を確認して新刊コーナーに立ち寄る。すると意
外な人物に会った。

「よ、真汰」

「ああ、芳樹か。久しぶりだな」

真汰が本を吟味してた。手元にあるのは有名ハードボイルド小説家
前に読んだ事があるけど難しくて諦めた奴だ。すると真汰―あと女
の人の声がした。

「真汰あ… いたいた。あれ… お友達？」

目の前の大人は俺を指して言った。大学生ぐらいだろうか？茶髪に人懐っこい笑み。何だかお喋りな感じがする。

「ああ、前に言っただろ？バンドのギターの奴。坂上だ」

「ほうほう、君が坂上くんか！ヨロシク！私は百木瑠璃ももきるりね！19歳だよ！」

「あ、はい。宜しくお願いします…」

思わず流されてしまった。やはりお喋りな人らしい。すると真汰の隣にスススと寄り真汰の腕を取った。

「えっと…姉弟？」

「「違う（！）」」

見事にハモった。まあ分かってる。苗字は違うんだし恐らく…

「従兄弟だな！」

「いや、いい加減気付こうね?! 私達リバーだよ!？」

「それだと川になる」

「あつ、そうか! ラバ！」

「それは動物だ…」

2人の世界に入っている。信じられないのは真汰が笑顔な所だ。

「あのー…そろそろ夫婦漫才やめれ。つか、周り見てるからやめてください」

2人は気づいてないが会話を聞いてた人がチラチラと見始めている。こっちが恥ずかしい。

その後、これから遊ぶからとか言って駅に消えてった。デートと言えは良いのに……つか、あの2人が居なくなつた途端に温度が下がった気がする。とりあえず、何も買わないで出た。

続いて駅から出てる大型ショッピングモール直通のバスに乗る事にした。もう完全に行き当たりばったりな日だな。昼だから乗ってる人は少ない。学生が多い。

着くと真っ先に本屋に向かう。駅前の本屋より品揃えが良いのだ。漫画を探し小説を探してみたがなかったのでさっきのギター雑誌を買って出た。

昼になるから飯を取ろうと思ってフードコートにやってきた。

良い感じに空いたテーブル席があったからそこに座って何と無く石焼ビビンバを買った。暑いけどこれは食べたい。

「お邪魔するわ」

「ん、どーぞ」

座ってきたのは穂奈美だった。同じく石焼ビビンバを持っている。

「ここのビビンバ美味しいわよね。家でもやりたいわ」

「…料理できるの？」

「舐めないで。できるわ」

「へえ、まあお前が『料理できないよ』とか言ってる姿なんか想像できないけどな」

「あら、そっちのほうか萌える？」

「なんでやねん」

そう言ってる間にビビンバをかき混ぜる。あまりそのままにしておくと底から焦げるのだ。熱いうちは食べながらもかき混ぜなくては

行けない。

「そっぴやさー」

「なに？」

「誰かと来たの？」

「彼氏って言ったら？」

「俺は食べたらここから消えるわ」

「…嫉妬？」

「イエス」

ふう…と穂奈美はため息をつくると食べ始めた。

「って、お姉ちゃん！何で先に食べてるの?!」

「ああ、美耶。冷めるとマズイからな」

「でも、待っててって言ったよね!？」

「ごめん」

「うん」

俺の後ろから穂奈美をお姉ちゃんと言った人物…美耶ちゃんが来た。

「で、お姉ちゃん。この人って誰？」

振り返ってこつちを見る。穂奈美の鋭い目を柔らかくした感じ。髪は肩に揃えてある。穂奈美が落ち着いてる雰囲気だからこの子は活発…いや、明るい子になるのだろうか。

「ああ、こいつは前に言ったろ？坂上芳樹って」

「ああ、うん。聞いたね…ええと、私は赤尾美耶です。15歳の中3。宜しくお義兄さん！」

ぺこりと頭を下げられたから俺も丁寧に戻す。

「って、お兄さんの発音違うわない？」

「いいじゃないですかー！どうせ近いうちにお義兄さんって呼ぶんだし」

「いや、俺ら付き合っただけよ？！」

「そ、そうだ！」

「えー…そんなに仲良さそうなのに…」

ブツブツ言い始めた。穂奈美を見ると珍しく真っ赤になってた。俺も決まりが悪くなりビビンバを見ると周りの石は冷めておりご飯の底は焦げていた。

食べ終わるとゲームセンターに行きたいと手を引っ張られた。

「何か休日の家族みたいな気分だな」

「私がお母さんで美耶がお父さんで芳樹が子供ね」

「俺子供かよ！」

「精神年齢がね」

しくしくと泣くフリをしてると美耶ちゃんに頭を撫でられた。更に涙が流れた。

ゲームセンターに着くと美耶ちゃんのはしゃぎ出した。俺らは着いて行くのに必死だ。

途中プリクラとか騒ぎ出して撮る羽目になった。

「芳樹、これ携帯に貼ってね。私も貼るから」

「やだ」

「美耶、携帯を取って」

「分かった！」

「ちょっと待て、美耶ちゃん！うわあ！！」

そして夜。そのまま穂奈美に赤尾宅に連行された。座っててと言われたのでさつき買ってきた雑誌を読んでいる。

お、今度好きなギター会社のNumbersから新作が出る…やっぱり高いなあ、10万は超えてる…はあ…

「何、辛気臭い顔をしてるのよ」

「ああ、いや何でもない」

「そう？お母さんがご飯どの位食べるのだったって」

「ああ、普通に茶碗に入れてくれれば良いよ」

「ん」

ふと携帯を見る。裏には三人で撮ったプリクラが貼られてる。みんな笑顔だ。

外す気は貼られる前から無いのだ。

「はい、お待たせ…何笑ってるの？」

「いえ、何でも…ありがとうございます」

お盆の上には盛られたご飯。それと冷や奴。暑いからありがたい。いただきますと食べる。この際だから言う俺は三角食べと言うのができない。口の中で色々な味がするのが許せなかったりする。昔、父親が納豆ご飯を食べながらひじきと野菜炒めを食べていたのがトラウマだったりする。

まあ、そんなかなでごちそうさまと言うと片付けを手伝う。これは俺が手伝いたいから！と何回も談判したからなのだが…佐知子さん曰く

「女の子の修行！」

だそうだ。洗い終わるとまだ早いからと言い穂奈美と美耶ちゃんに拉致られた。

「そついやさ、何回も俺ここにお邪魔してるのに美耶ちゃん見なかつたな」

「それはですね、お義兄さん」

「とりあえず敬語とお義兄さんはやめてくれ」

えーと唇を尖らせて言うつと

「…これでいい？芳樹兄？」

「…兄ではないけどさ…まあ良いや。で、何でいなかったんだ？」

「私が説明しよう」

「穂奈美（お姉ちゃん）は黙ってて」

「…ん」

心なしか泣きそつな泣きそつになる穂奈美を撫でる。すると目を細めた。

「…馬に蹴られたたく無いんでこのまま説明するね…ソフトボールの合宿だったの。後は…部活が遅くて帰りが遅かったりしたからだろうね」

「へえ…まあ分かったな」

「うん、それなら良いけど…お姉ちゃん寝てるよ？」

「え」

横を見るとぐっすりとした穂奈美の寝顔。

「何で、芳樹兄に心を許してるんだろっね」

ニヤニヤと悪い笑みを浮かべる美耶ちゃん。俺らは恋人じゃないと否定するのに2時間かかり危ないからと佐知子さんに言われて泊まる事になった。

勿論、1人で寝た。美耶ちゃんがお姉ちゃんと寝ればと聞かれたがそんな度胸も無い。

ただ、起きる時に穂奈美に起こされて絶叫してしまったのは赤尾家と俺だけの秘密だ。

新たな音符

お盆を明けて数日。今日は8月3回目のスタジオ練習だ。

11:30から2:00まで入れている。なので夏休みの醍醐味を無視した早起きをした。だけれども7時。これって早起きなのかな。早く起きたのは少しだけ腹に入れてから出かける気だったからなのだが幾らなんでも早すぎた。なので今日練習する曲を弾いていた。まあ、今弾けてもドラム入ったりベース入ったりすれば変わるんだけどな…

とは言えやらないわけにはいかないので通して練習。

大体4回はやったただろうか。4回目のソロの前にインターホンが家の中を響かせた。

(弾かせてくれよ…)

若干イラつきを覚えながらも玄関に向かう。

一応用心してドアを開けるとよく見慣れたロゴマークを付けた宅配便の会社の人。

「こんにちはわ!坂上芳樹さんですね?」

「はい、そうですか…」

「こちらに判をお願いします」

「…?はい」

何か懸賞でも当たったのだろうか?しかし…

プルプル…

宅配便の兄ちゃんを持っている箱が重いのかプルプルしてる。大きい

さは俺の肩ぐらいまでの大きさのモノ。長さはあるけど暑さはそこまででない。親指と人差し指を広げたぐらいの大きさだろうか？

「あ、ありがとうございます！荷物は何処に置けばいいでしょうか？」

やはり重いらしい。汗をかき始めている。ここに置いていいと伝えるとホツとした顔になった。

失礼しますと言うと次の届け先に向かうべくトラックに乗った。

俺はそれを見ながらドアを閉めると中身が気になるのでリビングに持って行く事にした。

「…重っ！」

思わず叫んでしまった。落とすところだったが床が傷つくので踏ん張る。

自室に持って行くのかと考えたけどやめた。途中で落としそうだからリビングのテーブルに置いてダンボールを開封する。

すると白い紙に包まれた何かと一枚の手紙が同封されていた。何の疑いも無く開けると紙が折りたたまれている。更に開けてみると一言

『うちの息子が世話になった』

……………え？

何これ。もしかして俺ヤクザさんの息子に手を出した？もしかしてここに入ってる白い紙に包まれてるのってチャカ？マッポ？いや、結局は同じモノだよ。

まあ、息子って聞いてもうピンと来てるけどね。

「…送らなくて良いつて言ったのに…」

ブツブツ言いながらも包装紙を開ける。すると数日前に見たモノが出てきた。

(これ、Numbersの最新モデルじゃん！)

ワインレッドのストラトキャスター。ネックが細かったりしてとても欲しかったのだが：

一体どうやって俺の欲しいモノが分かったのだろうか？監視カメラでもついているんじゃないかと思っ少しゾツとする。本当にそうだったら勘弁願いたい。

とは言え、折角なので使う事にする。まだ練習までに時間はあるからチューニングをする事にした。

スタジオで弾くのが楽しみになって来た。
呑気に鼻歌を交えながら。

チューニングして昼食を食べてスタジオに行く。歩くのが一番かと思っただけで忘れては行けない、まだ8月下旬。残暑だ。

なので自転車を漕いで行く事にした。カゴでエフェクターの箱がガタガタ言ってる。

スタジオに着くとまず汗が吹き出てきた。とりあえずどこに溜まった汗を流すべく髪をオールバックにして汗を拭く。

中には龍がすでにいた。涼しい顔で音楽を聞いているのを見ると何かムカつく。

「よ、龍。涼しい顔しやがって」

「最後のは褒め言葉？貶してる？」

「両方さ」

「意味分からねえ！」

よっころしよと座る。時間を確認しようとして携帯を取り出そうとするがどこにもない。

「あ、携帯机の上だ」

思わず声に出して龍に変な目で見られたけど流す。帰ったら確認しよう。

「よー、久しー」

「おっと、龍来てたか」

翔一と真汰が来た。2人とも暑そうだ。翔一を見ると真っ黒に日焼けしている…何だろうか？

「俺さ、一昨日まで海外に居たんだよね。東南アジア付近」

聞く前に勝手に説明してくれた！偉いぞ、翔一。しかし、東南アジアか…

「銀央さんに連れられて行ったのか？」

「うん。緋奈に拉致られた。朝起きたら車の中に居て逃げようとしたら……」

すると真っ青になって震え出す翔一。慌てて駆け寄る俺と龍。そして傍で笑いを抑えてる真汰。

「くくっ…翔一…くくっ…」

「それとどうして俺の家の住所が分かったんだ？」

「ああ、それ簡単に分かるから」

「簡単に分かるって?! え?!」

「うるさいなあ。ほら、練習始めるよー!」

「って、おい!」

何度も何度も聞こうと思ったが結局聞けなかった。ギターに熱中したから…単純すぎて笑えた。

練習後、とりあえず家に帰る事にした。家に入り自室に入りギターを片付けると携帯を開く。

するとメール10件と着信3件：一件だけは翔一だけどそれ以外は穂奈美だ…こええ

まずは翔一のから見る。

「ってええ?!」

『俺たちライブを文化祭にやるから!』と簡潔に書かれていた。マジか…詳しい事を聞きたかったがまた今度でいいだろう。

問題は穂奈美のメールだ。内容としては今日は誰もいないから芳樹の家に行くという事だ。それだけなら10件もメールしなくても…面倒だから最新のメールを見ると…

(うつわ!)

一言『今すぐあなたを追い詰める』とお達し。すると家のインターホンが鳴り響く。ぐ、偶然だよな?

「は、はい？」

ドアを開けると般若…もとい穂奈美が立ってた。

「うわぁ！」

慌ててドアを閉め…られなかった。その前にドアが引っ張られ穂奈美が入ってきた。

「芳樹ー？」

「ちよつと待て！何でそんなにキレてる？！」

「…メール返してくれなかったから」

俺が理由を追求すると下を向いてこんな事言いやがった。

「あ、いや…ごめん」

こうなると謝罪せざる得ない。穂奈美に伝えた。

「うん…でも実際はギター届いたかなあ…だったんだけどね。何となく脅し入れてみたわ」

「どういう事だ？」

「七緒のお父さんが芳樹くんは何が欲しがってるって聞かれたからギターって答えたら送るって言われてね…分かった？」

「簡略化してるけど半分くらいなら…」

穂奈美も関わってたのか…道理で俺が欲しいモノが…ん？

「どうして俺の欲しいモノがわかったんだ？」

「さぁ掃除するわ。どこが汚ない？」

「話を変えるな！答える！」

何度も追い詰めるが華麗にスルーされる。

夕飯の時に聞いたがピーラーが飛んできたからもう聞かなかった。

好奇心より自分の保身だ。

新たな音符（後書き）

Numbers・Federみたいなものです。隠し文字意味
ない（笑）

秋の旋律

夏休みを終えて9月まだまだ暑いなあ…そしてもうすぐ文化祭の季節だ。

終業式が終わった今は文化祭の出し物を決めている。黒板にはでかでか『文化祭!』と書かれている。これは文化祭実行委員の東雲さんと風鳥…風見だっけ? まあ良いや。とりあえず決めている最中だ。

「ほらほらちんたらしないで意見を出しなさい!」

教卓の上からこの声は前述の東雲さんだ。中々男気の溢れるかたで…脅しに近い感じで迫ってくる。まあ柔道部だから仕方ないんだけどね。でも余りやりすぎると怖くなるよ? ほら隣の…

「し、東雲? とりあえず話し合いを…」

「ああん? どうせ男なんか『メイド喫茶』とか鼻を膨らませて言ったり女子は『執事喫茶』とか言うんだろ? 所詮今の高校生なんかそんなもんでしょ!?!」

「うわあ!」

だから怒気を孕ませるなって…風鳥も怯えてるから…

「なーんか、不満でもあるのかい? 坂上?」

「あまり怒気を…」

「ああん?」

「何でもありません…」

俺も勝てそうにない。だってむつちや殺意を振りまいてるんだもの。ほら、教卓の目の前の女の子なんてガタガタ震えてるじゃん…

「で、出たのはこれか…」

5分ほど経ち脅されるように出されたのは

- ・カフェ（ジャンルは後で）
- ・カジノ
- ・お化け屋敷
- ・ラブメイカー（相性診断）
- ・マッスルミュージアム
- ・劇

となった。百歩譲って真琴さんが提案したラブメイカーは良いとしようか。身内鼻屑を除いて。

何だマッスルミュージアムって。提案したやつ出て来い。まあ提案したやつはじゃ

「おうおう出てるなあ…私はマッスルミュージアムがいいぞ？」

「」「何処が!?!」「」

男子（俺、翔一、幸平）のツッコミ。声まで八モったのは奇跡の産物だ。

「とは言えなあ…どうやって決める？少数決でもするか？」

「それだとほぼ100%マッスルミュージアムになりますよ…」

呆れてる風鳥。遂に恐怖に打ち勝ったらしい。

「しゃーない。多数決にするぞ！」

結局多数決になりました。顔を伏せられて手を挙げさせる。顔を上げて黒板の文字を見るとどこにもそれとなく票が入ったらしい。ただ…マツスルミュージアムには…一応2票入った。

「私はマツスルミュージアム！」

1人は東雲さん。思ったんだけどこの人は隠れたアレな趣味な方では無かるうか。そんな疑問が溢れてきた。だってあんなに嬉しそうに…で、もう一名は…

「……」

クラスでも目立ってない娘であった。あまり喋らないで休み時間は本を読んでいる様な女の子だ。

ずっと真っ直ぐに伸ばされた手を見た俺らはびっくりして隣の教室から若い男の教師が来るハプニングが起きた。

風鳥が簡単に説明すると先生はあまり騒がないようにと軽く注意して戻って行った。

つか、提案者の奴が手を挙げなかった…

「…で、お化け屋敷か…お前らそれでいいかー？」

それぞれ肯定の意思を示す。すると東雲は凄く満足した顔になった。

「よし、お化け屋敷のコンセプトだけど…『死んだ男の幽霊共』で良いよな！」

「絶対にあんたそういう趣味あるだろ！」

思わず叫んでしまった。どこまでこのネタを引きずる気なのだ。

「え、皆知らなかった？男の絡み好きだよ？」

「…私も…」

東雲さん以下。クラスの男子は若干所か相当引いた。一気にイメー
ジが崩れた瞬間だ。

その後、すぐに話は元に戻されてコンセプトの話になった。和洋中
と挙げられたが中華は一体どう表現するんだ？キョンシーの大群の
お化け屋敷とか嫌だぞ？

「じゃあ、日本屋敷風のお化け屋敷なー！」

これは真面目に決まった。日本屋敷となるから純日本にしようと言
われて床は畳みたいなのを敷く。更に障子と行灯を作って雰囲気を出
し…という感じだ。

黒板には日本特有のお化けが沢山書かれているがこれは翔一が書い
た。曰く、『昔に読んでた本が妖怪全集みたいなの本だったから』
だそう。気になるから今度読んでみようかな。

「おーっし、来月初めにあるから皆心して作るぞー！」

テンションの高い東雲さんの号令と共に文化祭のクラスの出し物決
めが終えた。

放課後に軽音楽部で文化祭の事でミーティングがあると連絡が来た。
しかし、集まるにはまだ早いから教室でポーツとして時間を潰す事
にした。

「あら、芳樹」

入って来たのは穂奈美だ。相変わらず色んな所に居るな…てか、今日のは学校だから会うのは普通なのか？

「…何かしらその会うとは思わなかったな目は？」

「よく俺の心が分かるなあ…そういや、よく会うなあって」

「そりゃそうでしょう。私あなたの事常に監視してるから」

「ああ…それなら…って今のは冗談だよな？」

「さあ、どうかしら？」

ウフフと意味ありげな笑い。帰ったら隠しカメラが無いか掃除しないと…別に見られても悪い様な生活は送ってないけどさ。

「そんな事を言いに来たのでは無いわ。今日の夕飯は食べにくるのね？」

「ああ。今日も宜しくな？」

「任せなさい」

と無表情でグッドマークを作った。夕食を食べに行くと言うのは夏休みで終わらせる予定だったが、まだ続ける事した。

美味しいしお金は節約できるし…それ以外にも俺自身に色々な心変わりが有ったからな。

なるべく穂奈美と居たいし、多分穂奈美も同じ心境だろう。

「じゃあね。また夜に…」

「ああ、楽しみにしてるよ？」

去ってから気づいたがこれヤバくない？

「ねえねえ、坂上くん！夜に会ってどう言う事なの？！密会？夜這い？」

「ち、違うー！」

ほれ見る。こうなつて俺に被害が……精神的な何か……来てるから……

「てか、坂上くんって赤尾さんと付き合ってるの？」

「いや、付き合つては無いけど……」

好き合っている……とは言わなかった。無駄な情報は与えなくてもいい。

また廊下を見ると少し歓喜に溢れた顔をしてる女の子がいた。

少し不思議に思ったけどまたポーツとする事にした。

時間になり翔一と共にミーティングに来た。

周りを見ると先輩バンドが沢山いて新入生バンドは俺らしか居ないので決まりが悪いと言うか居心地が非常に悪い。

「順番はクジ引きなー！」

と破天荒部長に言われた。枠は全10組。俺としては最初か真ん中付近がいいと思う。

「俺はくじ運強いぜー！！！」

と龍が俺がくじを引くと言った。ドンドンくじの紙がなくなってい

る。俺たちが引く時はもう最後の一個だった。

「…最後かあ」

少し嫌な予感がしながらも龍は閉じられた紙を開く。すると見事に固まった。その行動が気になり中身を見た。

「…なあ翔一。これってさあ…」

「ああ、うん」

中には10番と言う文字。今回は10組までだから…

「…大鳥だよな…?」

「…うわあ!」「」

「…やべー」

慌てる俺と翔一と龍。冷や汗を流す真汰。どうするんだよ、これ?

「部長、俺たちが大鳥で良いんですか?!」

「もう引いちゃったモノは仕方ないよ!」

と無情にも切り捨てられた。普通、これって1番上手いバンドが1番最後じゃないのか?

1番最後に出場とかだと緊張して弾けなくなりそうだ。

「…どうしよう」

「な?」

高校生活一年目から漣いです。

秋の旋律（後書き）

何か色々とおかしい気が…

2人の乱調 - - - 1

10月に入る直前の日曜日。そして、文化祭の1週間前になったあの日。

俺は文化祭の買い出しに近場のショッピングモールに出かけている。障子の紙とその他色々買って来いと我らが愛すべき東雲さんに言われた。いや、むしろ命令された。

もちろん、拒否権は無かった。

最初は拒否した。しかし、

「舐めた口を吐いてると犯させるぞ？とりあえず掲示板に顔写真を載せて…」

…もう思い出したくない。

マジで写真を取り有無を言わず1分ほど載せられた。涙で謝るとつまらなさそうな顔をして消してくれた。あ、おもいだしてしまっただ…

とりあえず、これ以上被害が被る前に早く買いに行こうと思って今日ここに来た。

そして昨晚、穂奈美も買い出しを頼まれたらしく前日にメールが来て明日ショッピングモールに行くのかと聞かれたから行くと答えた。なので穂奈美と出かける事になった。これってデートに入るのか？ただの買い物だから違う気がするが…

まあ、それは良いとしてこの買い物は最終的に荷物持ちになりそうだ。

10時過ぎにショッピングモールの入り口に待っていると
言われたので待つ。

「待たせたわね」

その声ができるのを聞いて穂奈美をみる。白のワンピースに白の帽子
…これ、どこのお嬢様だ？いや、穂奈美だけどき。

…一丁からかいますか。

「お嬢様、走ると転ばれてしまいます…」

「…何言ってるの？」

「…ごめん。本当のお嬢様に見えたから…」

「…！いいから行くわよ！」

手をグイッと引つ張り店の中に入る。ズンズンと進んで行く。

「お、おい！どこに行くつもりだ?!」

「…ごめん」

我に返った穂奈美は謝ってから一瞬止まり慌てて手を離れた。
…そっぴや手、繋いだんだよな。臆面に出さずに中で微笑む。柔ら
かい…いや、そっぴやない！

「俺さ、障子の紙を探しに来たんだ」

「…何に使うのかしら？」

「いや、お化け屋敷に」

「なるほどね。大方日本屋敷風のお化け屋敷かしら？」

「当たり前。でだ、障子の紙なんてどこに売ってるんだ？」

「家具屋とかホームセンターかしら？」

「なら、少し歩くな…」

「私なら構わないわよ？」
「ん、分かった」

ショッピングモール内にあるホームセンターに向かう。手は握っていない。はぐれそうにもないから平気だろう。

5分歩くとショッピングモールにあるホームセンターに着いた。

ここは家具から動物まで揃う場所だ。沢山陳列されているから本当に大きいわけで…

「障子の紙どこだ？」

「…一つ一つ探しましょ？」

どこにあるかが分からなくなってしまった。

とは言え探せなくは無いので手当たりで手分けして探す事にした。

「じゃあ、見つかったらメールするわ」

「おう、それじゃ」

俺は右側、穂奈美は左側を探す事にした。まずは…どこだろう？マツトとかの近くにあるのか？

とりあえずマツト売り場に行く。

(つと、御座があるな)

クルクル丸まって御座が置いてある。一応、御座も頼まれていた。

ただ、頼まれたただだから何枚必要か分からない。携帯を取り出して一昨日聞いた東雲さんのアドレスを開き電話する。メールするより早い。

『…坂上か？』

「ああ、御座があつたんだが…」

『とりあえず二枚買って来て考えるわ…これから二度寝するから電話しないで…ああ、ズボン脱げて…』

ぶつつと何かを言う前に消された。とりあえず、東雲さん。あんたまだ夢見る乙女って年代って事自覚した方がいいぞ？

ウチのクラスのあんたに好意がある奴に嘆かれるぞ…

と心中に仕舞い込み脇に挟む。二枚だよな。

「…坂上くん？」

声のした方向を振り返ると見知らぬ女の子が。三つ編み…今時居るんだな。凄い真面目そうな女の子だ。身長は俺の胸ぐらいだろうか小さいとは言えず大きいとは言えない。穂奈美が俺の肩ぐらいはあるからな…

「どちら様で？」

悪いが分からない。軽音楽部の人間では無いし、ましてやクラスに居なかった。

「あの…丸谷朋美です」

どうぞ宜しく…と赤い顔をして頭を下げた。見た目通りの子っばい。

「こんな所にいるなんて…買い出しか？」

「あ、いえ。家の買い物です」

「そっか…つか、敬語やめない？」

「あ、そうです…そうだね」

ニコツと上を向いて微笑んでくれた。あ、可愛い。穂奈美の笑顔はグツと…って何で穂奈美が浮かぶ。

「そういう坂上くんは何なの？」

「俺か？文化祭実行委員の使いばしり」

「ああ、東雲さん？」

「お、知ってるの？」

「知ってますよ…坂上くん何か探してるなら歩きながら話しません？」

「そうだな、そうしよう」

障子の紙を買うんだと伝えると向こうに有ったよと言われたから行く事にする。

「奇遇だわ…地元とは言え学校の人がいるなんて」

「こちら辺に住んでいるのか？」

「うん、ほらB中あるじゃん？あそこ周辺なんだ」

「へえ、近いな。俺はA中だぞ？」

和気藹々と身近な会話をして行く。新しく知り合った人なら一番盛り上がる会話だ。

「え、えとさ。坂上くんって好きな人いるの？」

「いきなりどうした？」

横を見るとモジモジとしている丸谷さん…うっわ！やべえ！

「で、ど、どうなの？」

「あー…一応いるけど…」

さつきまで一緒に居た奴を思い出す。クールだけれど内面可愛らしいあいつを。

「私ね、坂上くんの事を初めて見た時から気になってたんだ…」
「は?!」

突然の告白にビックリする。そういう意味じゃないよな…?」

「でね、この間坂上くんの教室に行ったらね…」

そういえばこの前…部活のミーティングの前に教室の外に女の子がいたのを思い出す。あの時の女の子だったのか…

「坂上くんって赤尾さんと付き合っていないよね?」
「よく聞かれるがそれは否定するぞ?」

好き合っているが…と付け足したかったけど変な波紋を呼ぶ可能性があるがあるのでグツと堪える。ただ、この時は言っておけば良かったと後悔する。

「な、なら私が好きになってもいいんだよね?」
「はあ?!」

な、何だよこれ！ドッキリか？
するときゅつと腕に抱きついてきた。って、この子イメージと相当
違う…！

「ちよつ…公衆だから！」

耳で囁く様に叫ぶ。凄いよな、耳下で囁く様に叫ぶなんて。幸い周
りには誰もいない。

「大丈夫だよ、誰もカップルだと思われてるから」

ふふつと笑う。公衆というか主に穂奈美に見つかったらヤバイ。っ
て携帯が唸ってる。多分、穂奈美だな。無かったからこそつちに来る
か先に見つけたからそつちに向かうの意思を伝えたいのだろう。

携帯は左のポケットだが取り出したい左手はがちりホールド、い
や抱かれている。

じゃあ、右手だ…

「…どうしたの、坂上くん？」

見上げてくる丸谷さん。ダメだ、取り出せそうにない。

「…いや、何でもない」

携帯を取り出すのをやめた。

どうこう考えてるうちに障子の紙が目の前にあった。

これを買って終了か…

「ありがとうな、有ったよ」

「そう？役に立てて良かったわ」

すると今流行りのアイドルグループの曲が流れ出した。丸谷さんの携帯だ。携帯を開いてお母さんだと言ったり

「ごめんね、坂上くん…はい…はい…え…分かった」

パタンと閉じると携帯を閉じるとスツと左腕から離れる。左腕が涼しくなった。

「ごめんね、坂上くん。お母さんが帰って来いって言ってるから…」
「ああ、別に良いよ」

少し安心している。目の前の丸谷さんに心がぐらつき始めているのだ。穂奈美に…申し訳ない。

「じゃあ、またね！」

そう言って去って行った。

心配させないためにも笑顔で接しよう…

「芳樹ー！」

俺は笑顔で振り返った。

2人の乱調・・・2（前書き）

完全なる赤尾穂奈美視点です。

2人の乱調 - - - 2

文化祭でチョコロスを作る事になった。それで文化祭の買い出しを私に頼まれた。最初は緋奈とかクラスの子を誘ってみたんだけど…みんな行けないみたい。

でも、1人でショッピングモールに出かけるのが寂しいので芳樹を誘ってみた。

メールを送って待ってる間、もう行けると考えていて何を着て行くか考えながら待ってた。

少してメールが来たので開いて見ると『了解。10時に入り口で待ってる』といかにも簡潔で要点を踏まえた文章。

「…やった」

思わず笑ってしまった。明日のデートが…

(って、デートじゃないわよ！あいつと付き合ってるわけじゃないし！…でもお前以外興味無いつて言われたし…どっちなのかしら)

明日の買い物はデートなのか違うのかで悶々と考え混んでしまった。

「…もう朝だわ」

あれから恥ずかしくなったりシチュエーションを想像してしまったりしてたりしてたら…何時の間にか眠っていた。でも最後に時計を確認したのは2時前。でも、暫く悶えてたから…3時ぐらいには寝

れたのかしら？で、今は7時。
多分スッキリする様な程眠れてないはず…

(そうだ…顔洗わなきゃ…)

まだ半覚醒の体を引きずって洗面台に立つ。鏡の中の自分を見ると芳樹には見せられない様な顔と髪が跳ねてる自分が立っていた。

(これ、治さなきゃ…)

顔をさつと洗い髪の毛をくしで軽く梳かす。後でしっかりと直そうと思った。

リビングに入るとお母さんが朝食を作っていた。

「おはよう、お母さん」

「あら、おはよう。今日は早いわね？」

満面の笑顔で振り向くお母さん。いつも通りの笑顔だ。

「うん、ちょっと出かけるからね」

「あら…芳樹くんとかしら？」

「っえ?!」

思わず大声を出してしまう。お母さんにバレるとは思ってなかったのだ…

「だって、穂奈美ちゃんの顔って芳樹くん関係だと顔が緩んでるわよ?」

「嘘っ?!」

思わず顔をペタペタ触ってみる。頬骨あたりだろうか、いつもより上がってる気がする。

「ふふっ…女の子ねえ」

「誰が女の子なんだ？」

リビングに入って来たのはお父さん。眠そうな顔をして頭をかいている。お父さんはメガネをかけていて髪は短髪でオールバック。年相応の渋さを持っている人だ。でもって冷静。

「あら、あなたおはよう」

「うん、おはよ」

お互いの顔を見合い挨拶をする。ラブラブ…って訳じゃないけど仲がいいんだと思うな。

そしてお父さんが席に着く。少し眠そうだ。

「穂奈美、今日は早いな。何かあるの？」

「うん、ちよつとね…」

口先を濁し妹を起こしてくると言って席を立つ。妹は私の隣の部屋だ。階段を上りドアの前に立つ。

「美弥ー？起きてるー？」

ノックをしながら呼びかける。前にノックをしないで夜に普通に入ったらその…絶賛活動中だったからそれからはノックをして入る様になっている。

この事は私たちの間では禁句になってたりする。少し待ってみるが物音がしない。

「美弥？入るよ？」

一応声をかけてドアノブを捻る。カチャ…と言う音を立ててドアを開くと美弥はベッドに寝ておらず机で突っ伏して寝ていた。右手にはシャーペン。枕は参考書…な所だ。

(勉強してたら寝ちゃったのね…)

忘れちゃいけない。美弥は中3…まだ半年はあるとは言え受験生だ。美弥は狭丘学園…まあ私の通ってる高校に行きたいらしい。曰く

『制服が可愛いから！』

らしい。まあ…可愛いんだけどね。私はそう言うのを気にしないで入った人だから。

まあそれは置いて眠っている美弥に伝言を残そうとしてシャーペンを手を取った。そしてノートの上の余白に『ご飯できてるから下に行つてね。お姉ちゃんはお出かけます』と書いた。これでいいかな。

リビングに戻りお母さんにまだ寝てると伝えた。

「日曜日だし、寝かせておいて良いわよ」

とお母さんは言った。そして席に着き、朝ごはんを食べる。

「そつえば、穂奈美ちゃん？今日は誰と出かけるのー？」

お母さんは隣に座りながら訪ねてきた。芳樹…と言いたいけど友達

と答えようとした。したんだけど…

「穂奈美ちゃんがそんなに嬉しそうな顔をしてるから…芳樹くんね？」

「ーなっ！」

言う前からバレてる！私はまだ何も言っていないわよ…

「お母さん…それはどう言う事だ？」

何と突っ込んで来たのはお父さん。コップに入ってるコーヒーを飲もうと手を伸ばしてる最中で止まっている。

適当に言い誤魔化そうとしたのだから見事にお母さんは全部ぶちまけてくれた。

「…好きなのか？」

「そうね…好きよ」

唐突にこんな事も聞いてきた。だから…照れ隠しにぶっきらぼうに答えてしまう。家族に露呈されるなんて…

「そうか…一回見てみたいな」

そう言って笑った…けど口元が引くつくだけの可笑しな笑い方になっている。

「…お父さん、顔が笑えてないわ」

一応指摘する事にした。

朝食を食べ終えて部屋に戻る。隣の部屋の気配を伺うが寝息しか聞

こえない。

(まだ起きてこなさそうね…)

机に座り鏡を見ながら髪にアイロンを当てる。真っ直ぐにしたところで時計を見る。

時刻は8時30分を回っていた。ここからだど9時に出れば10時前には着く。軽く化粧水を顔に当てて服を選ぶ。暑いからラフな格好かしら…と思いこの間買ってきた白いワンピースを着る事にする。部屋着を脱いでワンピースを着ようとする。ふと下着をみると黒。

(これじゃ透けるんじゃないかしら…芳樹なら見られても…)

そう考えると自然と顔が赤くなる。

(芳樹に見られるのは良いとしてそれ以外の人に見られるのは勘弁だわ…)

と思い下着を上下脱ぎ捨てて白いのを取り出す。

(これなら大丈夫…かしら?)

急々と来て身だしなみチェック…頭が少し淋しいわ…帽子かしら?と数個あるのから白い麦わら帽子を取り出し被る。

(うん、これなら大丈夫かな。)

時刻を見ると9時前を刺している。

(そろそろ行こうかしら)

とお気に入りのバッグを持つ。財布、ハンカチ…うん、大丈夫。買うもののメモもオッケー。

「お母さん、私そろそろ行くわ」

リビングに出てお父さんと話してるお母さんに告げる。

「あら、いつてらっしやい。デート楽しんで来てね」

「…デートじゃないんだけど…」

楽しそうに微笑むお母さんと無表情を貫くお父さんの視線を背中に感じながら私は家を後にした。

(…暑いわ。まだ夏というか、今年は異常なのかしら?)

もうすぐでシヨップिंगモールをバスで降りた所でふとそう思う。すると全身が汗ばみ始めた気がする。

(頭とかは拭えるんだけど…谷間とかは無理ね…でも蒸れるわ…)

少し思案しながらもシヨップिंगモールの入り口を目指す。バスの降り口とシヨップिंगモールの入口は少しズレてるのだ。

1分少々歩くと今日のデート…いや、一緒に買い物する人を見つけた。芳樹は…ジーパンに黒いTシャツ。あ、あの人はデートって思

ってないのかしら？男と女が一緒に出かける時点でデートよ？

「待たせたわね」

と私は走り寄りながら声をかける。すると芳樹は目を少し大きくして私を見回す。…な、なにかしら？

「お嬢様、走ると転ばれてしまいます…」

「…何言ってるの？」

「…ごめん。本当のお嬢様に見えたから…」

自分の中で急激に沸騰するのが分かる。流石に恥ずかしい。

「…！いいから行くわよ！」

むんずと芳樹の手を取って中に入る。もう照れ隠しに必死だ。

「お、おい！どこに行くつもりだ?!」

「…ごめん」

ふと見ると私は芳樹と手を繋いでるのが分かった。慌てて手を離すと芳樹が照れ笑いをしてた。ならもう少し手を握ってた方が良かったわ…少し後悔。

「俺さ、障子の紙を探しに来たんだ」

「…何に使うのかしら？」

「いや、お化け屋敷に」

「なるほどね。大方日本屋敷風のお化け屋敷かしら？」

「当たり前。でだ、障子の紙なんてどこに売ってるんだ？」

「家具屋とかホームセンターかしら？」

「なら、少し歩くな…」

「私なら構わないわよ？」

「ん、分かった」

手をさりげなく掴もうかと思ったけどやめた。

(好きだからって調子に乗らないでよね…たまには芳樹から動きなさい)

ホームセンターに着くと私はまずその広さに驚いた。これ一緒に探してたなら一日終わるんじゃない？

「障子の紙どこだ？」

「…一つ一つ探しましょ？」

どこにあるかが分からない。なので手当たりで手分けして探す事にした。

「じゃあ、見つかったらメールするわ」

「おう、それじゃ」

そう言っただけで私は左側から探す。大体こういう所は置いてある場所は限られてる。それらしい所を潰して行く。けれどもありそうにない。私は携帯を開くと『無いからそっちに向かう』と送る。返信を待つ間私はもう一度回ってみたけどやはりない。そろそろ返信があるかなと思えば携帯を確認すると何も返事が無い。

(芳樹の所に向かってあげようかしら？)

後ろから誰だとやってやろうかなと考えてニヤニヤしてしまう。

芳樹を探し求め…いや探していると居た。何処かの女の子と腕を組みながら。

(…え)

正直、ショックだった。私は芳樹が好きで芳樹も私の事は好きと言ってくれたから後は告白するかされる勇氣だけ…だと思ってた。よもや他の子が横から来るなんて思ってなかった。

打ちひしがれていると女の子は去って行った。

これを見て落ち込んでると思われたくないと思った。

「芳樹ー！」

大声で呼びかけると芳樹は笑顔で振り向いてくれた。

私に向けてくれた笑顔の暖かさと私の心の中にある寂しさと言っか悲しさで胸が痛くなった。

2人の乱調・・・2（後書き）

実はこれ投稿したの12月11日…現実逃避で書きました。

2人の乱調・・・3（前書き）

最初は芳樹目線、途中から穂奈美目線です。

2人の乱調・・・3

俺が笑顔を見せると穂奈美は一瞬だけ顔を歪めたけどすぐに笑顔を取り戻した。

「あら、もう見つけたのね。さあ見つけたなら行きましょ？」

と俺の腕を取る。

「え、ちょ……」

どこか強引でかつ悲しそうな表情を浮かべながら俺は会計に連れていかれた。

お金を払い次は穂奈美の買いに行こうと思い、穂奈美の顔を覗く。

「…何かしら」

すると俺を睨みながら尋ねてきた。少々ムツとしたがそこは堪える。丸谷さんの負い目も有るしここは優しくしなきゃいけない…はずだ。

「いや、何を買った？」

「言ったでしょ?!」

「いや、まだ何も聞いてないぞ？」

ここに来てからもメールでも。メールは明日買い物したいから…だけだしここに来てからはそういうのを一切聞いてない。

「…お菓子の本よっ!」

何でそんなに怒っているんだ？と思わず聞きたくなるが堪える。するとどこか俺の中でもイライラが増してくるのが分かった。穂奈美のその口調を聞いてるとどこかイライラさせられる。

「分かったよ、本屋に行くんだろ」

「場所は分かるから」

とスタスタと歩いて行く穂奈美。俺は一瞬眉を潜めるが着いて行く。本屋に着くと穂奈美は何も言わずに料理本のコーナーに入って行った。慌てて追いかけてお菓子が載ってる本を探し始める。『簡単に見えるお菓子100選』だの『5分でできるお菓子作り』だの沢山ある。どれかいいか迷い適当なのを引き出し読む。

「ああもう…これに無いわっ」

開いた本に載ってなかったのだろう。苛立ちながら本を閉まっていた。そんな穂奈美を見て思わず本音をポロリと漏らしてしまう。本当無意識だった。

「どうしてそんなに苛ついてるんだ？」

ある意味運の付きだったのかもしれない。

「別に」

その言葉を言った途端俺の中で何か切れた。ぷつとこんな音も出せるんだなと超客観視をしていた。

「なあ、何だか知らないがイラつくのはやめてくれないか？」

俺も少し強気の口調で言ってしまう。すると穂奈美は本を仕舞いキツとこつちを睨んできた。

「一々口を突つ込まないでくれない？うるさいわ」

流石に俺もキレた。心の中はモナリザの背景の様に穏やかな風景が一気に荒れた風景にさせた。詰まるところ怒った。

「何だよ、人が心配してるのに！」

「別に気にかける何て一言も言ってるわ！」

「何でだよっ、てかどうしてそんなにイライラしてるんだよ！」

口は動けども頭は一切動かない。全て手当たり次第に発言してる。俺はもう何を言ってるか分かってない。

「別に？良かったわね、素敵な女の子に言い寄られて。私と変な関係を続けるより妥当じゃない？」

「んだとお？！」

俺は言い寄られていい気持ちにはなっていない！分からないのか？！

「さっさと行きなさいよ、あの元気な子の所へ！私みたいな暗い女よりいいでしょ？！」

「じゃあ、その暗い女を気にしてた俺は何なんだ？！お荷物だったのか！」

「そっしょー！」

その瞬間、俺の積み上げてきた想いが全て無に帰った瞬間だった。そして込上げてくる心の空虚感。どうして？どうして？が頭をよぎる。

「もういい！」

「早く私の前から消えて！」

と言われた瞬間、俺は穂奈美に背を向けて本屋を出た。苛立だしげに足早に歩いて行く。

（ああ、くそ…）

腹が立っているのに視界は異常にゆがんでいた。適当に拭き取ると走ってバス停に向かった。

（何でこうなったの…？）

芳樹の影が無くなった瞬間に私は冷静になった。感情任せに叫んだ言葉は芳樹との関係を破壊するだけでは無く私の心の中もグチャグチャにしてくれた。

（全部…あなたが…）

と思ったが違うことに思う。芳樹は悪くない。何も…
その時に悲しみの波が一気に押し寄せてきた。

「うわ…あぁ…」

公衆の面前で泣きたくはなかった。けれどもどうしても止められなかった。頭で自分の言った言葉が延々と流れて、それが私を傷つける。

(何で?! どうして?!)

気づくと私は真琴の家の前に来ていた。どう来たのかはさっぱり分からない。でも、真琴の家を見た途端話を聞いて欲しくなった。慰めて欲しくなった。意を決してインターホンを押す。ピンポン…と家の中で響き渡っているのがよく分かる。

ズドドド…という音がすると玄関が開いた。どうやら帰ってた様だ。

「はいはい…って穂奈美?」

「うん…こんにちわ」

どうぞ、入って。と言われて私は重い体を動かす。

穂奈美の部屋は二回来たことがある。一回は普通の土日。緋奈と一緒に行った。次は夏休みで水着の試着会と言って集まったのを思い出す。

「はい、座って」

私の落ち込み様を察したのか真面目な顔をしてクッションを出してくれた。

「うん、ありがとう…」

少し座るのを躊躇うが真琴は座れという目をしてるので座った。どうにも落ち着かない。

「で、どうしたの？芳樹とデートとかはしゃいでなかったっけ？」

「…うん、そうなんだけど…」

私は全部吐き出した。芳樹が他の女の子とヘラヘラしてた事、それが原因で私がイライラしてしまった事。そして、優しくしてくれた芳樹に冷たく当たった事…最後の方は涙声になってしまって声を出すのが辛かったがどうにか吐き出せた。

「ふう…そう、辛かったね…」

と手を伸ばされる。幾らか楽になった気がしたが…

「って、言われたいの？調子に乗らないでよね」

グイッと顔をあげられた。

「っ〜っ?!!」

目の前には怒った真琴の顔。目を見たくなくて視線を逸らした。

「こら、こっち向きな。私から目を逸らさないで」

断固とした口調で言ってきた。どうにか目を合わせる。

「穂奈美？ 芳樹も悪いかもしれないけど… 芳樹の話しっかり聞いた？ 穂奈美が一方的にキレなかった？」

「…そうだわ」

イライラし始めたのは自分。そして聞いてきた芳樹を突っぱねたのも… 自分。

「今回はね… 穂奈美が悪いわよ？ 分かってる？！」

「うん、分かってるわ…」

自分のした事が分かった途端に次は芳樹の事だ。もう… 戻ってきてくれないかもしれない。

「で、芳樹はどうするの？」

「も、もう無理…」

「諦めない！」

パチッと頬を叩かれる。痛くない程度の叩き方だろうし音もそんなに大きくない。

…なのに今の私にはとても痛く感じた。

「穂奈美は芳樹に今、何したい？」

「謝りたい…」

ただ謝りたい。理不尽にキレた私の事なんてもう何も思ってくれないかもしれない。でも… 謝りたい。許されなくても… 何て言いたくない。許してくれるまで謝りたい。

「よし、よく言ったわ。なら、謝る様にセツティングしましょ」

ときっきの怖さは無くなりいつもの真琴に戻った。途端に…また泣きたくなった。

「こらこら、泣かない！泣くのは芳樹と仲直りしてからにする！」
「わ、分かったわよ」

目を擦り涙を払う。

パンと頬を叩いて気合を入れる。頑張ろう、と体の前で握りこぶしを作った。

2人の乱調・・・3（後書き）

Xmas回とか新年回とかやりたいなあ・・・でもどう計算しても間に合わないんですよ、トホホ・・・

文化祭の調律

どうしてこんな事になったのだろう…と俺はずっと考えている。ギターを弾いて紛らわそうと思って手に取ったのだが予想以上にシヨツクが大きいのか何も手を付けられてない。音楽も流れてるだけで何も入ってこない。

(もう一度話したい…)

と切実に思いギターを片す。音楽も止める。とりあえず、夕飯だと思いい下に行く。

(考えてみれば俺、穂奈美に相当世話になってたな)

と苦笑する。この後、料理をする面倒さを思い出し叫ぶが…ここは割愛する。

時間は流れて文化祭前日。つまり1週間経った。毎日、穂奈美に会って話をしようとするのだが避けられたり逃げられたり…完全に嫌われたか…?等と考えてる。
しかし…

「芳樹、穂奈美が『ごめんまだ顔を合わせられない』だって。さっ

さと仲直りしなよ」

「う、た、助かる」

人を通じて会話はどうにかできるようになってる。一時期は完全に無視られてたからこれでも、まだ進歩したのだろう。

「…まあ、芳樹。ゆっくりと修復してこうな？」

と翔一が慰めてくれる。こいつは俺が穂奈美と喧嘩したと分かった途端殴ってきて

『今すぐ仲直りしろ！じゃないと俺らまで険悪になりかねねえぞ？』

と叫んだ。自分本位な考え方にも捉えられるが…実際は違う。俺達が崩れた事で翔一と銀央さん、幸平と真琴さんの間の関係、それと両者間の関係の悪化を恐れたのだろう。そこまで考えてるかさっぱりだけれども。

「はあ…とりあえず文化祭の準備だ。芳樹、ほら御座運んで」

「お、おう」

今日は文化祭前日という事で学生の本分である勉強は捨てて準備に当てられてる。勉強をする必要が無いから皆はテンションが上がってる。何回かウチの委員長にど突かれてる奴が居たが準備は順調だ。狭丘学園の文化祭は1日目と2日目で分かれている。

1日目は学校内公開、2日目は全体公開…となっている。

「おら、坂上！次はこの机を外のステージに運ぶから他にも何人が野郎ども呼んでこい！」

「とりあえず、東雲さん。あんたも手伝ってくれ」

それと足を組んで椅子に座るな。色々とマズイ。つか、普通に見えるてる。

「うつさい、私は人に見せてるんだからいいんだよ！つべこべ言わずに行け！」

乱暴だなあ…と思いつつも渋々手伝いに入る。
すると翔一と？美川が手伝ってくれた。

「とりあえず…坂上が可哀想だ…」

泣きそうになりながら手伝う？美川に一発デコピンを入れた。

机を運んでると嫌でも他のクラスの中が見えてしまう。同じ様にお化け屋敷を作るクラス、映画館を作るクラスと色々ある。

と言っても一年生の出し物しか見てないため上学年になるともっと凄いのがあるのだろう。

「俺、文化祭は子供騙しだと思ってたわ…」

「いや、所詮そんなものじゃないのか？」

机を全て外のステージに運んだ。一人当たり13個…もう腕はパンパンだな。

因みに机はステージ作りに当てられてしまう。ステージは後夜祭に

使われる。そこで俺たちはライブする…らしい。詳しい事を聞けば良かったな。

「おう、お疲れ…うん」

東雲さんは俺達が憔悴しきった姿を見て流石に仕事は押し付けてこなかった。

周りを見ると暗幕は貼られて外装はほぼ終わりかけている。内装は半分位だろうか？下の御座は引き終わっている。

「委員長、俺ジュース買ってくるから」

「んー、あいよー」

財布をポケットにあるのを確認して自販機に向かう。着いて何を買おうか迷ってる。

（炭酸か、スポーツドリンクか…）

迷い指をしてしまう。炭酸だと思いつきりがぶ飲みしてしまうからすぐになくなるけど爽やか、またスポーツドリンクだがぶ飲みはしないが少しずつ飲めるから長時間買う必要が無い。さて、どっちにしようか。

迷って迷って…スポーツドリンクにした。忙しくなるだろうしな。

「あっ…」

帰ろうとすると穂奈美が立っていた。顔には困惑の表情を浮かべてる。

（まあ、そりゃそっだろうな）

俺達は喧嘩している。少しは元に戻りつつあるが…穂奈美の怯え様が酷い。いつもなら目を合わそうにも逃げられる…けど、今は逃げなかった。

「ほ、ほら、これやるよ」

「ふえ？ああ、あ、ありがとう」

びっくりしながらもジュースを取ってくれた。

もう一度飲み物を買って直そうとするとスポーツドリンクは売り切れ
てた。

「…あ、あのさ」

振り返るとあちらを見たりこちらを見たりしている穂奈美。

「やっぱ、いいわ、じ、じゃあね」

真っ赤になりながら去って行く穂奈美。俺はそのまま見送ろうかと
思ったのだが引き止める。

「おい、穂奈美！」

追いついて肩に手をかける。ビクッと震えるが力付くので振り向かせ
る。

「あ…う…」

俺の目を見ずに横を見たり下を見たり。目の前20cmに穂奈美の
顔が有って流石に恥ずかしくなってきた。

「な、何よ…早く言いなさいよ」

ジロツと睨んでいるのだろうけど、頬が赤らんでいる時点でそこま
で迫力は無い。むしろ色気が…いや、待とう。

「あのさ…後夜祭のライブが終わったら教室にきてくれ」

それだけ言っただけ俺は抜け出した。もう恥ずかしい。

手持ち無沙汰になり携帯を開くと一通の到着メッセージ。

(何だ?)

操作をして画面を見ると『いつまで遊んでるんだ、ポケが』と簡潔
かつ殺伐としたメールを送ってきた東雲委員長。

「やっべ…」

冷や汗がたらりと垂れるのを他所に教室に向けて走り出した。

勿論、その後はこっぴどく絞られた。ガミガミ怒られたので耳が痛い。
お前は俺の母親かつつーの。

文化祭の調律（後書き）

改稿

整いつつある調律

周り（主に東雲委員長）と俺の落ち込みの落差が激しいまま始まる文化祭。今日は午後の3時から明日のライブのリハーサルがあるけど、それまでの時間は全てクラスのお化け屋敷に回される事になった。曰く、

「坂上は何回も（二回だけだ）サボってたから今日は労働基準法を無視したスケジュールで働いてもらう！何か文句ある？！」

有無も言わせない態度に思わず頭を縦に振ってしまったのが運の尽き。俺は学級費で購入した甚平とのつぺらマスクを被ってお化け屋敷の通路に立たされた。またまた曰く、

「それで脅かしてるよ！」

だそうな。だからさつきから来てる客に対して至る所で驚かしている。最初はあまり乗り気ではなかったのだが、人が怯える姿を見ると段々ともっと驚かしてやるうと言つ気持ちになる。それとは反対に穂奈美の事を考える気持ちが溢れている。明日の放課後に穂奈美は来てくれるのかと言つのが心に空洞があるようかの様に感じる。

「ねえ、もう休憩だよ」

ポンと幸平に肩を叩かれた。ご飯食べようと幸平と真琴さんに誘われたから食堂に行く。翔一と銀央さんは裏方作業組だったため当日の仕事は何も入ってない。

文化祭が始まると共に銀央さんは翔一を拉致って行った。食堂に入るとご飯を食べようとしてる学生で溢れていた。

「俺席とっってくる」

「芳樹は何がいいの？」

「あー…からあげ」

席を取ると周りの中で孤独を感じた。周りの人は誰かと関わり合っ
て1人では無いが、俺は1人になってると感じる。曖昧な感じだけ
れども孤独感を感じてる。

「…芳樹」

何時の間にか周りの音が聞こえなくなってた。目の前には幸平と真
琴さん。手元にはからあげ定食がある。

「大丈夫なの？」

「あ、ああ」

頭をガリガリかいて場を繕う。箸を割って食べる。何時もなら美味
しいと感じる食べ物も今は喉が通らず食べるのに苦労をする。

「芳樹くん、元気無いわね…」

心配そうな顔で聞いてくる真琴さん。あの事を知らないのだろうか？

「いやさ…仲直りできるかなって」

「…できるわよ」

うんうんと頷いて真琴さんは買ってきたヘルシー定食を食べる。食

堂の売り文句曰く『たつぷりのボリュームの割にはローカロリー』らしい。幸平は高カロリーだが無視したカツ丼。ハフハフ言いながら食べてる幸平を見ると和む。

「実はね、穂奈美と喧嘩した後かな？うちに来てね、凄く泣いたのよ！あの子にしては凄く珍しくない？」

「確かにな…」

いつも冷静に動いてる様な穂奈美。最近は何かとトラブルを起こして慌てる事が多かったけれども…あいつはこう…クールビューティーみたいな感じがとても似合う。

（俺の所為だよな…）

性格的に泣かないと思われれる穂奈美を泣かした。それだけで俺はとんでもない事をしたんじゃないのか？

とブツブツ考えてる最中、幸平はカツ丼の一切れを食べようとする。口にソースがついた。指摘しようと思った。けど…

「幸平、口にソース付いてるよ？」

「んー？どこ？」

「ここ」

真琴さんは肩を掴んで幸平の口をペロツと舐めた。そこには（真琴さんの顔）恥じらいが一切ない。こいつらここまで進展したんか？！

「うわぁー！！」

幸平はびっくり。周りでたまたま目に入った人は口をパクパクしている。しかもまだ舐めている。

「ちよつと…真琴！こは、んむっ?!」

ほらほら遂にやっちゃったよ。とりあえず衝撃的なのは真琴さんが異常に積極的な事。これにはビックリする。

「つて、おい！」

漸く目の前の事に気づいて慌てて止めにかかる。思いつきり抱きついてるため中々離す事ができなかったが力勝ちして引き離せる事ができた。

「何するの?!」

「…公衆の面前だから」

怒りに真っ赤になる真琴さんと羞恥心で真っ赤になる幸平。意味が違えども赤づくしの顔だ。

「幸平に一票、だ。そういう事は家でやってる」

「何だつてー?! あんたと穂奈美もいつもみんなの前でイチャイチャしてるんだろー?」

「してねえよ! つか、付き合っても無いからな?!」

「芳樹: あそこまで仲良くて付き合っていないとかおかしいよ?」

「幸平はどつちの味方?!」

「僕は僕の味方」

えっへんとドヤ顔をしながら手を腰に当てている。

「だ、ダメだわ。幸平の可愛さに私おかしくなりそう…」

「…空き教室なら沢山あるぞ?」

すると真琴さんは満面の顔でこっちを見てきて幸平は絶望した様な顔でこっちを見てきた。

「よし、幸平！行こう！」

「ちよつと！何をする気なの?!」

「人前じゃ言えない事よ！行くわよ！」

「嫌あーだあー！」

「うふふふ…しっかり可愛がってあげるわよ…体の芯まで…」

「ちよつと、芳樹！笑ってないで助けてよ！」

そんな2人の掛け合いを見て面白いなと感じ取りながらも心のどこかで仲の良さに嫉妬してしまった。

どうしてそんなに楽しく笑えるのだろうか？

午後3時。

文化祭の仕事を終えてギターを担いでスタジオに入った。エフェクターをセットしながらも穂奈美の事が頭を過る。その度にツマミを回しすぎて何回かハウリングを起こしてしまった。

「……………」

おかしな目で真汰に見られたけど翔一に耳打ちをされても何も見てこなくなつた。セッティングを終わらせると曲の演奏に入った。

(……………)

演奏をしている間は何も考えられなかった。周りの演奏を聞いて…それ以上はもう無理だ。左手の押弦と右手のストロークの動きを頭で考えて今は何を弾いてるかを逐一理解する。もう一杯一杯だ。

練習が終わる時もまたやらかしてしまった。ボリュームを0にしな
いでシールドを抜いたため雑音を大音量で発してしまった。

「…珍しいな、芳樹がここまでになるって…なあ、誰なんだ？赤尾
つて子は？」

「んー、言っちゃえば芳樹の準彼女」

「はあ？」

反論をしようと口を開けるがそんな気力は一切無い。口を閉ざして
ケースに仕舞う。

「…これ重症だね」

遂には龍にまで憐れまれた。これに関しては本気で泣きたくなっ
てきた。

帰り道。明日演奏する曲を聞きながら色々思索している。明日来る
のかな…等とじじうじ考えてしまっ…

(我ながら女々しいなあ…)

トボトボ歩く俺に翔一が心配そうに着いてきた。

「お前、大丈夫か？」

「ん、ああ…」

本当に心配そうな顔をする翔一。少しこいつに銀央さんとの仲を聞いて見る事にした。ホンの気まぐれだった気がする。

「なあ、お前と銀央さん仲いいよな？」

「俺と緋奈あ？うん、まあよく遊んでるな。婚約者兼親友ってところか？」

「…ふーん」

翔一と銀央さんが仲が良いのは知っている。けれども、俺が聞いたのはそこじゃない。

「あのさ…本音で話してる？」

俺が一番聞きたかった事はこれだ。俺は喧嘩した日、穂奈美の本音に分からず、イライラしてしまった。そしてそれを言わずに怒った。もしここで本音で話してたら少しは変わったかも…しれない。それだから聞いてみた。

「んー、どうだろうな…本音だろうな」

「やっぱ、そうか」

「どうしてそんな事を？」

「いや…でも勉強になる」

「そっか」

それ以上は一切追求してこなかった。聞いてきたのはライブのセットリストについて。それを確認し合いつつ帰路に着く。

「ただいまー…」

今は1人であるこの家。数週間前は穂奈美と居たんだが…今は嫌で

も部屋一つ一つが広く感じる。

（やっぱり、依存してたんだな…）

そんな事を感じながらも穂奈美にメールを送った。

さて、明日がとても不安だ。

けれども…全力で楽しもう。

決意する音符

文化祭2日目…一般公開の日。

そして俺達のライブがある日である。東雲さんに呼び出されて早めの登校を強せ…促された。どうにも昨日の催しで何箇所か強度が弱かった部分があるらしい。その手直しをしてくれと頼まれた。

「じゃあ、そっちは風鳥…でその障子の張替えは坂上と…南部で頼むわ」

「んじゃ、やるか幸平？」

「はいはい」

俺は障子張りで余った和紙と幸平は障子専用ノリを取って補強に係る。一箇所、障子を破って手を伸ばして驚かす所があるんだけど、何回も手を出したために周りも剥がれて来ている。このまま使い続けたらいずれか役に立たなくなるだろう。

「芳樹ー、こつちも外れてるよー？」

「おーう、じゃあ持ってきてくれ」

もう一気にやつちまおう。

障子を床に置く、障子の和紙を剥がす、必要な大きさに和紙を切り取る、ノリで貼り付ける。この作業を5回ほど繰り返して俺達の仕事は終わった。

「おし、元に戻そう」

「と言つてもあとコレだけだけどね」

「あ、何時の間にか片したのか？」

「うん」

と言う事で今持つてる障子を元にあつた場所に戻す。ピカピカの障子を見るとどうしても破きたくなる。こう…殴って突き抜ける感じが好きなんだ。ウチには無いけど爺ちゃんの家にならある。昔、ここでお手伝いと言う名目で障子を破いてたのが思い出せる。正直、あれは面白かった。

「…翔一」

「おう、坂上終わったんだな。それはそうと…ニヤニヤして気持ち悪いぞ？」

「うっせ、風鳥の方が気持ち悪い」

「んだとお?!」

拳を振り上げて来たのでさっさと退散する。所詮からかっただけだ…多分大丈夫。

特にやる事がなくなり廊下に出ようとするとうちの部活の部長がやってきた。

「おはよー！坂上…おお、目の前に居たぜ！」

凄くハイテンションで部長がドアを開けた。たまたま近くに居た人も驚いてこっちを見る。

「おはようございます、立川先輩。そんなに慌ててどうしました？」

するとにへらへらとして俺の腕を取った。凄く嫌な予感しかしない。

「手伝つてー！」

部長が手伝つてと言ったのはステージの制作。文化祭実行委員から作ってくれと頼まれたらしくやるはめになったそう。

「で、どうして俺もやるんですか？」

「いいじゃん。先輩命令だよ、先輩命令」

そんなヘラヘラした先輩命令を言われても…溜息をついてステージ制作に取り掛かる。もう何人か連れてこられてる人がいる様で真汰の姿も見れた。

「よ、真汰」

「ああ」

淡泊な返事を返すと作業を終わらせてこっちを見てきた。

「あ、芳樹も部長に捕まっただな」

「お前もか？」

「うん、拉致られた」

「おいおい、変な事言つなよ！」

離れた所から部長から突っこまれた。それを苦笑して返すと真汰にやる事を聞いて作業に取りかかる。机の足と足をビニールテープで固定をしてそれを沢山繰り返してステージにするらしい。

「…もう終わりそうだな」

「まあ軽音楽部の二年が総出で駆り出されてるもんな」

この前のミーティングで見た様な人が沢山居た。このステージは軽音楽部がやる伝統でもあるのだろうか？そうだとしたら来年がすぐ面倒臭い…

「…おし、これでいいかな」

「おー、お疲れ様」

「部長、これだと机のデコボコにつまづきませんか？」

「んー？これからビニールシート敷くから大丈夫じゃね？」

すると先輩達は何処からか大きいビニールシートを持ってきて敷きだした。

あれなら下手につまづかないだろう。

「あ、もういいよー。解散っ！」

「あ、はい。お疲れ様です」

「うんうん、ライブ頑張ろうね」

手をひらひらとふって見送り。何か謎が多い人だと思つ。

「お、もう9時か？」

「そうだな…一般公開するな」

「この間の百木さん来るのか？」

「…ああ、瑠璃な。来るぞ」

「へえ」

「迎えに行くが…来るか？」

「いや、やめとく。これ以上穂奈美に誤解は抱かれないしな」

「分かった…また放課後な」

「ん、じゃ」

真汰と別れて教室に戻りながら他の教室を覗く。一般の人も居て特に飲食店が人気の様だ。この調子だと最後まで残らないんじゃないかってレベルで並んでいる。

「私達のクラスはチユロス作ってます！他にもジューズ等沢山取り入れてます！ぜひきてください！」

廊下にいたのは穂奈美だ。大きな声をあげて宣伝をしている。色々な方向を見て宣伝をしているため俺に目が合った。その時だけ声がつまんだが何事なかった様に再び宣伝を始めていた。

そんな穂奈美を俺は見て離れるべきか…近寄るべきかで迷ったが近寄る事にした。嫌な顔をされたら帰ろうと思う。

「…穂奈美」

「え…あ」

その時、一瞬その目が淀んだ。まだダメか…諦めて帰る事にする。俺が背を向けて帰ろうとする。

「待って」

ガシツと肩を掴まれた。これは予想外だった。肩を掴まれたらには振り返らざるを得ない。なので振り返るとあちらこちらを見る穂奈美が目に入る。

「あ…あのさ…」

「うん」

しかし、クールビューティーと思ってたやつがここまで感情を露わにするなんて…と思ってしまった。場違いだと思っけれど、どうにも今の自分はこの状態を客観視しているようだ。

「ライブ…頑張りなさい」

「あ、ああ…！」

微妙に顔は歪んだままだったが穂奈美に応援された。心の中で今日頑張ろうと言う気持ちで溢れた。楽しみと期待に答える責任が一気にのしかかった。

教室に戻るとお化け屋敷出口に真汰と百木さんがいた。真汰は死にそうな顔をしていて百木さんはどこかイキイキとした顔をしている。

「あら、坂上くんこんにちわ！」

「こんにちわ、百木さん…真汰どうしたんですか？」

「ああ…あのね…」瑠璃は黙って」「

百木さんが何かを言おうとすると真汰が遮った。何か言いたくない事があるのだろうか。是非聞きたいものだ。…ここで人の弱い所を見て思わずニヤツとしてしまうのは俺がSなんだだろうか？

「あのね、「こら、黙れ…」真汰はお化け嫌いなのに！」

「…そうなのか？」

「…ああ」

意外な弱点の発見。思わず笑ってしまふ。

「どうして笑う？」

「いや、さ、真汰みたいな奴でも苦手なものはあるんだなって思っ
て」

「俺だつて苦手なモノは幾らでもあるぞ。瑠璃にだつていつも勝てないし、ニンジンとピーマンは嫌いだし」

「あー！まだ嫌いなのか?!」

「嫌なモノは嫌なんだ」

ギヤーギヤーと騒ぐ…まあ騒いでるのは百木さんだけなんだけど、その中で真汰の意外すぎる弱さと…子供すぎる一面を見てしまった。

「お前はいつも3回でへばるじゃねえか」

「私にあんなにされたら…!」

「ちよつと！話変わりすぎじゃないのか?!」

「首を突っ込むな!」

「……」

夫婦喧嘩は犬も食わないってね。夫婦じゃないけど、俺はこれ以上とばっちりを食いたく無いから受付の奴に話しかけた。

「よう、どんな感じだ？」

「あ、昨日も凄かったけど今日はその倍は人が来てるわよ」

「マジか…」

昨日は教室の中にいっぱなしだったからな…

何はともあれ、順調に進行してる文化祭のようだ。

時刻は12時を指した。

決意する音符（後書き）

明日から合宿だ…！

小説はストックがあるので勝手に更新されています。この頃にはもう31日ぐらいの分を書いているのでは無いでしょうか？

文化祭四重奏

適当に時間を潰して2時を過ぎた。今日のライブは3時からだけれどもずっと前に引いたくじで演奏順番が一番最後となってしまった。多分4時過ぎになると言われてるので皆でステージ近くの空き教室に全員で集まってウォームアップをしている。因みにステージは野外で昇降口前にある。

翔一は腕立て伏せをして龍はストレッチ、真汰はドラムスティックで腕を伸ばしている。俺は腕と左指のストレッチをしている。それぞれ準備を終えるとそれぞれ楽器のチェックに入る。今回演奏する曲は基本的にレギュラーチューニングだけなので特に気にする必要は無いけど狂ってないか確かめる。

(…うん、大丈夫だな)

そしてエフェクターのチェック。ギターと繋いで音の確認。もう慣れたような動作だけれども今は一つ一つに緊張する。翔一もどこかたどたどしいが異常に落ち着いてるのは真汰と龍。どこか頼もしく思えて来る。

「なあ、二曲目が少し危ないから合わせないか？」

龍からの提案だ。練習中に翔一のリズムが崩れて俺も一緒に崩れて直前になってようやくできた曲なんだが…少し不安要素がある。

「んだな、やつとこつ」

「すまねえ、俺が苦手なフレーズなために…」

「別に良いさ。さ、少し合わせてみよう」

ドラムも無くアンプも無いが音の確認だけはできる。翔一は机を叩いてリズムを取り龍はマイク無しで歌う。俺と翔一も空の音でやっている。

フレーズが複雑でリズムが崩れそうになるが…どうにか整える。

「…っと、大丈夫かな」

「ああ、狂わなかったし大丈夫だと思っよ」

「うん、俺もソ口気をつけなきゃな」

「ふいふい…本番緊張するなあ…」

それぞれ力を脱いでだらけようとする。異常な緊張状態なのだ。本番でスカしたくない。

『はい、やってきました！我らが軽音楽部のライブ！』

オオー！！！！

外で歓声が弾けた。四人は顔を合わせて外を窓から覗く。すると部長がステージの上立って司会をしている。

『今日はね、何と！一年生バンドもあるんだよー！すげえよな！ちくしょうー！』

部長が恨みがましい言葉を吐くと周りから笑い声とそれを突っ込む声が聞こえる。何かこう言っのを見ると高揚感が湧いてくる。

『じゃあ、今日は楽しむぞ、いいなあ！！？』

『おおおおー！！！！』

早速一つ目のバンドが始まった。観客はまだ文化祭が終わってすぐに始まったから人はまだ少ないけど、時間が経つ毎に人が集まっている。俺たちがやる時にはどうなってくることやら…そう考えると心臓がバクバクいい出した。皆緊張してるのかな…と思って横を見る。

「くっそ、眠い…」

「龍、頬を思いつきりつねれば目覚めるぞ」

「よし…いはははっ!!」

「色んな意味で」

「ってそう言うことかあ?!真汰、てめえ心の中で馬鹿だと笑っただろ!」

「いや、思ってたないぞ」

「…ならいいけどよ…」

「アホだと思った」

「同じだろおおおおお!」

「語彙と意味が違う」

「うがああああああ!」

何だろうか、このいつもの教室でありそうな感じは。思わず笑っている緊張が取れることに気がついた。

(助かるよ)

こいつらなら何でもやっちゃいそうだな…本気でそう思えてきた。

「龍、俺は馬鹿だと思ってるから!」

「んだとお、芳樹?!実は俺もだ!」

「芳樹と翔一までかよ!」

俺達の所へ突っ込んでくる龍。楽しいな…もっと楽しめたらな…

「今待機してるバンドが出たら裏に行くぞ？」

「へーい」

遂に殆どのバンドが終わり残すところ俺達を含めて後2組だけだ。前のバンドがセッティングを始めると俺達は裏に回った。

(もうここまで来たら逃げられねえぞ…)

頬を叩き気合を入れる。

「…芳樹ってM？」

「黙れ」

ガッツと翔一を殴って頭を抑えてる時に今できる最低限の準備をする。ピックを2、3枚持つてる事を確認して後は待つだけ。

「…もしかしたら俺の準備が一番遅いかもしれん」

真汰が持っているのはスネアとスティックにペダル。ドラムの足の部分の奴なんだけれど、こいつは今回の曲でツインペダルが必要なブラストビート(と言っても本格的なものでは無くそれなりなブラストビートだ)をやるため必要となっている。

「まあ、時間かかってもいいからしっかり準備しよう」

「ん、分かった」

そうして前のバンドが来るのを待つ。それまでの数分がとても長く感じた。

演奏が終わり、退散する先輩を他所に俺達が入る。

「おおとり頑張れ、後輩」

ポンと前のバンドのキーボードの人に肩を叩かれた。確か…陸野先輩だったかな。

ステージに立つとその観客の多さに仰け反りそうになる。

「おい、頑張れよ。終わったら赤尾に告白するんだろ？」

「いや、しない。つか、何だその死亡フラグ立ちそうなセリフは」

「…すまん、考えてなかった」

「…ならいい」

少し翔一と話して緊張が取れた。セッティングをしてから深呼吸をして前を見据える。人ごみの中で穂奈美と銀央さん、幸平に真琴さん。それにクラス的面々を見つけた。穂奈美が控えめに手を振ってきたので俺は笑って返す。

「おい、ヘタレー！」

「頑張れよー！」

「赤尾さんにいい所見せてやれー！」

周りの奴はいらんな、うん。後でどう仕返しをしたるかとあれこれ考えていたが真汰がセッティングを終えたので頭を切り替える。お互いに頷き合い、意識を左手と右手に向ける。

「さあ、全力で楽しもう！」

演奏の間はかなり遊んだ。演奏こそ真面目にやったがそれ以外の動作だ。例えば、翔一と向かい合って弾いたり、ソロの時に前に3人で立って龍は演奏の真似をしたり。本当やりたい放題だった気がする。ただ、龍にマイクを振られた時にはビックリしたものだ。いきなりだから歌えるか！と思っただけけれど、演奏していると自然に歌詞が頭に入ってるのな。普通に歌えたよ。

「はい、お疲れ様でした！そっぴやバンド名を聞いてなかったな。今、聞こうか！何だい？」

ずいっと部長からマイクを龍に渡される。

「Jackです！ありがとうございます！」

Jackってのは切り裂きとか豆の木とかブラックジャックからも取ってるのだが。まあここで話すような内容じゃないな。またの機会です。

「おー！Jackね。なかなか中二臭いぞ！」

「いや、それなら先輩のGlassesもなかなかですよ…」

場内は笑いに包まれる。ふと穂奈美の方を見ると目が合った。これが終わったら教室に戻らなきゃな。達成感を感じる心の中でそう考えた。

(ふう…)

ギターを下ろすと一気に気苦労が取れた気がする。ライブが終わった後はビンゴやらあるそうなのだが…俺は抜ける。腕が痛いんだ。

「ふふ…お疲れ様」

「あ、穂奈美…か」

丁度夕暮れで赤く照らされた穂奈美が教室に入ってきた。今までのたどたどしさは無くなりいつもの穂奈美に戻っているようだ。

「あのね…」

「うん…」

「思ったんだけど、普通に喧嘩してても話してたりしたのに今更仲直りとかどう思う…?」

「…悪い、俺も同感なんだ」

確かに色々話していたから…喧嘩しててもそんな感じになっただけだからな。

「でも、こういふ雰囲気なら言うことは一つじゃない?」

何かを期待するような目つきの穂奈美。俺はそれにどう対応するべきか迷ったが…どうにか決めた。

「穂奈美…おいで？」
「うん…」

俺は近くに來た穂奈美を抱きしめる。暖かくて柔らかい。女の子ってこんなに柔らかいんだな…と、思ってしまった。

「な…なっ…」

すっかり赤くなって狼狽してる穂奈美。夕焼け効果が有って更に赤い。

「お前にさ…」
「うん…」

決断の時だ…待たせてる穂奈美に返事を出す。

「ここでこの雰囲気告白したらダメだと思っただ」
「は…？」

これが俺の答え。だって、そうじゃない？よく恋愛小説にありがちな文化祭の放課後に告白とか…

「な…な…何でだー！」

ガツと穂奈美に殴られました。痛いです。

「人にその気にさせておいて！何なのよ！」

「この雰囲気負けて告白とか嫌なんだ」

「…は？」

さっき頭の中で考えたことを口にした。すると最初は難色を示したが、何となく分かったと言う目をしてきた。

「はぁ…芳樹らしいわね」

「それは分からないが…分かってくれたらいいぞ」

「…また待つからね」

「俺も待つてる状態だぞ？」

「そうだったわね」

両思いでも思いを口にしない俺ら。いつかは恋人になれたならいいけど…今の俺達にはこの曖昧な関係がいいのかもしれない。お互いをよく知る期間とでも思えばいいだろう。

「さて、帰るわよ」

「んっ」

「ハイハイ」

キュツと俺が差し出した手を握る穂奈美。

隣からとてもいい柑橘系の匂いがした。

文化祭四重奏（後書き）

別に完結じゃないですよ（笑）
まだ、頑張ります。

無防備な音符（前書き）

短いです。

無防備な音符

「イエーイ、お疲れ様！」

カチンとグラスを合わせる。それに合わせて中の液体が踊る。文化祭の次の日、俺達はクラスで集まって打ち上げをしていた。場所は学校近くの焼肉屋。委員長が『おし、肉取れ！かぶりつけ！』と訳の分からない事を騒いでここの予約を取ってくれた。その委員長は今は完全に肉を食べることに頭が一杯になっている。

「芳樹、お疲れ」

「おう、幸平もな。楽しかったか？」

「うん、天文学部の部室にいる時が楽しかったかもしれないけど、出し物も面白かったよ？」

「部室にいたのか？」

「うん、真琴と居たんだ」

「…何もしてないよな」

「あっ…ははは…」

笑えてないぞ。目元と口がひくついている。もう突っ込むのをやめてたまたま焼きあがりかけていた肉を取り、食べる。…うん、美味しい。

「あ、おい、坂上！俺の肉取るな！」

「あ、悪い。もう取らないから…よつと」

「取ってるんじゃないか！」

「あ、悪い。少し風鳥を苛めてみたくなっただ」

「達悪いわ!」

風鳥をからかうのをやめて自分の分の肉を焼く。

「おい、ユツケとかレバ刺し無いのか?!」

「とりあえず、委員長落ち着け」

店員向かって喚きまくる東雲。その二つはやめとけ。今、どこの肉屋にも殆ど置いてないから。

「つか、坂上。ライブかっこよかったぞ? 紗東も!」

「そうか?」

「で、俺達聞いててどうだった?」

「やばい、かっこよかった!」

すると何人かクラスの奴が寄ってきててんやわんやになった。

「もー、凄いな! 惚れちゃいそうになったわ!」

「一瞬、キューを捨てちゃおうかと思つたもの!」

「愛? 今の聞き捨てならないぞ? 後で詳しく聞くとして…凄いな。惚れ惚れしたよ」

「何だ? 実はお前そつちの気があるのか?」

「違うわ!」

あっはははと笑うクラスメイト。

もう居酒屋の雰囲気だ。いや、行った事はないんだけどね。

「おい、坂上。お疲れだったなあ!」

バシバシと叩いてくる委員長。凄く痛い。つか、くせえ…

「おい、委員長が酒頼みやがったぞ?!」

「おい、もう手遅れだ!こいつ酔ってる!」

「おい、どうするんだよ!?!」

どこに行ってもこのドタバタは収まらなさそうだ。

どうにか委員長を帰させて俺らもそれぞれ帰路に着いた。

今日は打ち上げで明日は穂奈美とデートと言う事になっている。普通お出かけでいいんじゃないかと思っただが拘りこたわがあるらしい。

まあ、その穂奈美とのデートとやらは昼からなので…帰ったらぐっすり寝ようと思う。

「ただいまー」

ボソッと小さな声で言う。玄関を開けるとリビングに電気が着いてるのが分かった。

(…誰だ?)

父さん、母さんは冬休みに帰ってくると言ってたし…後は誰がこの家に入れるだろうか?

俺は万が一の事に備えて手短かな傘を手にした。

そーっとリビングに辿り着く。中の様子を伺うとテレビを見ている人影。つか、あの髪…

「穂奈美…勝手に入るなよ」

「あら、おかえりなさい」

「あ、はい。ただいま…じゃなくて」

それはおいといて。俺が聞きたいのはどうしてここにいるのかと言う事だ。

「ああ…芳樹のお母様がさっきまでいらっしゃって私に鍵を預けていただいたわ」

「色々突っ込みたいんだが…」

「何処に？」

「それ違う！…ええと、うちの母さんとどこで会った？」

「この家の前よ？」

「じゃあさ…」

「もうしつこいわ」

スツと立ち上がりテレビを消す。すると俺の方に向かってきて…上に一枚はおってるモノを取った。

「とりあえず、風呂に入ってきて。ニンニク臭いわ」

「…了解」

「あ、因みに着替えは脱衣室にあるから」

「…はい」

まるで押しかけ嫁みたいだ。でも、風呂には入りたいのでそれ以上は言及しない。

脱衣所のドアをしめ、服を脱ぐ。それを洗濯機の中に入れて風呂に入る。

中はお湯がしっかりと貼ってあって、丁度いい暖かさになっている。

(早く体を洗って出よう)

そう決めると早速頭を洗い、顔を洗い…体を洗う。もう慣れた一連の動作だ。背中を洗うコツも見つけたのでスムーズにできる。

「芳樹、背中を流しましょうか？」

…こいつさえ居なければ。

「いや、いい。洗えたし…後は湯船に浸かるだけだ」

「ちえ…」

「舌打ちするな」

「はい、でもう寝るの？」

「ああ…グツスリ眠りたいからな」

「分かったわ」

脱衣所から穂奈美の気配が消える。湯船に浸かり適当に歌った曲が終わると浴室を出た。てか、やりたくなるよね、風呂で歌うの。寝巻きに着替え、リビングで麦茶を飲むと自室に向かった。

そういえば穂奈美はどこで眠るんだろう？そんな疑問を持ちながら自室に入る。布団を捲るとやはりここにいた。

「芳樹、おじやまするわ」

「…無防備すぎないか？」

と言いつつも俺もベッドに潜り込む。穂奈美の体温で温まっていて心地よい。ただ、隣からくる柑橘の匂いは自分の理性を全て無に帰そうとしているから怖い。

「ふふ…芳樹はヘタレだから無理よ」

「うっ…」

「それにね…」

するとただでさえも近い距離を更に詰めて俺にくっついた。いや、抱きついたと表現したほうがいいかもしれない。おかげで俺は絶賛心臓バクバクしてる。

「芳樹なら別にいいわよ？」

「っ?!」

俺が衝撃を受けていると寝ましよう?と言われて俺が何を言っても取り合ってくれなかった。

未だに離れない腕と穂奈美と穂奈美の全面に位置する双子山。それを一気に俺の理性を刈り取る。

「最悪だ…」

もうそう呟いてしまっ。

俺は穂奈美の寝顔を見て布団の中にいる穂奈美の気配を感じながらどうにか寝ようとする。

そしてどうにか寝れたのはそれから1時間経ってからの事だった。

恋愛行進曲

「…て…きて…」

段々目覚めていく感覚の中、何か声が聞こえる。そのまま無視をして微睡みの感覚を味わっていると次はゆさゆさと揺すられている。

(くそ…まだ寝かせろ)

揺すっている手を取ると布団の中に引き込んで抱きしめる。

「んなつ…えつ…」

何か顔の下から聞こえてきたけど無視をする。しかし、暖かい。このままずっと抱きしめていたい感覚に襲われる。なので更にぎゅっと抱きしめる。気持ちいい抱き枕だ。

「いい加減起きて」

バチツと頬を叩かれて目覚める。見ると俺が抱きしめていたのが穂奈美。真っ赤な顔で俺を見上げている。

「…おはよう」

「おはよ。なかなか刺激的な朝だわ」

俺は穂奈美を開放する。ただ、体から温もりが消えるのが嫌だった

けれど…仕方ない。

「ふう…今日は楽しい楽しいデートよ」

「の割には楽しそうじゃないな」

「うるさい。目覚めてあんな事があればテンションがおかしくなるわ」

「昨晩は抱きついて来たのに？」

「それとこれは別。自分から行くのと相手からじゃかなり違うのよ」

「そっ言つものなのか？」

「そっよ…で、朝ごはんはどうする？お母さんに頼めば作ってくれ
ると思うけど」

「ああ…そっするかな…って、外泊してて佐知子さん大丈夫なのか
？」

「うん」

「うんって…」

「大丈夫、分かってくれるわ。きっと」

すると上着を脱いでいきなり下着になった。うわぁ白…

「って、うわぁー！」

目の前で着替え出した穂奈美に背を向けて部屋を出る。後ろでふう
っ…と笑う穂奈美がいた。

穂奈美が着替え終わると俺も着替えてマフラーを首に巻き自宅を後
にした。そして、赤尾宅を訪れた後にそのままでかける。実を言う
と今日の出かけ先を知らない。穂奈美が決めたとか言ってるけど…
どうするつもりだ。

どこに行くのかとあれこれ思索してるうちに赤尾宅に着いた。

「お母さん、ただいま」

するとパタパタとスリッパの音をさせながらリビングのドアを開けて佐知子さんが出てきた。その後には美弥ちゃんもいる。

「あらあら、おかえりなさい。芳樹くんもいらっしやい。まるで朝帰りね」

「そうだよね、お母さん。ねえねえ、お姉ちゃん？」

「何だ？」

「昨晚はお楽しみ？」

ブツと俺は吹き出しそうになった。そんな俺を三人とも見ている。穂奈美は凄くニヤニヤした顔をして。

「あー…穂奈美とは一緒に寝ただけで…それ以上は何も意味が無いです」

事実を正直に話す。本当にやましい事はなかった…俺が寝てる時に何かされてなければの話なのだが…

「え、芳樹兄ってヘタレ？」

「ヘタレゆーな」

「だって、2人って付き合ってるんじゃないの？」

「付き合っていないぞ？」

「あらそう…じゃあ、その繋いだ手は何？」

指摘された手を見ると握りしめている俺と穂奈美の手。それに2人とも気づくと慌てて手を離れた。

(ほ、本気で気づかなかったぞ…?)

自分の無意識さに呆れる。いつ握ったのか不思議な位だ。

「はぁ…まあいいわ。2人ともご飯食べなさい?」

そう言っただけ俺たちを中に入れた。朝ごはんはトーストにサラダと言
う洋食だ。

そついやさ、朝にご飯…まあライスだと頭の活性化とかどこかで聞
いた事があるな…後は朝から油物を食べるとダメとか。

まあ、そんなのは気にしないで食べる。

食事中に穂奈美は今日出かけると言うことを伝えた。

「流石に夜前には帰るわ」

「そらそうだろう」

「まあまあ…あ、夕飯は食べてきてね」

「分かったわ」

そう言っただけ穂奈美は立ち上がると準備をしてくると言っただけリビング
を出た。

「芳樹くん、夕飯はキミだとかやってもいいわよ?」

「…それが親の言う事ですか…普通逆ですよ?」

「まあまあ、細かい事は気にしない」

もうこの人ダメだ…と思ったけど、うちの親もこんな感じだと思
い出すと絶望した。

…周りにまともな大人がいない…

少しすると穂奈美が降りてきたので俺も出る。穂奈美はファアを基

調としたファッションで出てきた。黒いモコモコシャツに白いロングスカート。上着に白いファアのついたジャンパー。全身モコモコモコモコ...

「さ、行くわよ」

「うおっ...」

穂奈美に連行されてバスに乗らされた。同じ様な学生が乗っているからその人達も俺達の学校の生徒だろう。

しかし、中学はあまりクラスが少ないと全員知り合いとかあるけど高校だと広いから全員知り合いとかあり得ないよな。でも、うちの高校は地元組が多いから殆ど知り合いとかにはなれる...多分。

バスを駅で降りてそして電車に乗らされる。

ここで気になつた事が一つ。

「なあ、触つていいか？」

これ目的語を抜かしたから何を触るか分からないので...警戒するだろう?でも、こいつは...

「はい、どこでもいいわよ」

と無表情で体を見せつける様に腕を横にした。こいつには恥じらいとか無いんか...

まあ、触つてもいいと言われたので触る事にする。

「ぴゃっ!」

俺が触つたのはファアの部分。ふわふわしてるのか凄く気になったのだ。俺が触つたのは黒いシャツのお腹の部分。他のところもある

だろう！と言いたくなるだろうけどここしか触れそうな所が無かった。

…一割は下心があるけれども

「うわぁ…気持ちいい」

なでなでパスパスなでなで…

「ねえ…？」

「何だ？」

俺がそのファアの気持ちよさに堪能していると赤い顔の穂奈美が見上げてきた。

「これ、痴漢？そういうプレー」

「違います」

慌てて手を離す。もう少し触ってたかったが、そのうち本気に痴漢として扱われそうなので諦める。

適当な話をしながらとある駅で降りる。

降りたのは海の近くの駅。

「なぁ…ここに何があるんだ？」

「何って…海よ？」

「まさか泳ぐ気か？」

「あ、それいいわね。芳樹やってみてよ。私はパス」

「達悪いなあ！」

そういいながらも海の方へ歩いて行く。潮風が寒い。

穂奈美なんか震えている。俺はマフラーをかけると穂奈美の隣に並

んだ。

無言で歩いてると海の防波堤が見えた。俺達はそれにある階段を登り砂浜に降りる。

「冬の海って見てみたかったのよね」

「何も無いじゃないか」

「それがいいのよ」

そういうと穂奈美は座った。俺も隣に座ると穂奈美は俺に体重を預けてきた。さりとて重くないのでそのまま無視する。むしろ人間湯たんばで助かる。暖かいんだ。

「早いわね…もう一年が終わろうとしてるわ」

「なあ…この一年間内容が濃かったからな」

「芳樹は浮気するし」

「浮気じゃねえだろ…お前は変な御曹司様に目をつけられてるし」

「考えるほど濃い一年だわね」

「本当だ」

そういうとそれきり会話がなくなる。数分だろうか、その位で穂奈美は立ち上がる。勿論、俺も立ち上がる。

「私としてはあなたに会えてよかったわ」

「俺もだ」

そう言っただけ俺達は手を繋いだ。

近くをぶらついてると温泉がある事に気がついた。

「なあ、行かないか？」

「面白そうだから行きましょ」

満場一致で決まった。といっても2人だが。
暖簾のれんを潜ると番台のおばちゃんがいたのでお金を払い、入場料とタオルを借りる。これは無料だった。スーパー銭湯とかだったら金取られるんだけどな。何とまあ珍しい。

「じゃ」

「じゃ…じゃないけど」

俺は穂奈美の言葉を聞き流し更衣室に入る。そこで服を脱ぐとタオルを腰に巻いてドアを開ける。

(うおっ！露天風呂か！)

目の前にあるのは露天風呂。そして近くに鏡と桶と椅子がある。ここで洗えと言う事だろうか。
けれど、ここで風呂の気分で入ると風邪を引くのはわかってるのでシャワーで体を洗い風呂に浸かる。

(ふう…気持ちいい)

凄く癒される。外はひんやり体は暑く…凄く気持ちいい。
するとドアが空く音がした。同じような客でも来たのだろうか。俺は少し気を抜いて目を閉じる。
シャワーを浴びて近寄ってくるのを感じる。

「お湯加減はどうですか？」

「ああ…気持ちいいです…よ？」

聞こえて来たのは男の低い声ではなく女性の声。恐る恐る振り返る

と白いバスタオルが見えた。上に視線をずらすと形のいい胸、そして見慣れた穂奈美の顔。…またニヤニヤしてらあ…

「って、ここ男風呂じゃないのか?!」

もしくは間違えたのか…と思うが俺と穂奈美は間違えなくそれぞれの性別の暖簾をくぐったはずだ。つーことは…

「まさか混浴なのか？」

「そーよ。と言う事でお邪魔するわ」

そう言つてバスタオルを脱ぎ始める。それに気づいた俺はまた慌てて外を向いた。

(…ピンクのが…)

頭を振つて雑念を払う。穂奈美が隣に座ってきたから少し離れようとする。したら、穂奈美は腕をがっしり掴んできてまた近くに寄せた。…これ結構意識しちまうものだぞ？

「どうして逃げるの？」

「いや、見えたら問題かなあ…と」

「問題は無いわ」

「いや、どこが？」

「まずは湯が濁ってるから分からないというのが一つ。そして、芳樹に見られても大丈夫だと思ってる私の気持ちぐらいかしら？」

「…はあ…諦めて逃げんのはやめる」

「うん、最初からそうすればいいんだわ」

観念して隣に座る。チラッと胸元を見たが何も見えない。残念…で

はないぞ。決して。

「芳樹から邪な視線を感じる」

「いや、気のせいだ、きっと」

適当に言っただけ話を誤魔化す。これ以上続けられると俺が恥ずかしい事になりそうだから…

「そっぴやさ」

「？何かしら」

「デートらしいデートじゃないよな」

「あら、デートとして認識してたの？」

「穂奈美が言うからな」

「いいじゃない。好き合ってる同士のお出かけとかデートじゃない？」

「……………」

「や、そこでどうして黙るの？」

「いや、答えたら結局度坪にハマりそうだったから」

「そう？で、いつ告白してくれるの？」

「思ったんだが穂奈美から俺に…って考えは無いのか？」

「無いわ」

それきり会話が切れる。告白ねえ…イマイチこの関係だと想像がでないんだよな。気を許しすぎてるというか。まあいいんだけどさ。

「そろそろ行きましょ？」

「ああ…っわっ！」

穂奈美は何の前触れもなく立ち上がった。俺は穂奈美の方を見てた

ため…その全身を見てしまったと言っか。もうダメだ。

「先に出るわね」

「あ、ああ…」

俺はしばらく出られなかった。

着替え終えて外に出ると同じタイミングで穂奈美が出てきた。

穂奈美はその暖かい体を寄り添ってきて歩き出した。夕飯はどうしようかと言う話になったが、そこらのレストランで取ることにした。

「で、私の裸どうだった？」

「正直に言っと寿命が縮まりそうになる」

「ふうーん…ま、いいわ」

それからクリスマス話になって今度銀中央さん達とクリスマスパーティーを銀中央宅ですると言うので楽しみにと言われた。

「次のデートは豪華なディナーとかをお願いしたいわ」

帰り道こんな事を言ってきた。ディナーってねえ…イマイチ学生が行けるような雰囲気じゃないからな…

「…考えとく」

それしか返せなかった。

恋愛行進曲（後書き）

読みにくくてすみません...

聖なる雑音

12月：期末テストを終えてもうあたりはクリスマス一色だ。それで俺は憂鬱にならず楽しめている。

街はイルミネーションでライトアップされてとあるケーキ屋ではクリスマスケーキの予約販売を行っている。

そんな事を傍目に街を歩く。

今日は穂奈美に言われたクリスマスパーティーなのだ。

前々から知っていたが数日前にすっかりとした計画が立てられて1人1000円ぐらいの誰でも使えるようなモノを選んで来いと穂奈美に言われて買ってきた。悩んだけれども、これがいいと思う。ポケットに二つプレゼントがあるのを確認すると銀中央へ歩みを進める。

繁華街を通り過ぎて住宅街に着く。前に旅行に行った時に寄ったので地理は分かる。

「芳樹！」

後ろを見ると幸平がやってきた。相変わらず愛くるしいやつだ…そんな趣味は無いけどさ。

「おす…真琴さんは？」

「何かね、準備があるから先に行くだってさ」

「へえ…真琴さんもか」

「赤尾さんも？」

「ああ」

俺達は恐らく一つの想像をする。女の子三人が楽しそうに料理をする姿。穂奈美のエプロン…

「ねえ、芳樹顔がにやけてるよ?」

「そういう幸平もな」

「嘘だあ…」

そう言つて幸平は顔をペタペタ触る。頬が吊り上がってるのに気づいたのだろう。真つ赤になつて俯いた。

「てか、幸平?」

「な、何?」

真つ赤なまま見上げた幸平。俺はこれだけは一つだけ問いたい!

「なあ、俺と穂奈美が常に一緒に居ると思われてる?」

何かいつも俺と穂奈美のペアとして扱われてる気がする。どうしてだろう? 穂奈美という時間が長いからだろうか。

「うん… そうだね。例えばさ、芳樹は僕と真琴と一緒に居るのが当たり前だと思つてる?」

「ああ。何か離れてるのが想像できないな」

「そう思われてるんだね… まあそれと同じだよ」

「ふうん… そう言うものなのか?」

納得はいかないが渋々頷く。周りからそんな目で見られてると思つてなかつたから少し予想外だ。

「去年だとこんな事考えられなかったよね」
「あ、それ俺も思った」

去年は受験だったから幸平と真琴さんを巻き込んで少し遊んだだけだったけど、一昨年は俺と幸平で2人でゲームをして終わってた気がする。

「そう言えば、芳樹がケーキ落としてたっけ？」
「え、そんな事あったのか？」

そんなのは初耳だぞ…何で俺に無い記憶があるんだ？

「あの時さー、僕と芳樹でゲームやってて2人で盛り上がりすぎてテーブルを押しちゃったんだよね。そしたらさ、ポトって」

「マジか？」
「うん、マジ。覚えてないの？」

「遺憾ながら…全く」

「他人の記憶なら忘れないけど自分の事ことって忘れやすいよね…」
「それなら俺にもあるぞ？」

幸平の恥ずかしい話を。幸平が何々？と聞いてくるから言ってあげる。くくく…

「あれは…中1の時だったな。体育の時間に真琴さんの事をじっと見ててさ…何を見てるのかと思ったたら胸ばかり凝視してて…」

「あわわ…！」

慌てて俺の口を塞ふさごうとする。思い出したのだろう。あれは俺の中で衝撃的なものだった。

そうして昔の話をしてると銀中央に着いた。相変わらずでかい門だ

な。変わったらおかしいのだけれども。

俺は門に着いているインターホンを押す。ピンポンとどこでも聞くような音が響く。

『はい、どちら様でしょうか?』

聞こえてきたのは銀央さんの声。小さくだが穂奈美の声が聞こえた。そんな気がする。

「あー…坂上と磯部だ」

『あ、こんにちわ。芳樹さん、幸平さん。今、門を開けるので待っててください』

そういつた数秒後、門がギギギ…と言う音を立てて重苦しく開いた。一瞬、潤滑油を買ってきて塗りたくなった。

『そこからまっすぐ道なりに進んでください。決して外れてはいけませんよ…』

そう言ってきた。道を外れたらどうなるのだろうか? 凄く気になったが怖いから真っ直ぐ進む。前に来た時は青々として爽やかだったが、今は葉も抜け落ちさみしい感じを醸し出している。

そうして道なりに進むこと2分ぐらい。もしかしたら1分も満たっていないかもしれないが今はそれは関係ない。屋敷に辿り着いた。俺はノッカーを叩いて着いた事を伝える。すると中からガチャっと言う音を立ててエプロン姿の銀央さんが出てきた。

「あら、いらっしやいます。どうぞ、中へ」

「はい…お邪魔します」

中に入る。舞踏会が開けそうな場所を通つてとある部屋に向かわされた。

「この中で待つててください。できたらお呼びします」

ではと頭を下げて銀央さんはパタパタと走つて何処かに行った。恐らくキッチンだろうけど…

「ねえどんな料理が出てくるのかなあ？」

「ターキーとか？」

「それつて、感謝祭じゃないの？」

「いや、クリスマスも食べるんじゃないのか？」

どうでもいい会話をして中に入ると広い部屋のソファに翔一が横になつていた。

「あ…おはよ」

俺達が入ってくる音で目覚めたのだろう。体を動かして翔一は立ち上がった。

「うっす…」

「翔一寝てたの？」

「おう…昨晚寝れなくてさあ…」

眠そうな目とやつれた顔を叩いて気合を入れている。そんなにやつれるほどの事があるのだろうかとツツコミたいが、俺は空気を讀んで無視する。

「で、お前らはプレゼント持ってきたか？」

「うん、ちゃんと買ってきたよー」

そう言っただけ幸平は取り出そうと持ってきてたバツクを探る。

「ストップ！楽しみが半減するから出さなくていいぞ」

「そう？ならいいけど」

そう言っただけ幸平はバツクを掛け直す。俺は少し余裕があったからその間部屋を見渡していた。

あるのはソファにベッド、テレビ。それに本棚には申し訳程度に置いてある本。ここまで見ると来客用の部屋だと思っただろう。ただ、俺は窓を見てゾツとした。

檻が付いてるのだ。

「なあ…ここって翔一の部屋か？」

「お、どうして分かったんだ？」

「どうしてって…」

ねえ。檻は翔一が脱走をしないための防止策。そして今見てきたが出入り口のドアは外から鍵がかかるタイプのドア。

…ここまでくれば分かるだろう。翔一はここで半監禁されているのだ。多分。多分と言うのは出入り自由みたいなので確証を得られないからだ。

（銀央さんってヤンデレ…？）

もしかしたらその素質が…と思っけどもう遺憾なく発揮してると思った。

少し怖くなった自分の思考を捨てる。

「そついやさ、芳樹？」

「お前つて緋奈の事を苗字で呼ぶよな」

「うん、それが？」

「いや、下の名前で呼ばないか？お前だけだぞ、余所余所しいのは」

と言われても困る。特に意識する事もなく銀央さんと呼んでいたの
でいきなり変えられないし…銀央さんも困るだろう。

「努力する」

それだけ返しておいた。できるかは保証できないからな。
それからは備え付けのゲームをやって時間を潰した。

「幸平、強すぎだ…」

「そりゃ、伊達に毎日やってないからね」

えっへんと腰に手を当てる幸平。幼馴染の意外な一面を見た気がする。
る。

それぞれがゲームに飽き、腹が減ってきた頃、それはやってきた。

「メリークリスマス！！」

ドアを開けてそう大声で入ってきたのはサンタ。サンタと言っても
白い髭の着いたあの有名なおじさんではない。

やってきたのは三人の美少女サンタだ。

しよっぱなからどきついものが来て大変な男子陣でした。

聖なる雑音（後書き）

後半へ続く（有名ナレーター風に）

雑なる聖音

入って来たのはサントコススの穂奈美、真琴さん、銀央さん。まあ、サントコスチュームはよく街で見かけるし許せる。しかしだ、それはズボンを履いてるだろう？場所によっては違つかもしれないが俺がさっきまで見てたサントコスチュームは男女関わらずズボンだった。

しかし、今日の前にいる娘共はミニスカだ…すげー中まで見えそうな格好で。ああ、こらこら。そんまに前かがみにして谷間チラチラさせんな。ほら、翔一なんか銀央さん限定でガン見してるよ。

「芳樹、鼻伸びてるよ？」

やべ、目の前の穂奈美の予想以上可愛さに見惚れてた。真琴さんは堂々として銀央さんはしゃんとしてるなか、穂奈美ははずかしそうにモジモジとこっちの様子を伺っている。凄く小動物みたいな感じがして、保護欲を掻き立てる。

「こ、こっち見ないで…」

「お、おお…」

と言われても視線はそちらにいつてしまう。豊かな胸、くびれた腰、程よい大きさの腰回り…ある意味これは一種の芸術品かもしれない。

「いつまでも見てないで、こっちは飯食べましょっつ」

意識を逸らされて銀央さんに連れられる。廊下に出るとサンタ娘三人は前を歩き始める。

すると自然に俺たち男三人はその三人の後ろになるわけで…

「すごいね」

「うん、すごいね」

「すごいね」

目の前には尻をフリフリしている穂奈美。や、別にフリフリしてるわけじゃないけど歩いたびに横に揺れているため目の保養…いや、目に毒だ。

しかし、そんな姿を見ても目を離したり違つところに視線を移動させないのが男の子って所だろうか。つか、こんなの見たら目が離せなくなるからな。

ふと腰より上を見てみる。女の子達は前に歩きながらも横を見て話してるわけで…

「お、揺れた」

「真琴は…ないからね」

「俺は見えねえ…」

揺れる双子山。邪魔になつて痛くないのかと気になるが突っ込まない。突っ込んだら人間として機能しなくなりそうだからだ。しかし、目は決して離さない。

考えてみればこんな綺麗な子たちとクリスマスを送る事なんて思つてはいなかったことだ。去年は真琴さんがいたものの2人とも気づかないだけで相思相愛状態だったからむしろ早くくつつけとヤキモキした位だ。

(穂奈美ねえ…)

考えなくても必然的にペアはこいつになるだろう。こっちも全く予想をしてなかった。あの日、遅刻してこなかったらこいつには合うことは無かったのだ。

まあ、銀央さんと翔一を介して会う事があつただろうけどこんなに仲を進展させる事ができなかつただろう。そう考えると不思議な感じがする。

そしてやはり目の前のモノに視線を向ける。

そんな後ろ姿を追いかけながら俺達はとある部屋に着いた。

「さあ、ここで今日は遊びます…どうぞ楽しみましょう?」

「そうよ、私達頑張つたんだから」

そう言つてドアを開ける。すると目の前には…うん、言葉にできないな。

「うわ…すげ…」

翔一は感嘆の意思を示した。俺も同じ心だ。

よくお金持ちが使つてそうな部屋の中。そこには壁に飾り付けられたモール。部屋のある場所には天辺にキラキラ光る星の着いたクリスマスツリー。ここまではどこでも見れるような普通の飾り付けだ。まあ、クリスマスツリーはないかもしれないけど…

それと丸テーブルの上にはターキーとその他の簡単な惣菜。何かの人形が乗つたクリスマスケーキ、それに何かの飲み物の瓶がある。言つてしまえば凄く豪華なディナーだ。

「これ、作るのに大変だつたわ…」

「そうだよねー、でも楽しかつたよね」

「うん、そうだな」

改めて見てみると拘ったような形跡がすっかりとある。ツリーの下にはプレゼントが置いてある。これは空箱だろうか？ それとケーキの上には…俺？

「あ、それはですね。私達が本人に似るように砂糖菓子で作ったんですよ」

「へえ…すごいな…」

じーと皆のを見てみる。人形はそれぞれ特徴を捉えている。幸平は愛くるしく、真琴さんは短いショート。銀央さんは短いとも長いとも言えない少しふわっとした黒い髪、翔一は特徴のある金髪。穂奈美は長くてスラっとした髪の毛。そして俺は…

「なあ、こんなに髪の毛ツンツンしてる？」

俺は髪の毛を棘のように尖らせていた人形だ。しかもよくみると描かれた口が凄い人相の悪い感じになっている。…俺ってこんな感じなのか？

「あ、はは…それ作ったの穂奈美だよ…」

「どう？上手いかしら？」

「とりあえず旨そうだ」

駄洒落で返して俺は落ち込む。周りからあんな風に見られていたなんて結構ショックだ。ポンと穂奈美に肩を叩かれた。

「Good Luck!」

やけに流暢な発音で俺の心を抉った。落ち込み度が増してきたので

流石に穂奈美は慰めてくれた。

「大丈夫、あなたは十分魅力的よ」

「……」

照れとさつきまでの扱いでどう返事したらいいか全くわからなかったが。

「芳樹、いつまでも落ち込んで無いで食べようぜ？」

翔一は皿を持ってきて俺に渡してテーブルに連れて行った。

「では、幹事は私がやらせていただきます」

銀央さんは瓶に入った液体：ジンジャーエールだな。それをグラスに入れた。俺も瓶を掴み適当なグラスを取り、その中に注いだ。隣にいた穂奈美と幸平に渡して幸平はその瓶を受け取り真琴さんに注いでいる。翔一は銀央さんから注いで貰ってる。これで全員グラスに注がれた。

「それでは…今日は明一杯楽しみましょう！乾杯！」

『乾杯！』

お互いにグラス当ててをカチンと言う音を立てて少しだけ口にする。やはりジンジャーエールだった。

俺はまずターキーを取った。こんがりしてて肉欲《という名の食欲》をそそっていて食べたくなったからだ。

「いただき！」

「うわ！人の皿から肉を盗るな！」

「いいじゃない、ケチケチ言わないで」

ターキーを盗ったのは穂奈美だ。珍しくお茶目な事をしてくれる。

「おら、返せ！」

「ふあめよ、もうふちのははだはら（訳：だめよ、もう口の中だから）」

俺は穂奈美から取り返す事を諦めてもう一度取る。そして誰にも取られないうちにがぶりと一口。

「これ、醤油？」

「…焦げ醤油つて所よ」

口の中を空っぽにした穂奈美が答えてくれた。そういや、さっきから幸平とかの声を聞いてない気がしたので意識をそっちに反らす。

「ほら、幸平。アーン…」

「ンムツ…美味しいね」

「そう？ふふふ、幸平に喜んでくれて嬉しいよ！」

「じゃあ、僕もお返しね…アーン」

（甘いなあ…）

そしてそのまま翔一と銀央さんの方へ意識を向ける。

「はい、翔一。食べて…」

「えーと…これって緋奈の口に挟まれてる鳥肉を食べればいいの？」

「ん、ん（口にターキーの切れ端があるため話せない）」

「…いただきます」

「ンムッ……」

(甘すぎる……)

周りの友人達のバカップル振りに呆れる。他人の目を気にしなくなるとうとうなるのだろうか？

「ああはなりたくないな……」

「そうね……」

同意してくれた穂奈美。絶対にこうはなりたくない。人前でこんな事を……だったら2人きりだったらいいのかという話ではない。とりあえず、この甘すぎるのが嫌なのだ。

そんな目の前の現実の酷さに反逆しているとクリスマスケーキを思い出す。

「……ケーキ食べる前に甘いもので一杯になりそうだ」

もはやケーキが食べれるか心配になってきた。

その後、どうにかケーキを食べて残りの上の部分にあった人形はどうするのかわたという話になった。これを自分で食べるのはもったいないし……

「芳樹、私を食べて」

「きゃー！穂奈美、大胆！」

「ベッドお貸ししましょうか？」

「そつちじゃない！」

穂奈美は大声で否定して穂奈美の人形を俺に渡してきた。

「芳樹、私（の人形）を食べて」

「あ、ああ。そういう事な。貰うぞ。俺のもやる」
「ありがとう」

俺はどうしようかと迷って頭からがぶりと行った。見ると首から上がなくなっており、悲しくなる。

「甘いな」

「甘いね」

「甘いわ」

「甘いです」

お前らには言われたく無い…そう思った。

「じゃあ、皆さんが持ってきたプレゼントを交換しましょう？ありますか？」

すると皆は個々にプレゼントを取り出した。俺みたいに薄いものだったり幸平みたいに大きいものなど沢山ある。

交換方法はプレゼントに番号を付けさせてその番号の書かれた紙をくじにして引いた番号を貰う…というモノだ。

俺はくじを引きプレゼントが手元にきた。

「じゃあ、開けよう！」

真琴さんのその一言で皆は一斉に開ける。

「このマフラー誰かしら？」

「それ俺」

マフラーを送ったのは翔一、受け取ったのは穂奈美だ。

「このしおりは誰？」

「それは俺な」

しおりを渡したのは俺。一枚だと心苦しいので複数枚あげている。後は上げると穂奈美は手袋、真琴さんはお菓子の詰め合わせ、翔一はマフラー、幸平はぬいぐるみだ。

んで、話してない銀央さんのプレゼントを俺が貰ったんだが…

「……」

入ってたのは下着…それも女性ものだ。赤と白の網レースだ。これ、向こう側が透けて見えるから勝負もののやつだろう。

「…これを俺に履けと？」

「いえ、穂奈美ちゃんにあげてください」

そう言って会話から外れる。…手には下着、目の前には穂奈美。考えると凄い光景だ。

「…履いてくれるか？」

「勝負の時だけね」

俺と穂奈美は奇妙な約束をした。

そして会の終盤。殆ど食べ尽くして、後は飲みながら話してるのだ

が…

「うふふ…よしきー」

後ろで全体重をかけて俺よりかかる穂奈美。穂奈美からは変な匂いがする…

「って、誰だ！穂奈美に酒を飲ませたやつは！」

すると銀央さんが頭を下げているのを見た。恐らく間違えて混じったのだろう。しかし…

「よしきー…けっこん」

「こらこら、ワンステップ飛ばしてる」

「そうだったねー、子供が先だね！」

「ブッ！」

飲んでたジンジャーエールを嘔き出す。こいつは酔つと絡んでくるのか…一つ穂奈美について学習した。

会がお開きになり俺は半分酔った穂奈美を連れて帰る。赤尾宅に着くと部屋まで運んでくれと頼まれたので望み通りに叶えさせる。

「芳樹…頭痛い」

「いいって、早く治せ」

穂奈美は正気を少し取り戻してくれた。さっきの絡み酒を暴露したろうかと思っただがやめておく。

「クリスマスプレゼント、ここに置いとくから」

「ありがとー…私もあるからジャケットのポケットを開いてー。そこに入ってるから」

俺は失礼してポケットの中に手を入れる。するとチャラとした音が聞こえてネックレスが取り出された。

「俺からもな…はい」

俺は指輪の着いたネックレスを渡す。今は寝てるため、枕元に置く。

「ありがとな」

「うん…すう…」

返事をする。穂奈美は眠り出した。俺はそれを見て頭を撫でて幸せな気分を堪能して自宅へ帰る事にした。

来年もクリスマスパーティーをするのか今から楽しみでしょうがない。

雑なる聖音（後書き）

次は31日に更新です！

除夜の音

12月31日：世で言うとお晦日だ。今はその昼間3時ごろ。大掃除は昨日までに終わらせていたので今日はただボーっと過ごすだけ……だった。穂奈美が俺の家に来るまでは。

「で、もうギター弾かないの？」

「恥ずかしくて弾けねえよ」

穂奈美は防寒装備の下にスウェットとロングスカートでやってきた。俺は翔一から提示された曲を耳コピしている所だった。五線譜紙にこんな感じじゃないかとギターを弾きながら楽譜を作っている所だった。するといきなり部屋に押しつけてきたのは穂奈美。合鍵を作ってしまったので出入り自由なのだ。本当、やらかしてしまった。俺にプライバシーというものが全てなくなった瞬間だった。

「前にライブで笑顔で弾いてたわよ？」

「ライブで大勢の前で弾くのと一人の前でやるのとは大きく違うんだよ」

俺はギターをスタンドに立てかけて穂奈美を見据える。

「で、今日は何をしにきたんだ？」

「何とお言葉ね……暇だから来たのよ」

「だったら美弥ちゃんと遊んであげればいいのに……ああ、そうか」

「そうよ、美弥は受験だから」

美弥ちゃんが受験だから家で勉強でもしてるのだろう…だからうちに来たと言えるだろう。

「そういう事だから暇だから」

そう言うとベッドに腰をかける。と、何か思い立ったように立ち上がりベッドの下を探り始めた。

「…何をしてるんだ？」

「何かいやらしグッズは無いのかと」

もう…捨てられてるから無い。捨てたのは目の前の本人なんだけども。それでもあると思ってるのか未だに手をガサガサやり続けている。

「あら…無いのかしら…」

次は体を伸ばして腕も伸ばす。すると腰を上げてしまっただけで…

(…やつべえ)

太もが見えそうになる。ロングスカートだからあまり見えないけど…思わず俺は鼻を抑える。

「ねえ、どこ？」

「押入れ…え？」

すると穂奈美は押入れを探り出してガサガサすること少々、穂奈美はある本を取り出してくる。

「…はあ」

俺はため息しかつげなかった。その本をパラパラめくる。

「凄い趣味ね…私にもして欲しい？」

「…勘弁して」

その本を穂奈美の鞆に突っ込むと俺の本棚を探って漫画を持ってきて読み出す。

(こいつに隠し事できないな…)

俺は諦めてイヤホンを耳に突っ込み曲を流す。音だけだがリズムと音程だけは分かるだろう。五線譜紙に書き留めようとする。

「…ねえ、芳樹？」

「あん？」

俺はイヤホンを外して振り返る。

穂奈美は漫画を読むのをやめている。

「私も聞いてみたいんだけど…」

「これか？」

「うん、興味があるわ」

俺は穂奈美にMP3プレーヤーとイヤホンを渡す。すると片耳だけはめて俺に片耳の分を渡してくる。

「…何だ？」

「あなたも聞くのでしょうか？」

「…いや」

自ら恥ずかしいシチュエーションに突っ込めと？片耳同土イヤホンをはめてどこぞやのバカカップルの真似をしると？

「俺は別にいいよ」

「そう言うわけにはいかない…わっ」

「どわっ?!」

俺は何も抵抗が無く穂奈美に引つ張られてしまった。このまま行くと穂奈美を押しつぶしそうになる…

(くっそ！)

俺は力を入れて穂奈美と俺の位置を入れ替える。ベッドに落ちた時には俺が穂奈美の下敷きになった。

「…穂奈美、いきなり何をするんだ」

「何って、芳樹が嫌がるから…」

そう言うのと穂奈美は体を上げた。格好としては穂奈美が俺を押し倒してる感じ…相当まずい状況だ。

「…これいいわね」

そう言うすとすんなり体をどかして俺も立たせて穂奈美の隣に座らされた。

「観念しなさい…はい、イヤホン」

「…はい」

俺は諦めて穂奈美と一緒に音楽を聞くことにした。再生ボタンを押して流れ出すのは俺が好きなFreedomの音楽：を流す前にこっそりとプレイリストで流した。そうすれば色々な曲が聞けていいかなと思っただからだ。何曲か聞いたあたりから穂奈美は船を漕ぎ始めた。

「眠いのか？」

「そうね…寝ちゃおうかしら」

「とりあえず無防備に寝るのはやめてくれよ？」

それから2分位：穂奈美は俺の肩に体重をかけて寝てしまった。寝息をたてる度に微弱に大きくなったり小さくなったりする胸：上から見ると中々大きい事がわかる。それに触れたいと言う邪な考えが浮かんだが流石にやめる。耳からイヤホンを外してやると俺もつられて眠くなってきた。

（あ、やべえな）

俺の眠気には2パターンあり耐えられるものと耐え難いもの。今回は後者だ。

とりあえず風邪をひかせてはいけないという気持ちがあったのでベッドに寝かせて…俺も一緒に寝てしまった。

俺は柔らかい感触に塗れながら目覚めた。目を開けるものの暗くて見えない。俺は口を動かして手で触ってみた。

「きゃわ！くすぐつたいからやめて」

開放されて見ると俺がいたのは穂奈美の胸の中。なるほどな…

「穂奈美…寝てる間に何かした？」

「するわけ無いわ…」

時刻を見ると午後6時を回っていた。穂奈美は7時から年越しそばを食べるからうちに来てと言われて連行される。ついでに穂奈美はFreedomのアルバムも貸してくれと言われたので貸すため持っていく。

「こんばんは…」

「お母さん、ただいま」

パタパタと同じようにやってくる佐知子さん。入って入って！と言われて俺はリビングに通される。中には単語帳を持っている美弥ちゃん。俺が入ってくるのを見ると見るのをやめて俺の所に来た。

「こんばんは、芳樹兄！」

「こんばんは、美弥ちゃん」

なでなでと思わずしてしまつ。そんな年頃では無いだろうが顔を赤らめて嬉しそうな顔をしている。

「はい、年越しそばできたわよ」

後はそばを茹でるだけだったのだろう。俺が穂奈美と美弥ちゃんです話している間にそばがやって来た。それでは…

「いただきます」

パクリとひとつまみ。ツルツルとそばが口に入ってさっぱりしてて美味しい。

「そういえば、芳樹くんご両親は？」

「今は海外で会社の指導をしています。母も付いて行きました」

まあ、簡単な説明だろうな。でも真実は真実だ。あの親ども…

「ごちそうさまでした」

「お粗末さまでした。今日は泊まりなさい」

有無も言わせないで俺に泊まれと言った佐知子さん。俺は嬉々とした穂奈美にリビングのソファに座らされた。

「今年も終わりね…」

「なあ、早いよな」

「濃密だったからね」

思わずしみじみとしてしまう。その後、普段以上に話した。うちのクラスの誰それが先輩と付き合ってるとかそういうミスターな話だ。

「で、美弥はうちの狭丘学園を受けるみたいなの」

「へえ…じゃあ来年は先輩だな」

俺らが話してる間、除夜の鐘が鳴り響く。たまたま付けたテレビでは毎年年末にやってる音楽番組を傍目にまだ話し続けた。

そしてそれが終わり後はカウントダウンで新年を待つだけだ。

「今年はありがとな」

「私こそ…ありがとっ」

穂奈美は顔を俺の頬に寄せて柔い感触を押し当てて来た。

「少しぐらいなら罰当たらないわよね」

「…あゝ」

そして除夜の鐘108回目になるのが聞こえる。

「今年もよろしく」

「私こそ…よろしく」

除夜の音（後書き）

さて、年末最後となった更新…いつになったら進展するのだろうか。最近、自分で書いてて不安に思えます。一応、予定は組み立ててあるんですけどね…

それは置いていて…えと、ソノリテイを読んでくださってる方ありがとうございます。これからも頑張るので来年もまたよろしくお願
いしますm()m

祝福歌

「芳樹…起きて…」

そんな声が聞こえた。目を開けると目の前に穂奈美がいた。

「ああ…おはよう」

何処かのコメディみたく叫んだりはしない。昨日、穂奈美と夜中騒いでいて疲れて俺はそのまま寝てしまった。…そうだと思う。

「可愛い寝顔だったわ」

「…男に可愛いとかはだめだろ」

俺は目の前にいる穂奈美を抱きしめる。理由は何と無く…愛おしくなったから。

でも、不思議だよな。俺と穂奈美付き合って無いんだぞ？

「暖かいわね」

「お前もな」

そう言って少しだけ強める。正月早々幸せだ…

「お姉ちゃん、起きて」

ガチャリとドアを開けたのは言わずもがな。美弥ちゃんだ。

「おはよ…え？」

ベッドまで来て気づいたのだろう。ただ状況が状況だ。年頃の男と女が同じベッドに居て更に抱いている…小さな子供じゃない限りこのシチュエーションは勘違いするだろう。

「えつと…えつと…」

しどろもどろする美弥ちゃん。そりゃそうだろう。いきなり身内が大人になったと（勘違い）してるのだから。まずいまずすぎる…

「美弥?!こ、これはね!?!」

「お、お姉ちゃん?!わ、私お母さんに遅れるからって言うておくから!」

ボタンと扉を閉めて駆け下りて行く音を立てる美弥ちゃん。しかも下からは『お母さん!』と言う声も聞こえてきた。

「…マズイわ」

「そうだな…」

新年早々幸せになり…後先が不安になった。

リビングに降りて佐知子さんに新年の挨拶をする。

「明けましておめでとございます」

「ふふ、おめでとご」

俺の方を向いて挨拶をすると再び何かをしだす。多分、雑煮だろう

…何から何まで本当に助かる。その意を伝えると

「別にいいのよー！将来のお膳立てだから」

意味不明な言葉を残していた。

さて、俺と穂奈美が座ると赤い顔をした美弥ちゃんがリビングに入ってきて俺達を見てビクツとなると穂奈美の隣に座った。

そして佐知子さんはお雑煮を作り終えてテーブルに持ってきた。

「さあ、食べましょう」

『いただきます』

俺は手を合わせてお雑煮を食べ始めた。さらにテーブルにはおせちを置いた。俺は小皿の上に伊達巻と栗きんとんを取って食べる。うん、美味しい。

「で、芳樹くん？」

「はい？」

俺はその間も餅を口に運ぶ。口で噛み飲み込む。そうしてお茶を飲もうとした時、

「私の娘はどうだった？」

「ぶっ！」

佐知子さんの一言で俺はお茶を吹き出した。穂奈美は箸を落としている。

「お、お母さん?!」

「さ、佐知子さん、な、何を?!」

「だって…一緒に寝てたのでしょ？だったら、やる事は一つじゃない」

そう言つて親指を人差し指と中指の間に入れる。その意味が分かつた穂奈美は俯く。

「…本当にしてないみたいね」

つまないと呟くと食事を再開した。

食べ終えて片付け。穂奈美はこの後初詣に行くそうだから俺はそれに着いて行く事にする。
そして去り際、

「うちの娘は耳と首が弱いから覚えといてね」

今は非常にどうでもいい情報を与えてくれた。心の中で試してみた
と思ったのは棚に上げておいて。

初詣に訪れたのは響諒神社^{きょうりやうじやう}。穂奈美の家から駅に行き、隣の駅で降りて徒歩10分ぐらいの距離。つまり歩くと微妙に遠くて電車で行くと近い距離。

「…人が多いな」

俺は視界の全てを人ごみで埋め尽くされている。これじゃ穂奈美とはぐれそうだ。

「行くぞ、穂奈美」

俺は穂奈美の手を握り歩き出した。手を握ったのは逸れるとマズイから。別に握りたいからとかでは無いけど…後から理由つけると何か言い訳ばいな。

まあ、それは捨て置いて人の流れに乗って賽銭箱を目指す。

「ねえ、芳樹？」

「んあ？」

いきなり穂奈美は何かを尋ねてきた。何かは今から聞くのだが…

「私、妊娠したわ」

途端、周りの視線がグルリとこっちを向いた。「若いねえ」だの「今の高校生って…」とか「坂上が…」と言う声が聞こえた。つか、最後の俺の知り合いだろ。

「ほ、ほ、穂奈美?!俺何も知らねえぞ?!」

「…責任取ってとは言わないわ。私が1人でこの子を育てるから…」

とても愛おしそうに自分のお腹を撫でる。「彼氏、子供の事認めないよ」とか「男ってサイテー」だの「よっしゃ、早速委員長に…」って、最後の待って…

「…勿論嘘だけど」

すると周りから何だ…と言う声がすると興味が無くなったのかこっちへの視線が無くなった。

「紛らわしい事をするなよ…」

「あら、分からないわよ。私が理性を弾けさせて芳樹を寝てる間に襲ったかもしれないわよ?」

「その時はきつと俺は起きてる」

と言つかそこまでされれば流石に起きるだろう…そう思う。

話してる間にもう賽銭箱の前に着いていた。前に三組ほどいる程度だ。

「本題に入るわ」

「何だ?」

残り2組。俺は15円取り出す。穂奈美は既に取り出してるよう得手の中でじゃりじゃりと音を立てさせていた。

「私、芳樹の事好きだわ」

突然の告白に驚く…事はなく俺は冷静に受け止めた。穂奈美が俺の事が好きなのは分かってるし、俺も穂奈美が好きなのはあいつも知ってるだろう。だから…

「俺も好きだぞ」

俺は賽銭箱の前に立ちお金を投げ、一つだけ願った。

「芳樹は何を願ったの？」

賽銭箱の列から離れて近くの木の下にて小休止。俺は先に出たので近くに売ってた甘酒を買って穂奈美に手渡した。

「内緒だ」

「私はね…」

甘酒をこくりと喉を鳴らして飲んで言葉を止めた。飲み終えると言葉が続けた。

「今日の願い事は…こ、告白できたらって思ってたんだけど…」

「思わず口にしてしまったと？」

「そうよ、だから急遽願いを変えざるを得なかったわ」

「だろうな、俺も同じだ」

あそこではぐらかしておけば良かったかもしれない。けど、俺はこれでもいいと思う。何のロマンもへったくれもなかったが俺達としては上出来だろう。

「まあ、いいわ。どうせおしえてくれないんでしょ？」

「そうだな。恥ずかしくて無理だ」

俺はそう言っつて穂奈美の手を取る。

「おみくじとやらをやるぞ」

俺は巫女さんにお金を渡すとおみくじを引いた。穂奈美もお金を渡すとおみくじを引く。後ろが並んできたので俺達は脇によける。

「一緒にあげましょ」
「ああ」

せーので開けるとまずは吉凶を見た。これは確か真ん中の方にあつたよな…

「お、中吉だ」

「私は大吉」

そう言つて俺に見せてきた。すごいな…

すると穂奈美は俺のくじをひつたくつて穂奈美のくじを俺に渡してきた。読めという事か？

手に取りさつと目を通す。恋愛の部分を見ると遠慮するな。逃げられると書いてあつた。一瞬ゾツとした。

「はい、芳樹」

俺は返してもらい俺は穂奈美に返した。

「帰ろうか、俺の彼女」

「帰ろう、私の彼氏」

手を握り、俺達は赤尾宅に帰つて行つた。

因みに後日談。

俺は帰つてから佐知子さんに付き合う事になった旨を伝えた。すると佐知子さんは喜び美弥ちゃんは嬉しそうに笑つた。

「で、どんな風に告白したの?!」

目を輝かせて聞いてくる美弥ちゃん。

そして何も言わずにふふふと笑ってる佐知子さん。

俺は穂奈美と目を合わせて…ため息を吐いた。

祝福歌（後書き）

明けましておめでとございます…
やってみたかった新年更新の新年回。

挨拶は置いといてようやく結ばれました。告白の言葉は前々から決めてましたが…どうですかね。告白って今はメールとかになります
が僕は直接の方が伝わると思っています。否、絶対に伝わります。
って、何をやってるんだか…
これでソノリティは終わり…ではなくかなりしばらく続きます。暇
な時に見てくれたら嬉しいです。

以上、いつもの倍以上おしゃべりな佐久間でした。

親愛な歌

冬休みを終えて俺は幸平たちにとある事を話した。

「俺と…穂奈美付き合う事に…なったから」

それは交際宣言。内緒にするという選択肢もあるのだがこいつらに隠し事をするべきでは無いと思ったので話す事にした。

「おめでとうございます!」

「ようやくだね」

「遅えよ!」

「芳樹、よかったね」

それぞれの反応を見せてくれた。今は昼休み。皆で飯を食べようと提案して俺のクラスに呼んだ。

「穂奈美、何て告白されたの?」

「えっ?!」

するともじもじしながら俺の顔を伺ってきた。俺はアイコンタクトで『言わなくていいから』と送る。さて、伝わっただろうか?

「わ、私が…」

そうして更に赤くなって俯く。どうやら伝わってなかったようだ。俺は決まりが悪くなり俯いた。勿論、恥ずかしいから赤くなってる…だろう。自分の事なんか分からない。

「え、芳樹からじゃないの？」

「やっぱ、ヘタレ」

「うっさい」

俺は勝手な事を言い出した幸平と翔一に突っ込んで話を切り上げさせる。

恥ずかしいから嫌だ。

「じゃあ…詳しく聞こうか？」

わきわきと指をうねらせながら近づくと真琴さん。

俺と穂奈美は目を合わせて一緒にため息を吐いた。

放課後、俺は穂奈美を誘って買い物とシヤレこんだ。とりあえず家の電球が切れたから買いたいと言つのが1番の理由。後は…穂奈美と居たかったから。

「珍しいわね、芳樹からデートのお誘いなんて」

「そうか？」

「今までデートじゃないって否定してたわよ？」

「あ…」

確かにそうだ。あの時はどうしても恥ずかしくて穂奈美と出かける事を『デート』という単語を使わずに『お出かけ』とくくりつけていたのだ。

「まあ…心変わりが有ったということだ」

「つまりはこう言う事ね」

ぎゅっと俺の右腕に抱きついてくる穂奈美。とても嬉しそうにしている。

俺は返事に困ったので穂奈美に笑いかけ歩き出した。目指すは電気量販店だ。

電気量販店に着き、電球コーナーに着く。穂奈美は見たいものがあると行って何処かに行った。

「もうこの間みたいにナンパされないで」

去り際にこんな事も言ってきた。ナンパ…多分丸谷さんの事だろう。そっぴや、すっかり忘れていた。どうしたのだろうか。

まあいいやと考えを区切りいつものやつがあるか確認をする。

2、3個見て見つけた。その隣にはLED系列も置いてあった。最近は異様にメディアが太鼓判を押しているが…と思うがいつもの一番安定すると思っでいつもの電球を手にとった。

俺は穂奈美を探しにあちらこちら歩いた。すると穂奈美はマッサージ機のコーナーにいた。

「あ、芳樹。あつたのね」

「ああ…何を見てたんだ？」

「マッサージ機よ…最近肩こりが酷くて…」

それはお前が胸が大きいからだ…とは口が裂けても言えない。

「こんなのはどうかしら？」

ずいっと目の前に出してきたのは電気マッサージ機…これはいいけど、振動部分が丸くなってるアレ。危険な香りしかない…

「…や、やめておいた方がいいと思うぞ」

冷静に切り替えそうかと思ったが意外と心は動揺していた。どもつて尚且つ言葉がすごく変になった。

「何を想像したのかしら？」

ニヤニヤ…これは絶対に分かってやってるパターンだ。勘弁してくれ…

「帰ろうか」

「いやよ、マッサージ機を選ばなきゃ」

「それはやめてくれ…」

やばいから「それやばいよ。それを見ると変な想像が膨らむのは多分…うん。何か嫌になってくる。

「やばい？何が？」

「…言葉に出てかのかよ…」

俺は顔を覆った。もう見ないでくれ。俺は今から自己嫌悪の世界に向けて出発する。

「ねえ…」

穂奈美は耳元で囁いてきた。もうこいつは小悪魔じゃないだろうか？ 凄いドキツとしてしまう。

そんな俺の内心を他所に話は進む。

「ちゃんと…いつてくれたら…その、してあげてもいいよ」
「…?!」

俺はびつくりして穂奈美を見た。頬が赤くなってるのがよく分かる。これはあれだろうか、ある意味のお誘いってやつだろうか？

とは言え流石に嫌なので俺は『俺の肩のマッサージしてくれるの
だろう?』と伝えようとして穂奈美の耳元に口を近づけた。耳に触
れたらビクツとした…これは試す価値がありそうだな。それはさて
おき…

「(自主規制ワード!)」

…しまった。思ってる事といたい事を逆に言ってしまった。どう
しようかと思ってるにニヤニヤした顔の穂奈美…羽目やがったな
…ちくしょう。

「まあ、いいわ。約束だから…」

そつ顔を赤らめておっしゃる穂奈美さん。

一瞬、ドキツとしてしまった。って、俺完全に変態じゃねえか！

「おら、決めたなら帰るぞ」

手を掴みレジに急ぐ。別のマッサージ機を取って。

「え、え、そんなにして欲しい？え、ええ?!」

どう言う訳か、穂奈美は凄く混乱してた。

…帰ったら楽しみ。

「あー…気持ちいい…」

俺の家に戻り俺は穂奈美にマッサージをして貰ってた。帰った当初、俺が言った自主規制ワードの事をやるのかと思っていたらしく俺は慌てて否定した。

…黙ってればやってくれたのかというのは心で少しだけ思ってたりました。

「お客様、気持ちいいですか？」

穂奈美はマッサージ師の気分でノリノリだ。俺は完全に体を預けきっている。

十分ほどやって貰った後、俺も穂奈美になってあげることにした。

「あふっ…あっ…」

どんだけ肩凝りしているんだろうか。肩を揉めばゴリっとそんな感触がした。そつちに意識を向けないと穂奈美の艶っぽい声を意識してしまうから無視し続けている。そんな事を考えてるとゴリっと揉

んでしまい

「あぁん!？」

…勘弁していただきたい。

「ふう…ありがとう」

マッサージをほとんど終えて穂奈美は凄く気持ち良さそうだ。クタクツとしている。

俺は最後の仕上げだからと伝えて肩に手を置く振りをして顔を穂奈美の耳元に近づける。ここまで来たらやる事は一つだ。

「ふう…」

「ひゃあぁあぁ?!」

耳に風を送る。すると思った以上の

反応を見せてくれて何とも言えない表情で睨んでいる。

…ちょっと待て、これってやってる事バカップルって分類されないか？

乙女純愛歌（前書き）

相変わらずマイペースな人達（作者含む）

乙女純愛歌

「え、三月末と四月の新入生歓迎会でライブ？」

二月に入ったとある日。俺は翔一に呼び出されて龍と真汰が集まった。俺達も出てもいいと言う事が部長から伝わった。出れる場面が増えた所で嬉しくなって龍とニヤニヤしていた。

「つーわけで、練習しようか」

「いつやるんだ？」

「んー…今日空いてる人？」

龍が提案するとみんな手を挙げた。どうやら行けそうだ。

「おっし、芳樹。スタジオの予約宜しく！」

「ああ」

俺は携帯を出してアドレス帳に登録してあるスタジオの電話番号を出す。数コール後、係員の人が電話に出た。

「あ、スタジオの予約したいのですがー」

「はあ…」

今私は銀中央宅にいる。そこで私はため息を吐く。原因は私の恋人…

坂上芳樹にある。

「私もため息を吐きたいです…」

そう言っただけで同意してくれたのは緋奈。緋奈の恋人の紗東翔一もウチの芳樹と同じくバンドをやっただけ…今日はバンド練習に行った。いやね、私も同じ部活に入ってるし緋奈と他の女の子を誘ってスタジオオに行く。

でも、今日行かなくていいと思うわ。だってー…

「何でバレンタイン前日に出かけるのかしら。ウチの芳樹は」

「私の翔一もですわ」

そしてお互いを見て再びため息を吐く。日付は乙女の聖戦の前日、夜の6時を指していた。

「穂奈美と緋奈は大変だねえ…」

目の前の真琴は私達を見て同情の目を見せてくる。彼女の恋人は家で寝てるらしい。

「私は昼から疲れたわ…」

の割には異様に艶々してる真琴さん。どうやら昼間から一回戦はして来たらしい。

羨まし…くは無いけど、仲がいいと言うのはよく分かる。なのに芳樹は『俺、スタジオ行ってくるから宜しく。愛してるよ、ハニー』
注：最後のは穂奈美さんの妄想です。』とか言ってギターを担いで出て行ってしまった。バンドに関しては芳樹の副業みたいなモノだから仕方ないけど…もう少しこっちも構って欲しい。

「浮気とかしてるわけじゃ無いからいいのですが…」
「それは分かるわ」

芳樹は浮気できるほど隠せないし起用では無い。頭はいいけれど変な所で抜けている。そういう人なのだ、芳樹は。

「「はあ…」」

私達は再度溜息を吐いた。

いつまでも悩んでると夜が更けていくので早速作業に取り掛かる。
勿論、取り掛かる事は一つ、チョコレート制作だ。

「たらららたつたん、たらららたつたん」

「三分では作れないわ」

真琴のポケに突っ込む。目の前にはミルクチョコレート5個。これを溶かして小さなハートの型に流し込むという単純な事にした。

「さて、やりましょうー！」

緋奈は張り切って腕まくりをした。私も持ってきたエプロンを取り出して上から羽織る。真琴はさつきからエプロンをしている。

「行こう、女の聖戦へ！」

真琴のテンションは最早おかしいようだ。
早速私達はチョコレートを取り出して砕き始めた。まずはチョコレートをドロドロにしなくてはいけない。

「お、重いわ…」

5枚入ったチョコレート。一気に入れたものだから砕くのに時間がかかる。なので取り出してまな板の上で砕いて貰った。

「〜」

緋奈は鼻歌を交えながら砕いている。危なかつしさを感せず、余裕があるように感じる。強者の貫禄ってやつなんだろうか？
しかし、一分後―

「ああ！チョコレートが！」

緋奈さんの手にはべっとり着いたチョコレート。そっだ、気温が高いから…

「真琴、ボウルの中にチョコレートを…！」
「遅い…」

不機嫌そうな声がして見てみると同じく手をべっとりさせている真琴。

どうしてだろうか…先が凄く不安になった。

何はともあれ、チョコレートを全部溶かしドロドロにした。次は工夫を加えてピーナッツを加えてみる。

「じゃあ、これを適当に割りましょう」

私はまな板にピーナッツを乗せてありっただけのイライラをピーナッツにぶつけた。

『殺生な?!』

そんな声が聞こえた気がする。私は次々にピーナッツを潰していく。段々楽しくなってきた。

「…穂奈美さんから凄い殺意を感じます」

「私もよ…寒気が」

周りは怯えているが構わず潰し続ける。

全て潰してザラザラと溶かしたチョコレートに入れて均等になるように掛け回す。均等になったところで手分けをして金型にチョコレートを流し込む。

「おっと…」

真琴が零しかけたけど大丈夫だ。後は冷蔵庫で冷やして固めるだけ。

「今日は泊まって行ってください。もう遅いので」

時刻を見ると10時を過ぎていた。今から帰ろうとすれば帰れるがもう少し2人と話していたい。

私と真琴は目を合わせて了解の意を伝えた。

「今日はガールズトークとやらをできるわね」

「いつもしていませんか？」

「あれはどつちかと言うと不満が溜まった主婦な気がするよ……」

片付けてエプロンを脱いだ。洗い物は私と緋奈でやって真琴は周りの片付けをしてもらった。で、話しながら片付けてたので時刻はもう11時を指していた。

「お風呂に行きましょう」

緋奈に連れられてお風呂に向かう。

「あ、私着替え無いわ」

「私も」

「大丈夫です、こちらで用意しますから」

それならと思ってお風呂に向かう。

服を脱いで籠に入れる。戸を開けると露天風呂みたいな風呂がそこにあつた。

「…凄いわね」

思わず私は慄いてしまう。同じように真琴もびっくりしていたようだ。

体を洗いお風呂に浸かる。

(ああ…気持ちいい)

私は目を閉じて風呂の温かさに心を預ける。ふう…

「隙あり!」

「え…きやつ?」

真琴が言葉を発すると真琴は私の胸を鷲掴みにしていた。

「うう…大きいなあ…」

「ふあ！あ、あまり大きいのはよく無いぞ？肩がすぐに凝るから」

「うるさい！勝者の言葉なんざ聞きたくないよ！おりゃ！」

「ふ、ふっ？！あ！」

そろそろやめていただきたいなあ…凄くくすぐりたい。

思ったんだけど…チョコにメッセージカードみたいなのを同封させてみようかな。うん、いい考えだからやってみよう。

でも…

「いつまで揉んでるの？」

「私が大きくなるまで！」

それは一生無理だと言っ言葉を飲み込んだ。

学校から帰ってくると穂奈美はとある小包を渡してきた。

「開けていいのか？」

コクリとうなづいたので開けてみると…何とチョコレートをが入っている。しかも可愛いハート柄。

「ありがとな！…ん？」

中に何か紙が入っている。俺は取り出してみる。

「ははっ！」

「笑うな！」

紙には単純に『K i s s m e!』と書いてあった。それが嬉しくなり俺は何も聞かないまま穂奈美の唇に重ねた。

「んっ?!む…ぷはっ、な、何をするんだ？」

「穂奈美が頼んだ事でしょう？」

なんともまあマイペースな俺達だった。

少年純愛歌

本日はホワイトデー二日前：先月穂奈美に貰ったバレンタインのお返しを探しに幸平とシヨツピングモールに繰り出していた。因みに穂奈美以外にも真琴さんと銀央さんからももらっている。それも考えなきゃな：それと翔一も同じく貰っているのだが銀央さんが『モノより翔一くんがいいです！』と言って翔一は拉致られた。明日にはミイラになつて見つかるかもしれない。哀れなり。

「ねえ、皆のバレンタインのお返し何がいいかな？」

「とりあえず誰にでも使えるモノかな」

正直、三者三様の趣味を持っているあの女の子達。趣味と性格が全く違うのによく仲良くいられるのだろうか？まあ、俺達三人も同じ感じだけれどな。

「誰でも使えるものねえ：アクセサリーとかは？」

「高くてダメだろ。それはお前は真琴さんにあげた方がいいぞ」

アクセサリーは大切な人へ上げましょう。と言うか幸平は真琴さん以外にあげたら大変な事になりそうだ。主に幸平の生命が。

「ふうーん：何だか知らないけどまあいいや」

納得していないが無理矢理理解させたらしい。まだその顔には難色を示している。

俺達は何を買うか迷いに迷い決めあぐねていた。さて、どうする？

「そついや真琴が『リボンを巻いた幸平!』とか言ってたなあ…」
「危険な香りが漂ってるなあ…」

危なすぎる。真琴さんは最近、幸平に対して変態的なテンションを持っている。文化祭の時に空き教室に連れ込もうとしたのもそれだろうか……発情期の猫かよ。
さらに迷いふとある事に気づいた。

(俺…穂奈美にプレゼントするの初めてじゃないか?)

誕生日は春と聞いたし俺と仲良くし始めた時期にはもう既に過ぎていたと聞いている。因みに俺も同じだが…まあ今は割愛。
とりあえず、今回は重要では無いのか?と気づいた。さて、どうする?

と目の前を通ったお菓子屋の沢山並べである詰め合わせセットが目に入る。

「なあ、幸平。義理はこれで良くないか?」

「んー?」

お菓子セットは四角い箱の中にお菓子がぎっしり詰まっているやつである。中身は分からないが…あの娘達の事だ、きつと喜んでくれるだろう。

「これにするか?」

「うん、いいね」

俺達はそれぞれ別のお菓子の詰め合わせを買った。

それからは幸平と一旦別れてお互いの恋人のプレゼントを探す事になった。俺は再びショッピングモールを歩く。アクセサリー、お菓

子、フラワーショップ、e t c . . . 服でも買おうかと思ったけど人に俺の趣味を押し付けたくないし、ランジェリーは…問題外だ。どこの変態だ。

そして歩いてるとある店が目に入る。そこで店の前に売り出しているモノが目に入る。

「…これいいかもな」

穂奈美に似合いそうな色を選んで

店員に丁寧に梱包してもらった。俺はそれを手に持って幸平と合流する。ほどなくして指定した合流地点…ショッピングモールの入り口に来た。

「見つかったの？」

「ああ、多分結構いいモノだな」

と言って俺はプラプラと自分のプレゼントを振る。芳樹も僕も見つけたよと言って見せる。

「まあ、明後日だね」

「ああ、明後日だな」

喜んでくれるだろうか？

…ダメだ、こんなに緊張するなんて…

「ありがとうございます」

「ありがとね、芳樹！」

穂奈美が何処かに行っているうちにどうにか2人に渡せた。いざ穂奈美に渡そうとすると緊張して体が硬直してしまう。

終いにはだ、手に何かを持って帰ってきた穂奈美に俺が何回もきよどつてるから、

「変人」

と一言だけ、的確に俺の心をえぐってくれた。それで少し心で泣いていると授業が始まった。

…絶対に次の休み時間に渡そう。そう思う。

そして穂奈美にどう渡すか試行錯誤しているとどこからか小さな手紙がやってきた。丸み帯びた字で芳樹へと書いてある。机に広げると『渡せてないな、ヘタレが!』と書いてあった。差出人は翔一。

「翔一いいいいい！」

俺は思わず大声を出してしまう。だが、忘れてはいけない。今は授業中だ。

「…坂上、顔を洗ってこい」

そんな呆れた声が聞こえた瞬間、チャイムが鳴り響いた。

適当に翔一を締めて放課後。未だに俺は渡せないでいた。

(告白はできてプレゼントは渡せないのか…？いや、告白は穂奈美からだっただよな…？)

もう俺の頭はぐちゃぐちゃだ。俺は少し残って頭の整理、穂奈美は先に帰って行った。つか、ごめん…

(とりあえず、何か飲み物を買おう…)

自販機まで歩き(歩き以外に何が方法があるだろうか)、コーンポタージュを買う。取り出し口から缶を取り出しプルタブを押し上げ飲む。

「あら、坂上くんじゃない？」

歩きながら飲んで階段の踊り場にたどり着いた時、丸谷さんが立っていた。相当久しぶりを見る。11月から見てないな…

「久しぶりだね…元気だった？」

「ああ、丸谷さんも…元気そうだな」

俺は缶を飲み干したが中に入ってるコーンが凄く気になるから取りたかった…けど、人の前でやると間抜けだからやらない。

「私、坂上くんにチョコレートをあげたかったんだけど…赤尾さんいるもんね？」

「いや、別に義理なら大丈夫だと思うんだが…」

実際、俺は穂奈美以外に真琴さんと銀央さんから貰っている。あの

中で女子同士の盟約でもあるのだが…詳しくは知らない。
しかし、チョコレートねえ…

「だからね、諦めたかったんだけど…気づいたんだ」

「何に？」

「…赤尾さんを消しちゃえばいいって」

その言葉を発した時、丸谷さんから笑みが消えて俺は寒気を感じ取る。え、今何で…？

「うふふ…今頃私のチョコレートを食べた赤尾さんはどうなってるだろうね？」

「ーっ!？」

俺は駆け出そうとした。勿論、穂奈美を助けるために。すると、グイツと制服を掴ままれた。

「何をするんだ?!」

「あのね…冗談だよ」

あはははと無人の廊下を木霊する。そして一気に空気が元の気温に戻る。

ゴメンねと一言だけ言って階段を降りていく丸谷さん。

「あ、白雪姫を忘れないで!」

「白雪姫？」

俺は何を言ってるか分からなかったが…教室に戻って帰る事にした。
次こそ、お返しを渡さねば…

「ただいまー、穂奈美？」

家に帰ると鍵が空いてるのとリビングが電気が付いてるのに気づき
て穂奈美がいる事が分かった。

「穂奈美ー？…寝てる」

穂奈美は机の上で突っ伏して寝ていた。隣には食べかけのチョコレ
ート。大方、食べてて眠くなってねてしま…った？

「え？」

俺は一気に青ざめていくのが他人事ながら分かった。チョコレートを
食べてて眠くなる事があるのか？

「まさか?!」

穂奈美が食べていたのはさっき何処かに行った時に帰りに持ってき
ていた小包だった。中の紙を見ると『おやすみ、赤尾さん』と書い
てある。

(あいつ!)

俺は怒りに覚えて警察に電話をしようとするが白雪姫の単語を思い
出す。眠っているお姫様にキスをしろってか？ふざけるな。

(いつでももしてやる)

俺は寝てる顔に唇を押し付けた。するとどうだろう？ 苦しみ出した穂奈美がいるではないか。

全てを悟った俺はずっと貪り尽くした。しばらくして湯でタコになった穂奈美が椅子の上で喘いでいた。

「で、どう言う事だ？」

その状態の艶っぽい穂奈美に尋ねた。

真相はこうだ。小包：チョコレートを貰ったのはたまたま友チヨコと言うモノのお返しだったらしい。で、たまたま見てた丸谷さんからかいのネタとして持ってきて、帰ったら眠かった穂奈美に出会った…と。

「俺、ピエロ？」

「そうね」

未だに赤い顔をしてる穂奈美だがさっきよりマシになってきた。

「まあ、いいけどさ…はいこれ」

やった！ スムーズに渡せた！ という余裕は無く気に入ってくれるかドキドキだ。

「何かしら…開けるわよ？」

「ああ、いいぞ？」

袋を丁寧に破って手にポトリと落とす。

「あら、髪留めね」

そう、俺が渡したのは髪留め。色は青でシンプルなものだ。穂奈美にこてこて装飾が似合いそうに無いと思ったからな。

穂奈美はそれをおもむろに付け始めてサイドポニーにした。

「似合ってるかしら？」

「うん、似合ってるけど…何でサイドポニー？」

「最近、芳樹の本で読んだから」

あの漫画か…少しだけ読ましてみたら案外はまっていたのを思い出す。以外とミィハーなのかもしれないと思った。

「もう一つくれたら芳樹の好きな本のヒロインの様にツインテールになるのに…」

「…やめて。俺がやだ」

何とまあ…いつまでもマイペースな俺達だと思っていた。

狂楽曲

この前の凄く迷惑な事件から一週間。つまりはもう三月末だ。そして学期末のライブも目の前に迫っていた。

(エフェクター、シールド、ピック、替えのストリングス後は…)

勿論、俺はライブの準備をしていた。今日はライブ一週間前をきつたある日の夕方。最後の大詰めで毎日スタジオを借りる日々で今月の小遣いが消えそうだ…

それはそうと何かをしなくてはいけない事を忘れている気がする。

(ま、大した事じゃないんだろう)

思い出せない事は大抵どうでもいい事かつまらない事だ。

戸締りを確認して家を出た。ギターを担ぎ直してエフェクターの入った鞆を籠に突っ込み、ペダルに足をかけて漕ぎ出す。冬の冷たい空気が手や首を覆う…

(っつて、さみいよ!?)

慌てて携帯を出して天気予報を開く。『狭丘市午後の天気。気温12、湿度64%』となっているのを確認する。もう四月も近いのに気温が低い気がする…いや、去年の三月の温度なんて覚えてないけれど。でも、そろそろ桜がいい感じになる時期だしもう少し暖かいのでは?と思う。やはり、環境が悪化しているからだろうか?

色々、悶々と考え続けて自転車を飛ばす事10分少々。いつも通うスタジオに辿り着いた。鍵を閉めてエフェクターを籠から取り出す。ドアを開けて待合所を見ると翔一と龍が来ていた。

「よ、寒いな」

俺は手を挙げて2人に挨拶をする。

「や」

「真汰はまだ来てないねー」

どうやら珍しく一番最後みたいだ。それよりも『や』と言った翔一の手があかぎれている。

「お前、手痛そうだな」

「そうなんだよ」

どうやら痛いみたいだ。翔一があかぎれを作ったのは左手の中指。あれはベース弾く時に痛そうだ。

「ハンドクリーム塗れよ？」

「ああ…緋奈に借りるかな…」

おいおい…銀央さんに依存しきってるなあ…かくいう俺もどうかとは思っただけだな。毎日ご飯食べさせて貰って、洗濯してくれて、掃除を手伝ってくれて…あれ、俺何もしてない…？

これってヒモ…では無いか。カラダは提供していないからな、うん。

(何考えてるんだ…)

二重の意味で落ち込んだ。

俺は空いてる椅子に座り、スタジオに入れる時間と真汰を待つ。後、10分ぐらいか？

俺はポケットからMP3プレーヤーを取り出してイヤフォンを耳にはめる。やはりお気に入りのFreedomを聞く。他にも沢山入ってるのだが結局このバンドを聞いている。

「お、翔一？Freedomか？」

「ああ」

翔一が話しかけて来たので俺は片耳イヤフォンを外して答える。龍は龍で何かを聞いている…まあ大方想像はつくけれど。

「聞かせてくれないか？」

「ああ、いいよ」

俺はもう片方の耳の方も外して翔一に渡す。聞いてない間、何をするか…

「あ、いや、片耳だけでいいや。ほれ」

そう言って翔一は右耳だけはめて左側のイヤフォンを俺に渡してくる。ああ…そういう事ね。

「ああ」

俺は左耳に付けて音楽を再生する。すると翔一は聞いた事があったのか鼻歌をしだした。翔一にとってこのジャンルはあまり聞かないから新鮮なんだろうな。

因みに俺はロックが好き、翔一はフュージョンというジャンル。龍と真汰はメタルが好きである。まあ、結局はロックと分類されるわけなのだが…まあこの話はいいよな。

「芳樹…」

後ろから女の人の声がしたから振り向く。今は片耳にイヤフォンをしてたからうまく声を聞き取れなかったが、何も聞いてなかったらここで気づいてただろう。

「…ほ、穂奈美」

穂奈美がそこに立っていた。

「ひ、緋奈」

翔一はその奥にいる人物に気が付いた様だ。なるほど…穂奈美達は新人生歓迎の方でライブをやるとか言ってたな。何か少しずつ練習は重ねてたらしく直ぐに動けてた。

現実逃避強制終了。今は目の前の穂奈美《現実》を見よう。何かを言いたげな穂奈美。その目には好奇心と…若干の悪戯な笑み。

「何よ…翔一君とそんな仲だったの?!」

「ええ?!」

そう来るか?!しかし、言われてみればなるほど。相合傘ならぬ相合イヤフォン。よくやってるのは電車に乗ってるカップルとかがやってるのを見た気がする。

「芳樹って、そういう趣味だったのね?!それとも翔一君が唆して

来たの?!」

「誤解を招くような発言をやめい!」

完全に笑っている。目がそう語ってる。しかし、それを冗談として受け取らない…否、冗談として受け取れない人が一名いた。

「え、翔一君…浮気ですか?」

「ひい?!」

黒いオーラを発しながら銀央さんがこっちにやってきた。俺もビビるし…穂奈美なんか青ざめている。翔一は…うん、何か死んだような顔だ。

「あれほど他の人に靡いちやダメと言いましたわよね…?」

「ちよつと待て!俺浮気してないぞ?!」

「浮気をした男の人は皆そう言うのです…!」

なるほど、確かにそうだな。男って何かしら嘘を付く時に否定をする気がする…多分。

そんな考えを起こしてる間にも銀央さんの翔一弄りがエスカレートする。

「あんなにしてはいけませんよと何度も注意しましたのに…ねえ」

「だから俺は…!」

「帰ったら二度とその女の所にいけないように私を翔一君の体に直接教えます」

これはある種の夜のお誘いではないか?その事を聞いてみた。

「お誘い何て生ぬるいものじゃねえよ…俺の事を絞り取るうとする

んだ」

「なるほど…サキュバスみたいなモノだな」

「それだろうな…」

哀れな翔一…明日にはミイラとなって発見…だな。うん、こんな事前にも言ったよな？

「それでは皆さん、御機嫌よう…翔一君？帰ったら楽しみにしてますよ？」

「あ、ははは…」

から笑いが響く。時計を見るとスタジオを借りれる時間になっていた。

「つて、龍？真汰は?!」

「いるぞ」

いつの間にか居たんだな。

「楽しい修羅場だったぞ」

「楽しくねえよ…」

もう何が何なんだか…

「ただいまー」

俺は練習を終わらせて家に戻ってきた。自分の部屋に入り荷物を置いてリビングに入る。
するとまた何かを忘れている感じがした。

(んー…?)

しかし分からない。するとインターホンが鳴り響いた。
俺は玄関に向かいドアを開ける。

「よ〜し〜き〜…」

「うわあ?!」

びっくりさせんな、穂奈美?!俺は前髪をかきあげて顔を見る。

「あれ程鍵をプランターの下に隠しておいてって言ったのに…」
「あ!」

そっだ、それだよ。すっかり忘れていた。

「すまん…忘れてた」

「何よ…今芳樹の部屋に入ったら浮気相手いるのかしら?」
「いないから!」

こちら辺から冗談だよな…うん。証拠として穂奈美を部屋に連れ込んだ…悪い意味は無い。

「ちとと…」

穂奈美は俺のベッドに乗ってゴソゴソと服を脱ぎだした。

「つて、何故に?!」

俺は慌てて後ろに向いてやり過ごす。振り向いて出口があるならいいのだが生憎いた場所が悪くてドアとは正反対の位置にいる。

「や、私を忘れられないように…」

「やめい!」

俺は変態とかエッチとか言われるのを恐れず振り向いて穂奈美の頭を叩いた。振り向いた瞬間に白いモノが…いや、現在進行形で見えている。

「エッチねえほれ」

「見せびらかすなよ?!」

やってることが恋人同士の話では無い気がしてきた。

「ねえ、見たわよね?私の?」

「見てないから」

これに関しては何と無く見たとは言いたく無かった。危ない匂いが漂っている。

一周曲（前書き）

二年生編スタートです。

美弥ちゃんの受験は番外編か外編でやりたいです。

一周曲

(6:30:)

今日から新学期…昨日まで穂奈美や翔一達と馬鹿騒ぎをしていたため少し所かなり寂しい気もする。

意識を少しずつ覚醒させて行くと部屋に誰かがいる気配がした。こっちに向かっている様だ。って、乗ってきた。

「芳樹…起きて」

穂奈美だ。どうやら起こしに来てくれた様だ。

返事をしよう…としたがやめておく。いい事を思いついたのだ。

「む…起きない。キスするぞ」

するぞと言っておきながら近づいてくる顔の気配。

いつもなら拒んだり焦らしたりするけれど…今日は志向を変えてみる。腕を密かに動かして穂奈美の背中に腕を回す。

「え…ん?!」

ガッツ!と言う音を立てた。歯と歯をぶつけてしまった。

「痛いわ…芳樹酷いわね」

「…予想外だったな」

思わず笑い合い、今度は普通に。普段からしている…と言うか穂奈美がして欲しいと言ったので毎日してるのだが慣れてしまった。

行為自体には慣れたけど心臓は荒ぶっている。ドキドキが止まらないのだ。

「今日から学校ね」

「そうだな…楽しみか？」

「それはそうよ。もしかしたら芳樹と同じクラスかもしれないんだから。芳樹は…？」

「そうだな、同じクラスになれたらいいよな」

そう言つて頭を撫でて立ち上がる。これじゃ俺もすっかりバカツプルの仲間入りだ。

着替えて顔を洗いいりビングへ。穂奈美は鼻歌を歌いながらパンツとスプを持ってきた。俺はスプーンを用意して椅子に座る。

「いただきます」

そうして俺はスプーンを手に取る。穂奈美は俺の事を凝視している。なるほどそう言う事が。

「…うん。あっさりしてて美味しいよ」

「そう？良かったわ」

そう言つて穂奈美も食べ始める。何ともない、朝の風景だ。

「…私達この雰囲気慣れたわね」

「そうだな…本当にいつのまにかだな」

「ま、まるで新婚さん…」

「自分でいっつておいて照れるな」

むっつりな穂奈美さん。すると凄く不機嫌そうな顔をした。

「時々、芳樹から私への愛を感じ取れないのよね〜…」

「…何だそれ？」

「私の事を凄く邪険に扱ってくるから」

「あ〜…そんな事はないから大丈夫だ」

「本当？」

「本当」

俺達は食べ終えて片付けて学校に向かう。窓が閉まってる事を確認して玄関を閉める。穂奈美は門の外で待っている。

「っと、お待たせ」

「別に大丈夫よ」

そう言うとは何か腕を絡ませてくる穂奈美。ふよんと当たるが意思を使って全力でその事に無視をする。

「今夜は…早い？」

「何を言ってるが知らんけど、今日は俺もお前もバンド練習だろ？」

「あらそうだったわ」

「…しっかりしてくれ」

でこぴんを軽めにして学校に向かう足を進める。

学校近くになると登校してくる学生がチラホラ見れた。

今日は始業式に兼ねて新クラスの発表もある。それが気になって早くきてるのだろう。いつも見ない人から見かける人までいる。あ、あのメガネに舌打ちされた。

「同じクラスになれたらいいわ」

「そりゃいいけど…」

毎日大変そうだな…と苦笑いしそうになる。変にでれっとしそうだと凄く怖い。

「何？」

「いや、何でもない」

そう言うと穂奈美が腕から離れていく。さみしくなった。

程無くして学校に着くとまずは驚いた。

「み、皆早えな…」

昇降口の所に張り出してある新クラスの名簿。それに群がる学生の群、群！群！

彼方方からやったーとかきゃーだの色々聞こえてくる。

それと恋人同士なのだろうか？抱き合ってるバカップル…

「幸平…」

「それに真琴ね…」

あの2人のラブっぷりには賞賛をする。お互いが大好きオーラをだしまくってるのだ。

「私達はあんなになってないと思いたいわ…」

それは灯台もと暗し…だ。もう手遅れな気がする。

ともかく確認だ。一組から八組まであるので一個ずつ見ていく。こ
ういう時はあ行楽だよな。

(さ…さ…坂田…坂上あつた)

俺は三組だ。さて…穂奈美はどうなったかな。

「芳樹」

「どこだ？」

「三組」

俺は思わず抱きつく…がやった事に気づいて腕を離す。

「同じクラスね…」

「本当だ」

「よろしくね」

「ああ」

俺達は抱きあ…いはしなかったが手を握った。

三組は俺と穂奈美の他に東雲委員長と風鳥がいる。

翔一は一組、銀央さんと何故か龍と幸平と真琴さんが二組。で、離れて八組が真汰だ。

丸谷さんは見た所六組のようだ。こう考えると俺って友達少ないよな。

「とりあえず、クラス内で不順異性行為はしないでね。やるなら公園でやれ」

クラスに入って穂奈美と話していると東雲委員長が来た。いや、元委員長だな。

「委員長、それ俺達がやる前提で話しているよな？」

「どうせ、お前らは銀央らへんと同じで毎日してるのだろう？」

「いや、まだなんだけど……」

「ヘタレ」

ぐさつとくる様な一言を突きつけられたがこらえる。

始業式に出て最初のHR。何と担任は軽音楽部の顧問だった。

「古利根です。一年間宜しく」

またもやペこり。教師なのにしっかりと頭を下げている。

その後、明日の流れとかを連絡して解散になった。

「と、坂上と赤尾。こっちに来い」

「はい？」

と帰る時になって古利根先生に呼び止められた。

別に帰ったらあんな事をしたりこんな事をするわけでもないが帰りたいと言う気持ち大きい。

「新入生の歓迎でライブやるだろ？」

「あ、はい。そうですね」

「それなんだが……また坂上の所……JACKだったか？最後になったから」

「へっ？！いや、先輩達は？」

「断固拒否……お前らがやれって推薦付きだ……別に虐められてるわけではないぞ？」

「はあ……で、それと穂……赤尾と何が関係があるのですか？」

「んで、赤尾は一番最初な。これは俺の手違いだから……すまん」

そう言っただけで謝られた。言い訳を聞くと凄く寝ぼけてるときにプログラムを作ったらしい。んで、早く終わらしたいがために頑張ってたからそうなんだと…

何と言う偶然…つか、ご都合主義。

「と言うわけだから…よろしくな」

そう言っただけで解散する。

穂奈美と別れて俺は家に戻った。穂奈美は一旦荷物を取ってきてくると言っていた。

それまで俺はベッドで横になって様と思ってゴロンと転がる。

静かで何も無い時間。聞こえるのは時計が動く音と車が通る音。こ

ういう何もない時間は色々な音に敏感になってしまう。

それらに全ての意識を委ねた。

「芳樹、起きて」

ポンと頭を叩かれて眠っていた事に気づく。俺の隣には穂奈美…がいる。

「時間よ？」

「…助かる」

ぎゅっと抱きしめて立ち上がる。

さあ、行くところか。

どうにも同じ時間帯に予約したみたいで集合場所に行くところと翔一と銀央さんが既にいた。

「こんにちは」

「よ…元気そうだな」

「そうだな…良かったじゃん、2人とも同じクラスになれて」

「緋奈達は残念だったわね」

今日あった事を適当に話す。

すると翔一はたまにはいい事を提案してくれた。

「お互いの練習風景公開しない？」

その事をやってきた他のメンバーに伝えると承諾されてやる事になった。

「ただいま」

穂奈美は俺の家なのにただいまと言いやがった。ここは俺の家だ。公開練習はなかなか良かった。穂奈美があんな綺麗な声をしているとは全く思わなかった。近しい人でも知らない事があると気づかされた。

「で、今日はどうするんだ？」

「どつするって…卑猥ねえ…」

「そつちじゃない。予定はどうなってるんだと聞きたいんだ」

「泊まらせて？」

泊まらせるときだよ。これどつすればいい？

「とりあえず、佐知子さんに電話した方がいいぞ？」

「大丈夫、お母さんはいいつて言われたから」

となると何も言えない。俺も穂奈美と一緒に居たいので無下に帰させたくはない。

「とりあえず、コンビニ行ってゴム買おう」

「黙れ、ムツツリ」

穂奈美を黙らせて母さんの部屋のベッドメイキングを始めた。ここで寝てもらおう。

「私ここで寝るの…？」

「ああ」

納得のいくベッドメイキングをすると穂奈美とリビングに降りた。

一周曲（後書き）

とりあえず土日月は休みます。

一から編集し直します。

静かな歌

リビングに降りると電話が鳴り出した。

「はいはいはーいっ」と

「何かしら、その掛け声は」

笑われてしまったが後で仕返ししてやろうと悪巧みをして電話に出る。

『やつ、芳樹』

「ああ、母さんか」

電話が伝える声は母さんだった。

「久しぶりだね、母さん」

「そうね。元気？」

「うん、相変わらず」

「…ギターやりすぎて近所迷惑にならない様にね？」

「大丈夫」

穂奈美は近寄って来て聞こうとしてたからスピーカーモードにして電話をテーブルの上に置く。そうして隣にいる穂奈美の肩を抱いた。びっくりしてピクツとなったが一瞬だけで後は俺にしなだれかかってきた。

嬉しくなっって穂奈美の頭の天辺にキスをする。

「で、芳樹？」

「え、何？」

俺が穂奈美といちゃついでる間に話は進んでいたようだ。

「ゴールデンウィーク行くからね」

「ああ、父さんも？」

「その予定よ。じゃあね、また今度！」

ぷつつと電話が切れる。

「よ、芳樹……」

「ん、ああ、ごめん」

俺は穂奈美の肩から腕を離そうとすると止められた。

「それはいいの……私の事言わなくていいの？」

「ああ、大丈夫だよ。どうせ言う事になるから」

「そうなの……？」

まあいいわと返されると穂奈美は立って冷蔵庫を開けた。

「……何も入ってないわ」

「買い物に行くか？」

「そうね……行きましょ」

俺は部屋にある上着をを穂奈美に貸して俺も同じやつを着る。単純に色違いなのだ。穂奈美が黒で俺は青。戸締りを確認して家を出る。

「行こうか」

「そうね」

俺達は自然に手を繋いで歩き始めた。

スーパーまで着いてきたものの何を作るかを知らない。知らないのに人參とか持ってきてても迷惑がられるだけだ。

「何を作るんだ？」

「うーん…野菜炒めにしようかな…ああ、魚もいいわね」

「両方でいいだろ…」

「そうね」

俺達は野菜売り場を先に回った。次に魚売り場。腐るといけないからね。

「ねえ、芳樹？」

「ん？」

クイクイと服を引っ張られたので振り向く。凄く可愛い。

「こう言う風に買い物してると…」

「新婚みたいだって言いたいのか？」

「ふふ…」

「自分で言わせておいて何照れてるんだよ」

思わず俺もつられて笑う。

そうしてレジを通りまた手を繋いで帰った。

「どう？一発？」

「いきなり何を言うんだ」

夕飯を食べて部屋でのんびりしていた時のことだった。

ムツツリの名を恥ぬ様な発言をしてくれた穂奈美。

「…言つとくけど気持ちいいものじゃねえぞ？」

「知ってるわ。でも、愛されてるって感覚になるんでしょ？」

真琴からの受け売りだけどねと笑って答えてくれる。

わかってるならいいけどそれではいそうですかと言ってするわけにはいかない。

「今日はやめておこう」

「…今日も。だわ」

「そうだな」

そろりと近づいてくる穂奈美。胡座のかいてる俺の足に乗っかってきた。

「…何をしたいんだ？」

そうして俺に体重をかけてくる。髪から甘く柑橘の香りがした。

「いいじゃない…愛が足りないのよ、愛が」

「何だよ、それ」

と言いながらもしつかりと穂奈美の体に腕を回す。
暖かくて柔らかくて…愛おしい。

「今度のライブ…私大丈夫かしら？」

「ん？」

「私、今度やるライブが初めてじゃない？…少し不安なのよね」

そう言うと抱きしめる俺の腕に穂奈美の頭が乗っかってきた。

「大丈夫だ。練習しつかりやってたならできるよ」

「そうかしら…んっ」

こっちの方を見てきた穂奈美に唇を合わせる。その時に少し抱きしめる力を強めた。

「…寝よっか」

「とうとう私は乙女でなくなるのね…」

「そっちじゃない。普通に寝るんだ」

「…分かったわ」

そう言うと穂奈美は俺のベッドに入っていく。

「どうしてそこに入るんだ？」

「たまには…許して」

俺はため息を吐くが思わずニヤツとしちまった。母さんの所の布団を片付けると俺はベッドに入った。

「こつち向いて寝て」

恥ずかしいと言う理由で穂奈美から背を向けてたが振り向かない訳にはいかない。

恥ずかしさを堪えて穂奈美の方に向く。

「芳樹、暖かいわ…」

「穂奈美は湯たんぼだな」

「…酷いわ」

「ごめん」

穂奈美はすつと俺の懐に入ってきたので俺は腕を穂奈美の体の下に回して抱きしめる。

「こんな事をされたら眠れなさそうだわ」

「興奮してるのか？」

「そうね…心臓バクバク言ってるわ。触る？」

「触らないから」

「えい」

穂奈美は反転して俺に背を向けると俺の腕に胸を押し付けてきた。

「…柔らかいな」

「そう？あまり意識したことないから分からないわ」

暗くて見えないが笑った気配を感じる。

「少しだけ揉んでみて？」

「ん…」

もうここらへんで理性は飛んでいたのだろうか。穂奈美の甘言に流されてしまった。

「痛い…」

軽く握ってみると痛いと言われた。慌てて俺は手を離す。

「ごめん…」

「いや、別にいいのよ…少し試したかっただけだから」

それからの沈黙。

穂奈美はこつちを振り向いて足を絡ませてきた。

「芳樹：今幸せかしら？」

「ああ、穂奈美がいるからな」

「私も…よ」

暗くて何も見えないが笑った気配がした。

それから色々と話してたが穂奈美はいつの間にか寝てしまったようだ。

「…おやすみ」

そういつて頭を撫でてお互いを暖めるように抱きしめた。穂奈美は無意識ながらも俺の服を握りしめた。

そんな彼女が可愛く感じながらゆっくりと目を閉じて眠った。

甘歌

「どうしよう…私緊張してきたわ…」

そんな緊張した穂奈美が出るのは新入生歓迎の意味を込めた軽音楽部ライブ。前回の終業式ライブを成功に収めてその二週間後の事。桜も散り、新入生が入ってきた頃にこのライブをやる事になっている…去年俺達が見たライブもこれの様だ。

「まあ、大丈夫だから」

「でも、今日は美弥も見てるのよ？」

そうなのだ。美弥ちゃんはこの狭丘学園に見事合格している。その喜びは穂奈美と俺にぶつけられた。何故に身内で無い俺に当てるのかわからなかったけど、喜びを受け止めてあげた。喜びのあまりキスをしようとしたのだがそれは穂奈美に叩き落とされていた。その時の恐ろしさは忘れる事ができなさそうだ。

「そうだよな…カッコいいお姉ちゃんを見せてやれよ」

「そんなのガラじゃないわ…」

ますます落ち込んでいく穂奈美。それほど緊張をしているというのとだろうか。

「ああもう…わがままだなあ…」

「そんな事を言われたって…」

そうこうしている間に時間はやってくる。少し目線をずらせば

「翔一君…ん」

「何だよ…その物欲しそうな顔は？」

「いいからこの唇に…」

「しません」

ぺちつと翔一は銀央さんの頬を叩いた。あ、何か震えている。

「私から襲ってしまえば良かったのですわ！」

「えっ？っ、どわ？！」

「ん、む、はあ…」

「ちよ…むっ、やめ！ん！」

見せられないー見せられないよー。軽く唇間に見るような情景を越して夜の光景になってるから…

「ふう…元気が出ましたわ」

「それはようござんした」

「続きは帰ったら…ですわ」

「嫌だ？！」

何かあの2人はしょっちゅうまぐわってる気がするが…もう目の前で何かをしないで驚かない自信がでてくる。しかし…これが。

「穂奈美」

「な、何かしら？」

そうつと唇を重ねる。

「んむ？！」

驚いた声を出す。俺は腕を腰と背中に回し力強く抱きしめる。周りにいた今日出るバンドの方々。は凄い驚いていたが…気にしない。

「いきなり何をするの？」

顔を離して赤いままだが極めて冷静に返してきた。それに愛おしさを感ずるのは惚気だろうか？

「どうだ？元気でたか？」

「…それなりに」

照れたのかぶつきらぼうに答える穂奈美。こいつはもしかして『くーでれ』と言うやつなのだろうか？

「終わったらまたしてあげるから」

「何よ、それだと私が芳樹にして欲しがってるみたいだわ」

「事実だろ？」

「…私をそんなに淫乱にしたてあげたいのかしら？」

とは言え満更でもなさそうな穂奈美。あのキテレツ部長の挨拶が終わり穂奈美達のバンドが演奏する順番が回ってきた。

「ほれ、行ってこい」

ぺちと叩いて促す。どこか柔らかいモノに触れたみたいだ。

「…お尻叩かないで」

「ああ、すまん」

なるほど…役得だ。本気でそう思った。

「それよりも…帰ってきてから…忘れないで」

そう言ってステージに立った。

ウチの恋人は人前ではムツツリでした。

穂奈美は無事に終えて戻ってきた。安心したのか達成感が得られたのか笑顔で戻ってきた。

「よ、お疲れ」

「私どうだった？」

「かっこよかったぞ。歌もピッチ外さなかったしな」

そうと口調だけはぶっきらぼうに返してきたが頬が上がってるので照れているのが凄く分かる。

「それより…ん」

「え…何？」

「約束よ…ん」

そう言うと目を閉じて唇をこっちに向けてくる。これはお誘いなのだろうか？するのはやぶさかではない。さっき人前で口付けてた人間が言う話ではないが人前ではもうこれ以上キスしたくない。俺は穂奈美の耳のそばに顔を近づけた。

「何？やられたいの？…変態だなあ…」

最後にふっと息を耳に吹きかけるのも忘れない。すると耳が弱い穂奈美は奇声をあげて腰から地面に落ちた。
…どんだけ弱いんだろうか。

「い、意地悪なのは嫌われるわよ」

「そっだな…控えるよ」

「もうやらないよとは言わないのね…」

俺は穂奈美に手を貸し立ち上がらせる。

「帰ったらもつと凄いのを期待してるから…」

腹いせだろうか。一瞬、穂奈美の小悪魔な所を見た気がするような笑みを浮かべた。

…って、凄いのって何だよ！

それから演奏は順調に進みついに俺達の順番が回ってきた。

「芳樹…頑張つてね」

「ああ」

そして近づいてくる穂奈美の顔を鷲掴みにする。

「乙女のしかも恋人の顔を鷲掴みに渡する彼氏はDVとして受け取つていいのかしら？」

「…何をするきだ？」

「キスしてあげようかと」

「遠慮します」

「いいから受け取れ」

そう言っただけ俺の手を取り払って唇を合わせられた。

(もういいや…)

異様に積極的な穂奈美に意識を委ねた。バカップルになるとはこう言うものかと悟ってしまった。

余韻に浸ったままにステージに立ってしまい、最初のカウントからのギターソロのリズムが狂ってしまったが…ここは割愛。

「ふふ…お疲れ様」

俺は荷物を自宅に置いて赤尾宅にお邪魔する。どうやら佐知子さんは出かけてるらしく今は俺、穂奈美、それに美弥ちゃんがいる。

「お姉ちゃん凄かったね…何と云うか…色っぽい？」

「美弥、それはだな…」

「ああもう…黙ろう」

俺はさっと穂奈美の口を手で塞ぐ。その際、唇がまだ動いてたから手のひらに穂奈美の唇が当たってくつくつたかった。

「何を隠してるのかなあ？芳樹兄？」

「いや、何でもないぞ？」

「そう？後でお姉ちゃんに聞こうつと…芳樹兄もギター凄かったねえ。あのバンドだけ凄く目立ってたよな」

「ぶは…うん、それはそうだろうな。聞いてて楽しいからな」

「そうそう。でね？周りにいた一年生の子が『カッコいい！』とか『誰あの人？すごく無い？』とか聞こえてきたよ？」

「美弥、その名前を教えてください。私がしばいてくる」

「しばいちゃだめ…全く、芳樹兄の事になると周りが見えなくなるんだから…」

「そそそ、そんなこと…ないぞ?!」

「めっっちゃ動揺してるから意味ないぞ、穂奈美？」

それよりも…と美弥ちゃんは話を切り返す。

「お姉ちゃん達…バツクでイチャイチャしてたでしょ？」

「…なっ?!」「…」

「あ、やっぱりそうなんだ」

つまりはカマをかけられたということか…

「ねえねえ…やってみてよ」

「や、やるか!?!」

「穂奈美…今更何も言えないぞ…」

この会話は佐知子さんが帰ってくるまで続いた。

少年誕生歌

今日の俺は凄くソワソワしている。何せ……

「芳樹、プレゼントだ!」

今日は俺の誕生日なのだ。ソワソワしないわけにもいかない。朝から幸平と真琴さんからは小物入れ、翔一と銀央さんからはセンスを感じる財布を貰った。

そして今、昼休みに龍から貰ったのだが……

「これ何?」

「作曲ソフトだ!」

ピシッと親指を立ててくる。小さな箱みたいなモノに『猿でもできる! 簡単作曲ソフト』と書いてある。

「……バカにしてる?」

「と、とりあえず拳を降ろせ!」

拳を握ったのは冗談だがどうしてこのソフトを渡してきたのだろうか? 将来の為に少ない確率の方だと作曲しろと言われるのか。

「作曲宜しく!」

「確立少ない方だった!」

「な、何?!」

「ああ、ごめん。こっちの話」

思わず心の声が漏れてしまった。

「次の文化祭ライブで俺達の曲でやろうと提案したんだ」

「俺の意見は無いのか？」

「いや、ごめん。真汰にしか言ってるねえんだわ」

そりゃ伝わらんわ。

「ん、それじゃ翔一も知らねえだろ？」

「さっき伝えた」

「さっきなのね」

「ああ、さっきだ」

計画立ててくれ……本気で思った。

「俺がやればいいのか？つか、使いまわしでよくないか？ソフトウエアって普通に使いまわしできるだろ？」

「それだけじゃないから……バラバラになるといけないから後でゆっくりと開けてくれ……じゃあね」

「ああ、ありがとな」

そう言うと龍は去って行った。この中身が凄く気になる。開けようかと箱に手をかけるけどやっぱりやめた。ワクワクは最後まで取っておこう。

気分が良くなり（元々良かったが）教室に戻るけどある事が頭に残っている。

（穂奈美から貰ってないな……）

肝心の恋人の穂奈美から貰っていない。ベタな感じに『先に帰ってて！』とか言われて無いし何かを作っているような気配が全く無い。

それも昨日の夜は帰らせたのは22時を越していたからあの時から何かを始める事なんてできないはずだ。ここで行き着くのが一つの事。

(俺の誕生日を忘れている?)

知らない……って事はない。以前に付き合ってた数日後、お互いの細かい情報を知らない俺達はその時は今更だろと思いつながらも教えあった。その時に穂奈美から変態チックな話をさせられたが今はそんな事を思い出してる状況ではない。恋人に忘れられる、そんな事があれば俺は怒りはしないけど相当落ち込むと思う。

「芳樹、どうした?」

そんな俺を見て話しかけてきたのは東雲委員長。凄く心配そうにしてくれている。

「いや……何でもないよ。大丈夫」

「そうか?」

「ああ、大丈夫だから」

何かあったら言えよと女なのに男らしい事を言ってる東雲委員長は席に戻って行く。

俺も自分の席に座ると穂奈美のいる方を見る。クラスメイトと楽しそうにお喋りをしている穂奈美。

(穂奈美に言うべきか……)

それじゃただのプレゼント催促野郎だ。言うなればバレンタイン直

前に慌てて女の子に優しくしてる男子。

(どうするかな……)

今の俺は改善策が全く見られない。

昼休み、バンドのミーティングを兼ねて昼食を俺のクラス、三組で取る。

「龍？新しく俺達が曲を作るのか？」

「うん、新しい事をしてみようと思ってるね」

「お言葉だが……作曲って作詞より遥かに難しいぞ？テンポを考えてメロディーを考えてからそれぞれのポジションを決めていくんだぞ？」

真汰からの辛辣かつ的確な言葉。似たような事を言おうと俺も口を開いたのだが言葉を発せなかった。どうにも喉が詰まる。

その間にも話は進んでいく。何度も俺は意見を言おうとしたが言葉が出てこない。忘れられているという心の空虚感が俺のする事を全て妨げている、そんな感じがする。

「分かった、とりあえずやって見る方向で……どうした、芳樹？」

「えっ？」

心配そうに見てくる真汰。それに気づいた翔一と龍。

「そういえば、今日何も言ってないよな？大丈夫か？」
「あ、ああ、大丈夫だ」

俺は重い体で立ち上がりミーティングを終えて帰った。
教室に帰るとまた穂奈美は楽しそうに話していた。凄く輝いて見えた。

授業は終わり俺の事を気を使ってくれてスタジオ練習は今日は無い。

「それでその時にねー」

穂奈美は色々と話している。時々我に返って返事をするが返事が投げやりになっている。

そして繋がれた手。いつもなら暖かく、繋がる安心感を得られているのだが今日は何もない。感じるのはただの手。穂奈美の手と言う感じがしない。

（凄く落ち込んでるな）

自分の陥ってる現状を客観的に捉えられて思わず俺は苦笑をした。それを穂奈美は聞いていると思ったのだろう。さらに話が進んでいった。

穂奈美と一緒に俺の家に帰りリビングにいる穂奈美に一言声をかけて自室に入る。机に向かい、籠から貰った箱を開ける。中から出てきたのは作曲のソフトとおにぎり型と呼ばれる白いピックが二枚、それに一枚の紙。

(何だろうか…)

気になって見てみる。そこには『もう17歳か、おじさんだな！それは置いて、これが俺達の気持ちだから。些細なモノだけれど、受け取ってくれたら嬉しい。龍&真汰』と書かれている。

ピックを見ると一枚の両面ずつに『青春だ！』と『Rock!』と書かれており、もう一枚は片面だけに『Jack』と書かれている。寄せ書きみたいになってるが嬉しくなった。俺にはいいプレゼントだ。

「芳樹、あらそれ見たのね」

「ああ、穂奈美」

そして一気に現実に戻る。穂奈美は俺が買ったピックの一枚を裏返してペンで『I Love U H・A』と書いた。

「…これが私からの一つ目のプレゼントよ」

そう言っただけ俺に装飾をしたピックを渡す。

「……え？」

現場把握ができない。どういふことだろうか？

「このピックを入れたのは私なのよ？」

「え、でも龍が……」

「権大寺くんの事ね。紗東くんをお願いしてこれを入れて買ったの。なかなか粋でしょ？」

「はは……粋というか」

思いつきり騙された。影でひっそりと動いてたようだ。しかも、絶対に俺に諭されないように潜みながら。

「ふふふ……ドッキリ成功ね」

「てつきり忘れられたかと思ったんだからな」

「好きな人の誕生日を忘れるわけがないわよ、絶対に」

それよりもまだあるからと言って俺をリビングに連れて行く。リビングに入ると小さいながらもケーキが置いてあった。

「大変だったわ、ばれないようにケーキを作っただけでも溶けないように保存しなきゃだめだし」

「ありがとう」

「そう言ってもらえるとやった甲斐があるわね」

俺は穂奈美を抱きしめると嬉しそうに穂奈美も腕を回してくれた。

「それにまだあるのよ?」

「こんなにあるの?」

「そうよ……はい、どうぞ」

穂奈美から手渡されたのはリングネックレスだ。

「これ、私も買ったのよ?」

そう言ってゴソゴソと服の中を漁って首に下げた同じリングネックレスを見せてくる。

どうでもいいが服の中を漁る時ワイシャツのボタンを取ってたので下着がチラッと見えている。

「ほら、下着を見てないでネックレス付けてみて！」

「こつ言う時は付けてくれるんじゃないのか？」

「それは女に対するシチュエーション……いや、やるわ」

そう言っただけの手からネックレスを取って首にかけてくれる。そして穂奈美の腕はそのまま俺の首に残っている。つまり、抱きついて

いる。
「じゃあ、おまけ」

可愛らしい音を立ててキスをされた。照れたのかすぐに離れて行った。

俺は貰ったリングネックレスを見るとリングの内側に『Yoshi ki & amp; Honami』と彫られているを見た。

「ありがとう……」

「あら、泣いてるの？」

「嬉しくてな……それよりもケーキを食べよう」

「そうね、スポンジから全部手作りだから味わってね」

こつして暗い気持ちを全て払拭して、幸せな誕生日を過ごした。

少女狂奏

初めに言おう、ゴールデンウィーク最終日、つまり5月5日は穂奈美の誕生日だ。穂奈美の様に分からないように仕掛けるといふ器用な事は全くできない。

「私の誕生日プレゼント、楽しみにしてるわ」

俺が言えなかった言葉を普通に言ってしまうか、穂奈美さん。

今日はゴールデンウィーク初日の夕方。穂奈美が家に来ているのだがずっと本を読んでいる。どうやら面白い本らしく時々、ふふつと笑っている。

そして俺は……

(何がいいか……ああ、ここはもう半音高くして、ネックレスはあるし……ああ、テンポおかしい)

思考がグチャグチャ。龍に頼まれた作曲と穂奈美へのプレゼントをどうするかを考えていてさっきから作業が進んでいない。

「ああ、もう……」

俺は頭を掻き筆りパソコンを閉じる。一回、頭の中を整理しよう。

「あら、終わり？」

「疲れたから休憩する」

「ああ、何しようかな……」

とりあえず、音楽から頭を離そう。俺はカーペットにゴロリと転がる。いつも寝てる時に見ている天井のシミが見える。

「芳樹」

「パンツ見えるぞ」

「ワザとよ。それよりも頭をあげて」

俺は言われるままに頭をあげる。そうすると頭の下に何か潜り込んできた。

「膝枕つてのをしてみたかったのよ」

「何をこっぴどくさしい事を……」

目に映るのは逆さまになっている大好きな恋人の顔。俺は穂奈美の頬に手を伸ばして撫でた。

「ったく……大好きだ」

「珍しいわね、あなたがそういう感情表現をするなんて」

「たまにはいいだろ？」

「そうね、いつもなら有無を言わさず私の事を抱くからね」

「抱くじゃなくて抱きしめる、だ。言葉がすこし違うだけで意味が全く違うからね」

「気にしない気にしない」

「気にしてくれ」

そんな会話の中、頭には柔らかい太もも様がある。骨ばってなく、とても柔らかい。いやでも女の子という事実を見させられる。俺は思わずセクハ……ももに触れていた。

「ひゃっ!?!?」

「ここも弱いのか？」
「う、うるさい」

バシッと頭を叩かれたので渋々触るのをやめる。
今度、からかう時に触ろうかと思っただがやめる。からかう為に恋人
とは言え、女の子の太ももに触るとかどこの変態だ。

「触ったら承知しないわよ？」

「大丈夫だ、そんな事はないから」

「……でも触って欲しかったり」

「どっちなんだよ」

「複雑な乙女心って所かしら」

まあ、分からなくはない。ある程度は興味を持って欲しいという
事だろうか。

「そういえば、これって膝枕よりもまくらよね？」

「そうだな、膝枕ではないな」

「……膝にのる？」

「痛そうだからやめとく」

骨をゴリつとしそうだ。

そんな事を話していると睡魔が襲ってきた。しかし、話してる時に眠
る訳にはいかない。

するとそんな俺を見て目を手で覆ってきた。

「寝ていいから。眠いでしょ？」

「でも……」

「芳樹の寝顔でも眺めてるから」

「人に寝顔を見られると恥ずかしいんだぞ？」

「今更何よ」

そう言って笑う。確かにそうだな。今まで何回か同じベッドで寝てるのだ。今更、だ。

「お休み」

「うん」

そうして覆われた手のなかで目を閉じる。

柑橘の香りと暖かさに包まれて……俺はすぐに眠れた。

(ん…)

どのくらい寝ただろうか。手足に痛みを感じて目が覚めた。体を起こそうと腕を使おうとすると動かない。

「あら、目覚めたのね」

くふふと嫌な笑い方をする穂奈美。動かない腕を見てみると縄で縛られている。

「って、何で?!」

咄嗟に抜け出そうと試みるがどっこい。取れな
い。

そりゃそうだと突っ込みたいが余裕がない。

「な、何をするんだ？」

噛んだがどうにか冷静に聞く事ができた。

「いつまでも何もされないで安心できると思う？」

「はい？」

思わず敬語。何もしないって？穂奈美は近寄ってきて俺を胡座をかかせた。しかし、相変わらず手足は縛られている。そして俺の内腿を触れてきた。

「って、はしたない！」

俺はその腕を振り払う………意思是持てたが動かない。

「はしたない、じゃないわ。痴女よ！」

「なお、悪いわ！」

その言葉を発しながら俺のベルトを取った。

「……別れてくれ」

「冗談はやめて。本気なら一生監禁してやるわ」

「……ごめん」

別れてくれは冗談だが穂奈美の返答は本気に聞こえた。この子はヤンデレの素質があるのじゃないのか？
怖いからやめて。

「いつまでも何もされないのは……不安なのよ」

「あゝ……うん」

そりゃ思春期の男の子だもの。そういう気持ちは無くはないけど穂奈美にその気持ちをぶつけようとは思ってない。だから俺は我慢してたのだが、穂奈美も耐えていたようだ。

「……分かった、相手するから……まずは縄を取って」

「やだわ」

「初めっからアブノーマルって勘弁してくれ！」

俺が叫び穂奈美が俺のズボンに手をかけた時、ドアが開いた。

「ただいま、ここに、いる？」

現場把握！

縄で縛られた俺。ベルトは床にある。そしてズボンに手をかける女の子が1人。

さて、どうなる？

「……見てるからそのままです」

「そう来たか！」

「じゃあ、やるわよ」

「いや、待てよ」

とりあえず、縄をほどいてくれ。

「アハハハ！そりゃ面白いわ！」

朗らかに笑ううちの母さん。事実を聞いた母さんは大爆笑した。

「でも、朴念仁の芳樹がこんな美人さんを捕まえるなんてね……想像できなかつたわ」

「美人つて……」

照れる穂奈美。もう打ち解けてしまった。

「樹里さん、宜しくお願ひします」

「いやいや、穂奈美ちゃん。このバカの事よろしくね」

樹里つてのはうちの母の名前。ほら、芳樹の『樹』が入ってるだろ？父さんは『芳』が入ってるけど、今はいいや。

「そういえば、父さんは？」

「もう帰ってくると思うけど……」

するとガチャっという音がして俺の顔を年老いた顔だ。

「ただいま、芳樹……あれ、こちらの女の子は？」

「ふふふ、芳光。芳樹の彼女だつて」

「本当かい？あ、今名前が出たけれど僕は芳光だから。分かるとおり芳樹の父親ね」

「あ、赤尾穂奈美です」

そう言つて手を握る。しかし、赤尾と聞いた時、首を傾げたが普通に握手した。

赤尾という名前に覚えがあるんだろうなと勝手に結論付けた。

「ご飯を食べて行きなさい。積もる話はそこでしよう」

「え、でも……」

「ここで普通に食べるだろ？気にするな」

「あら、連れ込んだのね？いやらしい」

「避妊はしてるよね？」

「黙れ、馬鹿親」

「あう……」

夕方の会食は俺達の事を徹底的に聞かれました。
恥ずかしさがマックスです。

「恥ずかしいけど……何か来てる」

「穂奈美、戻って来い」

俺は穂奈美の頭を叩く。弱いとも強いとも言えないぐらいだ。

「痛い……もっと」

「ダメだ、こりゃ」

旅の歌（前書き）

あ、ユニークが1000人超えました。
PVも10000行きそうです。

ありがとうございました。

旅の歌

ゴールデンウィーク二日目。俺達はキャリーバッグを引きずり、とある温泉旅館に来ていた。

「凄いわ……侘び寂びを感じるわ」

「穂奈美、侘び寂びの意味を言ってみて」

「……………」

「おい、どうしてそこでシャツに手をかける？」

「え、答えられなかったらシャツを脱ぐんでしょ？」

「誰が言った」

「芳樹が心の中で」

「微塵に思っただけよ」

とりあえず閉めろと思って開きかけているシャツのボタンを閉める。穂奈美が閉めたんじゃない。俺が閉めたんだ。お陰で柔らかい所に触れてヒヤッハー！

はしなかった。ないない。

「……………もっと大きかったら触ってくれるかしら？」

「今、いる場所を考えてくれ」

後、それ以上大きくならないでくれ。自称Dカップ。

「しかしなあ……………」

どうしてここに泊まりに来たのか。そんな事を思い出してみる。

「え、穂奈美ちゃん明後日誕生日なの?!」

それまた夕食後のお話。母さんが穂奈美に誕生日はいつなんだと聞かれて答えて今の驚きが返って来た。まあ、驚くだろう…いや、どうだろう?分からない。

「よ、芳樹。あんたプレゼントは?」

「……お恥ずかしながらまだ決めてない」

「ばっか!」

スコーンと母さんに叩かれた。いや、結構女の子に贈り物って気を使うぞ?この間の髪留めゴムだってどんなに悩んだ事か。因みに今は手首についている。どうやら、料理する時と本を読む時だけのようだ。って、これじゃ常に穂奈美の事を見ていたという事になるな……事実だしま、いつか。

「ネックレスとかは?指輪は?」

「…俺の誕生日の時にくれたよ」

それも付けている。穂奈美は常に付けているようだ。別にシャツの中に手を通っ込んで確かめた訳ではない。たまたま首元に銀のチェーンがあるのが見えただけだ。ついでに鎖骨が見れて嬉しかった。

「はあ……私がいい所あるからそこでどうにかしなさい」

そついうと電話に向かった。どこかにかけている。

「芳樹？」

くいつと裾を引つ張られ穂奈美を見る。大好きな子が困っているような顔をしている。

母さんは誰かと話している。

「…………今更だけど行く？」

「芳樹が行くなら」

そう言つて俺に寄りかかる。髪からフワッと柑橘の香りを漂わす。ギョツと肩を抱きしめると見事なタイミングで母さんは電話が終わった。

「あら、そのまま続けていいわよ」

「分かった、じゃあこのままで」

「…………ごめん、冗談だから」

すつと腕を外すと穂奈美はちょっと不機嫌な顔をして俺の右腕に穂奈美の腕を絡ませてきた。

「…………息子にこんな美人さんをどうやって虜にしたのかしら」

「自然にそうになりましたよ？」

「穂奈美ちゃんも異様な惚れっぷりねえ……………」

それはいいけど、と話を片付ける。

「おばあちゃんが温泉旅館やってるのは覚えている？」

「ああ、前に行ったよね」

うちの母方の祖父母は温泉旅館をやっているのだ。意外と認知度はあ

るらしいが詳しい事は知らない。

「予約してあるから行ってきなさい」

「……はあ?!」

こんな感じでした。

と言うわけで時間は戻って祖父母の運営する温泉旅館の前。穂奈美が『侘び寂びを感じる』と言ったとおり日本家屋の旅館だ。有名なのはどうにも温泉が凄く気持ちいいらしい。でも、あまり知らない。身内だからと言ってなんでも知ってるわけではない。で、予約が取れた理由なんだが既に両親で行く予定だったのをわざわざ俺達に明け渡してくれたのだ。聞こえはいいかもしれないがまた子供をほっぽり出してどこかに行くつもりだったとしか捉え様がないので素直に喜べない。

「ほら、早く中に行きましょう？」
「あ、ああ」

穂奈美に手を引っ張られ戸を潜る。中に入るとチリンと鐘がなった。日本家屋なので木造となってるため木の独特な匂いが鼻に来る。

「いらつしゃいませ……あら、芳樹じゃない！おじいさん、芳樹が美人さんを連れて来たわよ〜！」

「はいはい……おお、芳樹。大きくなつたな！」

ガシガシと頭を撫でて来る。爺ちゃんは笑ってるけど俺は凄く痛い。

「で、こちらさんは？奥さん……じゃないよな。確か今年で17だもんな」

俺は穂奈美に自己紹介をするんだという念力を送る。

そんな事で伝わるはずがないので口で自己紹介って言った。

「あ、赤尾穂奈美……です。よ、芳樹くんとお付き合いさせていただいてます」

「そうかそうか……孫をよろしく頼むな」

そう言っでガシガシと穂奈美の頭を撫でる。初めから手荒い歓迎を受けました。

場所はちょっと変わって旅館の部屋。

うちの両親が借りようとしてたのを貰ったという事はやはり2人で

一つの部屋に入る事になるので

「今夜は布団は一つでいいかしら？」

「よくないから」

つまりはこういう事になりますよね。

たまに穂奈美と寝泊まりはするので緊張はしないが普段は家でここは旅館だ。ハメを外しかねない。一応、予防策で避妊具は買った。ただ、穂奈美が見ると調子に乗るので目の前では買わず。

「芳樹、和服だ！和服がある！」

「お、こういうのを見ると旅館らしいな」

風呂を上がったならこれを着るという事か。ちょっとたのしくなってきた。

「これ着たいから風呂に行こう！風呂に！」

「そうだな、行くか」

まだ15時だけど、いいだろう。むしろ空いてもいいかもしれない。俺達は着替えの和服を手にとって浴場に向かう。

更衣室は男と女に別れている。

「出たらここで待ってて」

「分かったわ」

そいつって別々の暖簾をくぐった。

着ているものを全部脱ぎ、軽くたたんで籠に入れ風呂へ。

「露天だ……」

俺は思わず声に出してしまった。広いわけではないが10人ぐらいは入れるような露天風呂。とりあえず、入ろうと思って体に湯をかけて風呂に浸かる。

「湯加減はどうかしら？」

「ああ、結構気持ちいい……って、は？」

聞こえてきたのは穂奈美の声。振り返ると生まれたままの姿の穂奈美の体。つまり真っ裸なのだ。周りが暗かったり湯気で体が隠れてるわけでもない。昼間で湯気も意味をなさず穂奈美の体全てが見えてしまっている。

（何で、男湯に?!）

俺が出てきた方を見ると二つ暖簾があった。一つは男と書かれた暖簾。二つは女と書かれた暖簾。

「分けてる意味がねえよ！」

現実の理不尽さに全力で嘆いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3897y/>

少年少女のソノリティ

2012年1月14日08時46分発行